福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集

入部（いるべ） Ⅶ

―東入部遺跡群第7次調査報告（1）―

1997

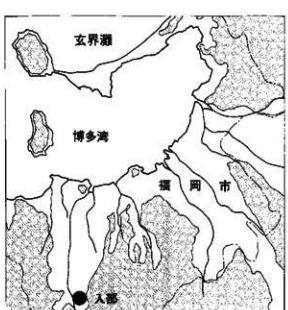
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集

IRU BE

入部 Ⅶ

－東入部遺跡群第7次調査報告(1)－



9312 HGI - 7

1997

福岡市教育委員会

1　東入部遺跡群第7次調査地点(南上空から)

2　出土陶磁器

232	61	108
193		194
	307	264

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から実施されてきた、早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成５年度の東入部遺跡群第７次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成９年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

例　言

1　本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、東入部遺跡群第７次調査（1993年度）の43・44・45・46・50区の成果を報告するものである。残りの47・48・49・51・52区は次年度に報告を予定している。

1　東入部での県営圃場整備に伴う発掘調査の報告としては以下の６冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、７冊目にあたることから書名を『入部Ⅶ』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990
『入部Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991
『入部Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集　1992
『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集　1993
『入部Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集　1995
『入部Ⅵ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集　1996

1　本報告に用いた遺構実測図は濱石哲也、榎本義嗣、英豪之、黒田和生が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、榎本が撮影した。なお空中・航空写真は有限会社空中写真企画（樽瞳夫）による。

1　出土遺物の実測、写真撮影は林田憲三が行った。

1　本書に関わる製図は井上かをりがあたった。

1　本書の作成には他に緒方まきよ、亀井律子、樋口久子が関わった。

1　本書に用いた方位は磁北である。

1　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1　本書の作成作業の一部は国庫補助を受けて行った。また作成事業は埋蔵文化財課（課長　荒巻輝勝、第１係長　横山邦継、第２係長　山口譲治、庶務担当　内野保基）が担当した。

1　執筆は５－１を榎本、他は濱石が担当した。

1　編集は濱石が行った。

本文目次

本文頁

1　はじめに……9
2　遺跡の立地と歴史的環境……10
3　調査組織……13
4　調査経過と概要……13
5　調査の記録……16
5－1　43区の調査……16
5－1－1　概要……16
5－1－2　遺構と遺物……16
5－1－3　小結……28
5－2　44区の調査……28
5－2－1　概要……28
5－2－2　遺構と遺物……29
5－2－3　小結……42
5－3　45区の調査……42
5－3－1　概要……42
5－3－2　遺構と遺物……43
5－3－3　小結……76
5－4　46区の調査……77
5－4－1　概要……77
5－4－2　遺構と遺物……77
5－4－3　小結……94
5－5　50区の調査……94
5－5－1　概要……94
5－5－2　遺構と遺物……94
5－5－3　小結……96

図版目次

巻頭図版　1　東入部遺跡群第７次調査地点（南上空から）
　　2　出土陶磁器

図版１　1　43区全景（南上空から）
　　2　43区全景（東上空から）
図版２　1　43区0101掘立柱建物周辺（上空から）
　　2　43区0007土坑周辺（上空から）
図版３　1　43区0101掘立柱建物（南から）　2　43区0102掘立柱建物（東から）
　　3　43区0103掘立柱建物（南西から）　4　43区0003土坑（北から）
　　5　43区0004土坑（東から）　6　43区0029土坑（西から）
図版４　1　43区0006廃滓坑（東から）　2　43区0007廃滓坑（北から）
　　3　43区0009廃滓坑（南から）　4　43区0010廃滓坑（東から）
　　5　43区0012・0013・0017廃滓坑（東から）　6　43区0012廃滓坑（北から）
図版５　1　43区0013廃滓坑（北から）　2　43区0017廃滓坑（北から）
　　3　43区0015廃滓坑（北から）　4　43区0015・0026廃滓坑（東から）
　　5　43区0024廃滓坑（北から）　6　43区0002古河川土層（北から）
図版６　1　44区全景（南上空から）
　　2　44区全景（東上空から）
図版７　1　44区北東部（南上空から）
　　2　44区北東部（東から）
図版８　1　44区0261～0264掘立柱建物（東から）　2　44区0265掘立柱建物（南から）
　　3　44区0266掘立柱建物（南から）　4　44区0267掘立柱建物（南東から）
　　5　44区0153土坑（南から）　6　44区北西部土坑（東から）
図版９　1　44区0164土坑（北から）　2　44区0170土坑（北から）
　　3　44区0173廃滓坑（南から）　4　44区中央部0156溝（北から）
　　5　44区0252・0253溝（西から）　6　44区0002古河川土層（北から）
図版10　1　45区全景（西上空から）
　　2　45区全景（北上空から）
図版11　1　45区北東部（北上空から）
　　2　45区北西部（北上空から）
図版12　1　45区0851掘立柱建物（西から）　2　45区0852掘立柱建物（南西から）
　　3　45区0853掘立柱建物（南から）　4　45区0854掘立柱建物（南から）
　　5　45区0855掘立柱建物（南から）　6　45区0856掘立柱建物（南から）
図版13　1　45区0857掘立柱建物（東から）　2　45区0858掘立柱建物（南から）
　　3　45区0861掘立柱建物（南から）　4　45区0862掘立柱建物（南から）
　　5　45区0863掘立柱建物（東から）　6　45区0864掘立柱建物（南から）
図版14　1　45区0865掘立柱建物（西から）　2　45区0866掘立柱建物（南から）
　　3　45区0867掘立柱建物（南から）　4　45区0868掘立柱建物（南から）

	5	45区0869掘立柱建物（南から）	6	45区0870掘立柱建物（西から）
図版15	1	45区0871掘立柱建物（南から）	2	45区0872掘立柱建物（南から）
	3	45区0873掘立柱建物（南から）	4	45区0874掘立柱建物（南から）
	5	45区0875掘立柱建物（南から）	6	45区0876掘立柱建物（南から）
図版16	1	45区0878掘立柱建物（南から）	2	45区0821竪穴住居（西から）
	3	45区0822竪穴住居（南から）	4	45区0823竪穴住居（東から）
	5	45区0824竪穴住居（東から）	6	45区0825竪穴住居（北東から）
図版17	1	45区0825竪穴住居竈（北東から）	2	45区0826竪穴住居（南から）
	3	45区0827竪穴住居（西から）	4	45区0803土坑（南から）
	5	45区0806土坑（南から）	6	45区0819土坑（南から）
図版18	1	45区0838土坑（南から）	2	45区0810廃滓坑（南から）
	3	45区0841廃滓坑（東から）	4	45区0301溝（南から）
	5	45区0818溝（南西から）	6	45区0002古河川（南から）
図版19	1	46区全景（北上空から）		
	2	46区全景（南上空から）		
図版20	1	46区北部（南上空から）		
	2	46区北西部（北上空から）		
図版21	1	46区0401掘立柱建物（北から）	2	46区0402掘立柱建物（東から）
	3	46区0403掘立柱建物（北から）	4	46区0404掘立柱建物（南から）
	5	46区0405掘立柱建物（東から）	6	46区0407掘立柱建物（北から）
図版22	1	46区0408～0411掘立柱建物（南から）	2	46区0412掘立柱建物（南から）
	3	46区0413掘立柱建物（南から）	4	46区0414掘立柱建物（南西から）
	5	46区0305土坑（南から）	6	46区0310土坑（北から）
図版23	1	46区0333土坑（南から）	2	46区0338土坑（南から）
	3	46区0393土坑（南から）	4	46区0631・0632土坑（西から）
	5	46区0309廃滓坑（北から）	6	46区0319廃滓坑（南から）
図版24	1	46区0336廃滓坑（北から）	2	46区0339炉（北から）
	3	46区0342炉（西から）	4	46区0321周溝遺構（南から）
	5	46区0301溝土層（北から）	6	46区0301・0672溝土層（北から）
図版25	1	50区全景（北から）		
	2	50区全景（南から）		
図版26	1	50区3003土坑（東から）		
	2	50区3009土坑（南から）		
図版27	出土遺物Ⅰ			
図版28	出土遺物Ⅱ			
図版29	出土遺物Ⅲ			
図版30	出土遺物Ⅳ			

挿図目次

本文頁

1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1:50000）……11
2図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1:10000）……12
3図　東入部遺跡群および第7次調査地点（縮尺1:3000）……折込
4図　第7次調査グリット配置図……15
5図　43区0101・0102・0103掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……17
6図　43区0003・0004・0027・0028・0029土坑実測図（縮尺1:40）……18
7図　43区0006・0007・0009・0010・0012・0013・0014・0015・0024・0026製鉄関連遺構実測図(縮尺1:40)…19
8図　43区0005溝，0002・0016古河川土層断面実測図（縮尺1:40，1:60）……21
9図　43区出土遺物実測図1（縮尺1:3）……23
10図　43区出土遺物実測図2（縮尺1:3）……24
11図　43区出土遺物実測図3（縮尺1:3）……25
12図　43区出土遺物実測図4（縮尺1:3）……26
13図　43区出土遺物実測図5（縮尺1:1，1:2，1:3）……27
14図　44区0261・0262・0263・0264・0265・0266・0267掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……30
15図　44区掘立柱建物・ピット出土遺物実測図（縮尺1:3）……31
16図　44区0151・0153・0154・0160・0161・0163・0164土坑実測図（縮尺1:40）……32
17図　44区0166・0170・0173・0174・0175・0180・0254・0255・0256・0260土坑実測図（縮尺1:40）……34
18図　44区上坑出土遺物実測図（縮尺1:3）……35
19図　44区0155・0156・0158・0169・0172・0179・0252溝，0002古河川土層断面実測図(縮尺1:40，1:60) 37
20図　44区溝出土遺物実測図（縮尺1:3）……38
21図　44区0002古河川出土遺物・表土出土遺物実測図（縮尺1:3）……39
22図　44区出土石・鉄製遺物実測図（縮尺1:2，1:3)41 ……41
23図　45区0851・0852・0853・0854・0855・0856・0857・0858掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……44
24図　45区0861・0862掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……45
25図　45区0863・0864・0865・0866・0867掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……46
26図　45区0868・0869掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……48
27図　45区0870・0871・0872・0873・0874掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……49
28図　45区0875・0876掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……50
29図　45区0877・0878掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……51
30図　45区0879・0880掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……52
31図　45区柱穴遺物出土状況実測図（縮尺1:20）……53
32図　45区掘立柱建物，ピット出土遺物実測図（縮尺1:3）……54
33図　45区0821・0822竪穴住居実測図（縮尺1:60）……55
34図　45区0823・0824竪穴住居実測図（縮尺1:60）……56
35図　45区0821・0822・0823・0824竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1:3）……57
36図　45区0825・0826竪穴住居実測図（縮尺1:60）……58
37図　45区0825竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1:3）……59

本文頁

38図　45区0827竪穴住居実測図（縮尺1:60）……60
39図　45区0826・0827竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1:3）……61
40図　45区0803・0804・0805・0807・0811土坑実測図（縮尺1:40）……63
41図　45区0806・0812・0813土坑実測図（縮尺1:40）……64
42図　45区0815・0816・0819・0832・0833・0834・0835・0836土坑実測図（縮尺1:40）……65
43図　45区0837・0838・0840・0842・0847・0931・1279土坑実測図（縮尺1:40）……66
44図　45区土坑出土遺物（縮尺1:3）……68
45図　45区0809・0810・0830・0841製鉄関連遺構及び出土遺物実測図（縮尺1:40，1:3）……70
46図　45区0301・0818・1670溝，0002古河川土層断面実測図（縮尺1:40，1:60）……72
47図　45区溝出土遺物実測図（縮尺1:3）……73
48図　45区0002古河川出土遺物実測図（縮尺1:3）……74
49図　45区出土石製遺物実測図（縮尺1:2，1:3）……75
50図　45区出土鉄製遺物実測図（縮尺1:2）……76
51図　46区0401・0402・0403・0404・0405・0406・0407掘立柱建物実測図（縮尺1：100）……79
52図　46区0408・0409・0410・0411・0412掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……80
53図　46区0413・0414・0415・0416掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……81
54図　46区掘立柱建物，ピット出土遺物実測図（縮尺1:3）……82
55図　46区0303・0304・0305・0310・0312土坑実測図（縮尺1:40）……84
56図　46区0332・0333・0334・0338土坑実測図（縮尺1:40）……85
57図　46区0393・0629・0631・0632土坑実測図（縮尺1:40）……86
58図　46区土坑出土遺物（縮尺1:3）……87
59図　46区0309・0316・0319・0335・0336・0339・0340・0342製鉄関連遺構実測図（縮尺1:40）……88
60図　46区製鉄関連遺構出土遺物実測図（縮尺1:3）……89
61図　46区0321周溝遺構及び出土遺物実測図（縮尺1:40，1:3）……90
62図　46区溝土層断面実測図（縮尺1:40，1:60）……91
63図　46区溝出土遺物実測図（縮尺1:3）……92
64図　46区出土石・鉄製品実測図（縮尺1:2，1:3）……93
65図　50区全体図（縮尺1:200）……94
66図　50区土坑実測図（縮尺1:40）……95
67図　50区出土遺物（縮尺1:3）……96

表目次

本文頁

1表　入部地区圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧……9
2表　東入部遺跡群調査一覧……10
3表　第7次調査調査区一覧……14

付　図

付図１　東入部遺跡群第７次調査43区全体図（縮尺1:200）
付図２　東入部遺跡群第７次調査44区全体図（縮尺1:200）
付図３　東入部遺跡群第７次調査45区全体図（縮尺1:200）
付図４　東入部遺跡群第７次調査46区全体図（縮尺1:200）

1　はじめに

福岡市の西南部に広がる早良平野は、江戸時代、貝原益軒（1630～1714年）によって「北に海ありて、三方に高山あり。広平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川（室見川）流る、故に、山林河海そなはりて、薪材ともしからず。魚、塩多し。河水多けれ共、潘なくして、水早の患稀也」（『筑前国続風土記』1703年）と記された旧早良郡に属する。ただこの状況はここ20年間の都市化の波に押され、その姿を急激に変えつつある。さらに益軒の文は「されとも平田は肥饒ならすして、種植豊ならす」と続く。住み良い環境の割には、田畑の収穫は豊富でなかったことが知られる。

これが記されてから約300年後の1985年（昭和60年）、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から８ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な事業計画であった。

埋蔵文化財課で事業計画地内を確認したところ、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の８遺跡群と拝塚古墳があることが明らかになった。その時点で発掘調査を行っていたのは、四箇東、清末遺跡群のほんの一部にしかすぎなかったため、埋蔵文化財課は1986年３月に事業地内を試掘調査し、その性格・範囲などの把握を試みた。試掘調査の結果、弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基き遺跡範囲内の新設の構造物（水路・道路）、削りが遺構面に達する田面と表土直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査を行うこととした。ただし田面に関しては盛土などで設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとった。細かい協議事項については『入部Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集、1991年）に記載されている。実際の発掘調査は1988年１月に開始し、以後1995度まで９ヶ年にわたって調査を継続してしてきた（１表）。

本書では、1993年度調査した東入部遺跡群第７次調査の東側部分について本報告を行う。残された調査についても、次年度以降順次報告に努めたい。

これまで圃場整備地内の発掘調査を無事継続できたのは、いつも調査に従事していただいている多くの作業員の方々のご協力と、県農林事務所、市農業土木課、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々のご指導のたまものである。心から感謝したい。

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500㎡	1988.1.6～1988.3.31	重留
2	1988(〃 63)	15.2ha	15,000㎡	1988.6.21～1989.4.7	重留（２次）・拝塚古墳
3	1989(平成元)	15.9ha	16,200㎡	1989.8.1～1990.3.26	重留（３次）・岩本・四箇船石
4	1990(〃 2)	15.2ha	22,294㎡	1990.7.18～1991.3.8	清末(2次)・岩本(2次)・四箇船石(2次)・東入部・四箇古川
5	1991(〃 3)	21.7ha	34,381㎡	1991.5.13～1992.3.5	清末（３次）・東入部（２次）・安通
6	1992(〃 4)	14.0ha	13,832㎡	1992.5.20～1993.1.31	東入部(３次)
7	1993(〃 5)	6.0ha	17,000㎡	1993.5.1～1994.2.28	東入部(７次)
8	1994(〃 6)	1.3ha	5,000㎡	1988.7.7～1994.11.25	東入部(10次)
9	1995(〃 7)	(暗渠排水)	2,600㎡	1988.10.4～1996.2.12	東入部(11次)

1表　入部地区圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧

2　遺跡の立地と歴史的環境

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、油山（標高592m）山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で行われた（1・2図）。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約700m、南北約1200mの広大な遺跡群で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡群の北端で29m、7次調査地点で36～38.80m、南端にあたる10次調査地点で39mをはかる。遺跡名称は大字名から採られている。

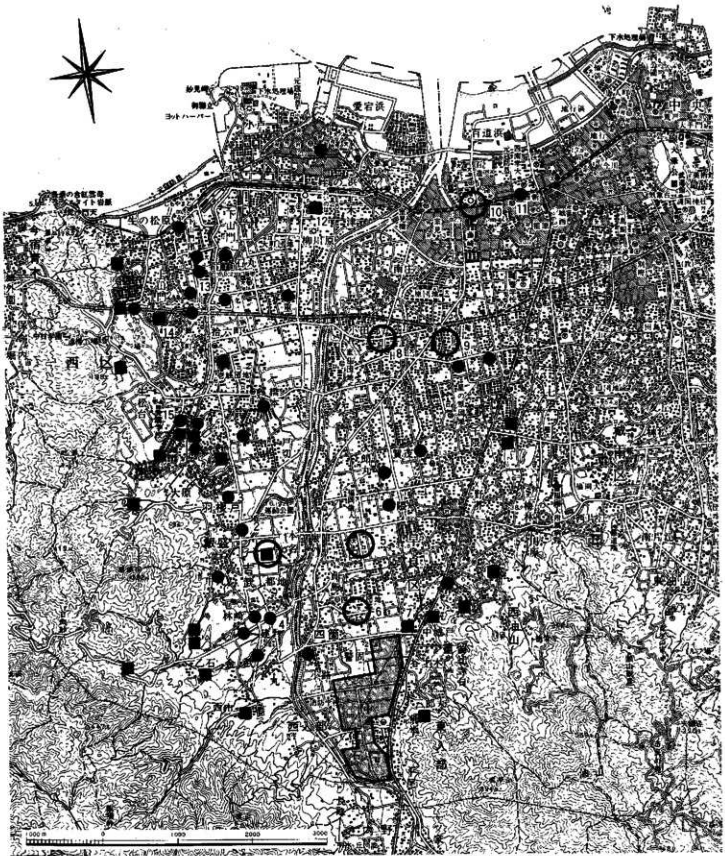
この東入部遺跡群では、今年度までに11次にわたる発掘調査が行われてきた（2図）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降郡内での一大拠点であると同時に、出土遺物等から見て郡という地域を越えた重要な地位を占めていたことを知らしめた。

東入部遺跡群が所在する旧早良郡、すなわち早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が濃密に分布している（1図）。1970年代後半以降の福岡市の著しい都市化はこの一帯にも波及し、激しい土地開発に伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。その結果、早良平野のみならず北部九州の歴史を新たに書き替える重要な考古資料が蓄積された。弥生時代では吉武遺跡群の大規模な発掘調査で、2千基を越える甕棺墓とその豊富な副葬品から、その社会構成の復元に大きな手がかりを提示した。東入部遺跡群第2次調査の弥生時代墳墓も、この復元の一翼を担っている。同時に土器、青銅器、鉄器等をはじめとした弥生時代遺物の研究にも大きな寄与をなした。古墳時代では藤崎方形周溝墓群、樋渡古墳、拝塚古墳、梅林古墳、クエゾノ古墳などの調査が行われ、前方後円墳の存在も明らかとなった。また群集墳の調査もかなりの数に上がっている。古代では官衙的建物群が有田、石丸、吉武、東入部等の遺跡群で確認され、その具体的な比定が要請されている。中世では平野内での土地開発の様子が集落の立地と絡んで判明しつつある。

次数	調査番号	調査面積	調査期間	遺跡略号	調査地点	調査原因	報告
1次	9074	5,453㎡	(1990.7.18～1991.3.8)	HGI-1	東入部1943他	圃場整備	
2次	9165	16,271㎡	(1991.5.13～1992.3.5)	HGI-2	東入部1378他	〃	
3次	9216	13,832㎡	1992.5.20～1993.1.31	HGI-3	東入部1274他	〃	485集1996[6]
4次	9208	1,319㎡	1992.5.6～1991.3.8	HGI-4	東入部329-18他	公民館建設等	381集1994[4]
5次	9226	351㎡	1991.5.13～1992.8.20	HGI-5	東入部329-1他	下水道工事等	382集1994[5]
6次	9227	380㎡	1992.8.9～1992.9.4	HGI-6	東入部390-7他	道路拡幅	383集1994[3]
7次	9312	17,000㎡	1993.5.1～1994.2.28	HGI-7	東入部1172他	圃場整備	本報告
8次	9348	175㎡	1993.11.9～1993.11.26	HGI-8	東入部329-21他	道路拡幅	421集1995[1]
9次	9418	145㎡	1994.5.25～1994.6.28	HGI-9	東入部336-2他	〃	421集1995
10次	9427	5,003㎡	1994.7.7～1994.11.25	HGI-10	東入部1098-2他	圃場整備	485集1996[2]
11次	9529	2,600㎡	1995.10.4～1996.2	HGI-11	東入部1366	〃	

2表　東入部遺跡群調査一覧

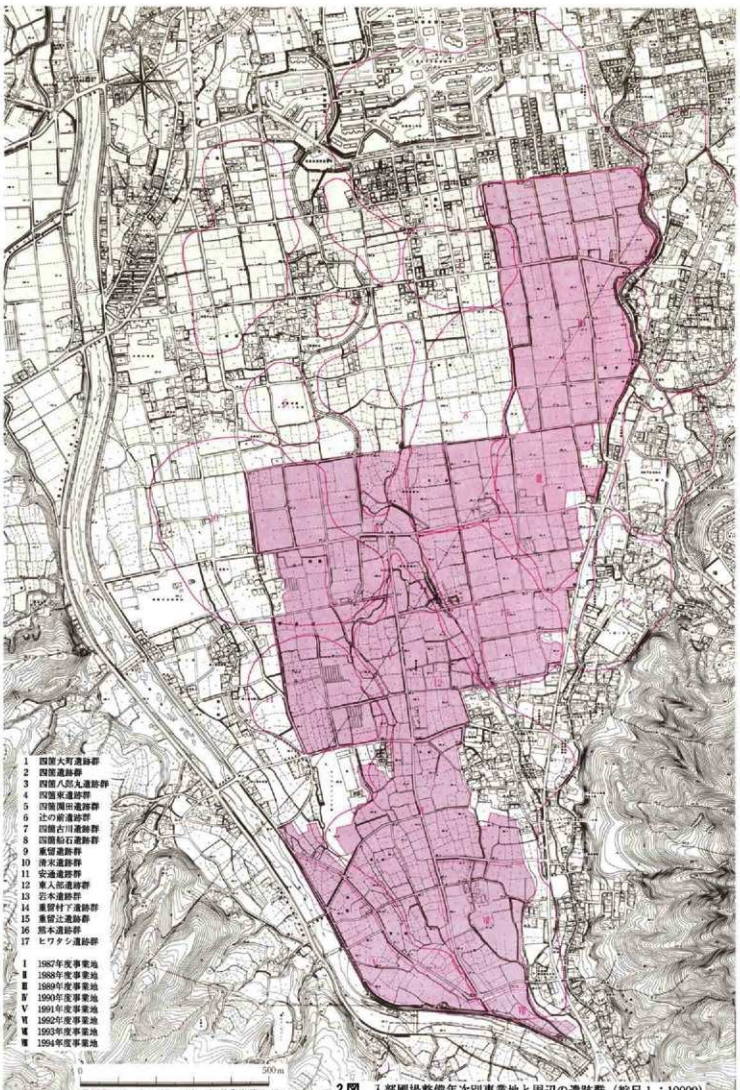
1)『東入部遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 1994
2)『東入部遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 1994
3)『東入部遺跡群3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 1994
4)『東入部遺跡群4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集 1995
5)『入　部　VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 1996



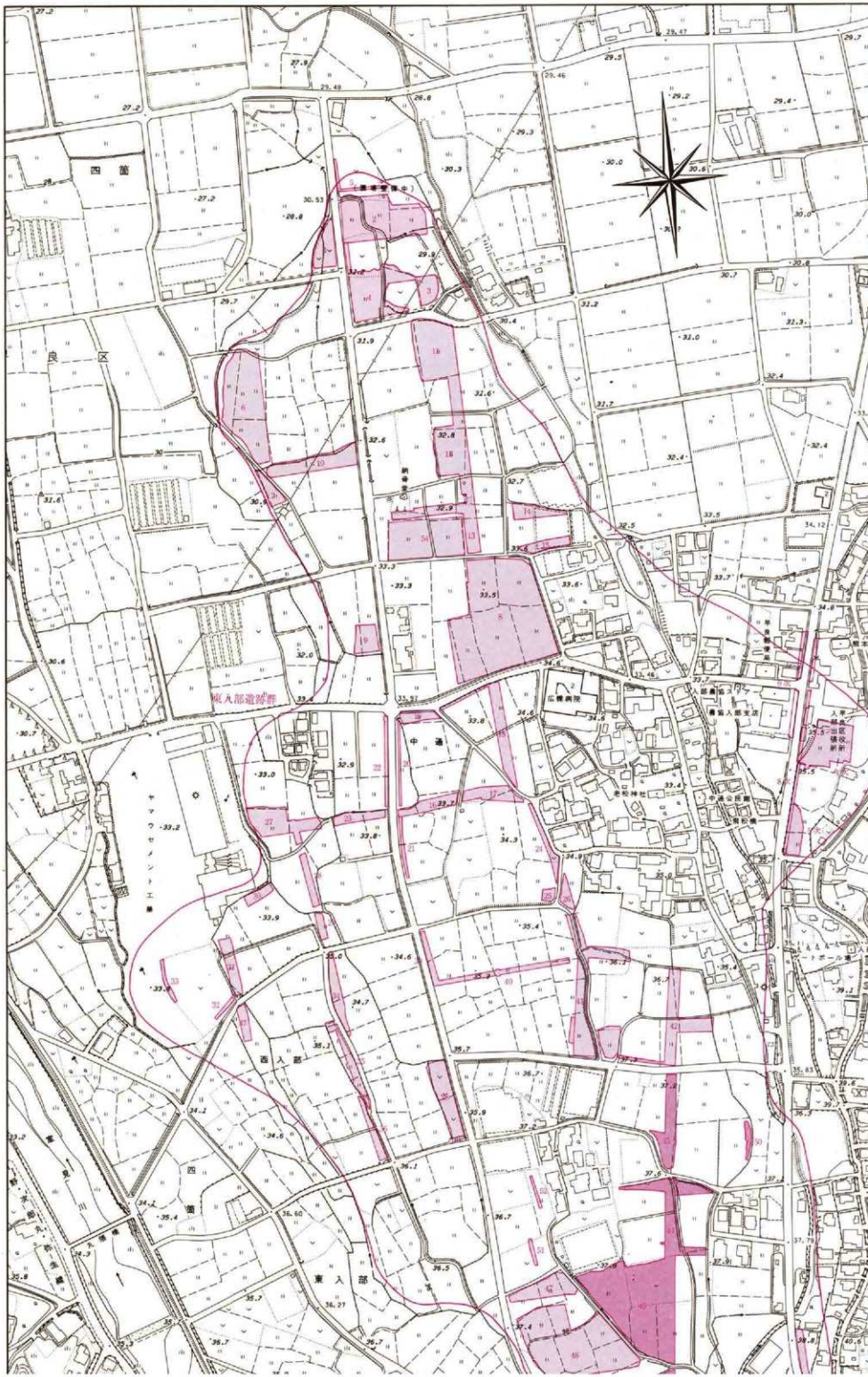
1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1：50000）

1	吉武遺跡群	6	四箇遺跡群	11	西新町遺跡
2	太田遺跡	7	拝塚古墳	12	五島山古墳
3	羽根戸遺跡	8	有田遺跡群	13	拾六町ツイジ遺跡
4	都地遺跡	9	原遺跡群	14	宮ノ前遺跡
5	田村遺跡群	10	藤崎遺跡群	15	野方遺跡

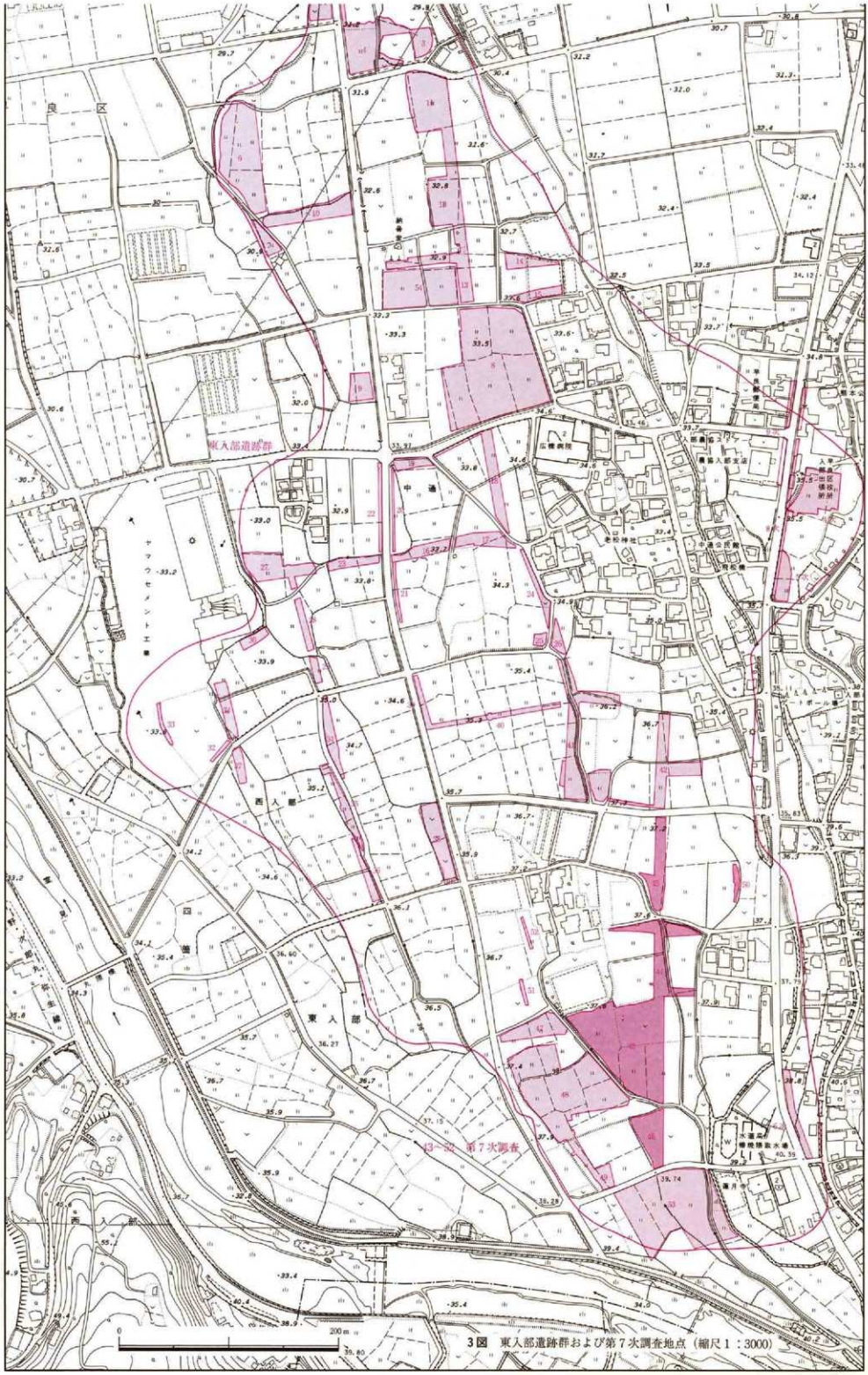
○遺跡群
●遺跡
■古墳
アミ部が圃場整備事業地



2図 入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1：10000）



四箇
良区
東入部道路群
中通
ヤマウセメント工業
西入部
四箇
東入部



3図　東入部遺跡群および第7次調査地点（縮尺1：3000）

3　調査組織

事業主体（県営入部地区圃場整備）
　福岡県農林事務所農地整備課
　福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　福岡市入部上地改良区
調査主体
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
　　課長　　折尾学（前任）　荒巻輝勝
　　第1係長　横山邦継
　　第2係長　山崎純男（前任）　山口譲治
　　庶務　　内野保志
　　調査担当　主任文化財主事　濱石哲也（現史跡整備等担当主査）
　　文化財主事　　榎本義嗣
　　調査・整理補助　林田憲三　井上かをり　英豪之　黒田和生
整理にあたっては、菅波正人（文化財主事）の協力をえた。

4　調査経過と概要

1993（平成5）年度の県営入部地区圃場整備事業は、前年度の南側、大字東入部の60,000 m²を対象に施工されることになっていた。事業地一帯は東入部遺跡群の南端部分に含まれ、前年の調査などから、この地区での遺構の広がりは十分に予測された。しかし、対象地は室見川が早良平野に流れ出す狭隘地にあたり、遺構の密度は薄いのではないかと予想していた。

なお、1993年度の調査は、入部地区圃場整備事業に伴う調査としては第6次となる（1表参照）。また今次の調査は東入部遺跡群を対象としたもので、次に述べる試掘調査（群細分布調査）から本調査まで一貫した調査とみなし、東入部遺跡群第7次調査（遺跡調査番号9312、遺跡略号 HGI－7）とした。東入部遺跡群では、圃場整備地以外でも発掘調査が進み、1996年度までに11次に及んでいる（2表参照）。

試掘調査

対象地内の遺跡の分布範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、事前に事業計画との調整を図るため、国庫補助を受けて5月1日から5月15日まで圃場整備地内遺跡詳細分布調査を行った。

調査には重機（バックホー）を用い、ビニールハウスと野菜栽培地を除いたほぼ全面に、地形を考慮して東西方向の幅1.5 m のトレンチを26本掘削した。総調査面積1,755 m²。各トレンチは作業員を使って清掃し、その後写真撮影、土層の略測を行い、また遺構の分布も記録した。

その結果、室見川に近い対象地西南部を除いたほぼ全域に遺構を確認した。遺構としては土坑、溝、多数のピットがあり、弥生時代から江戸時代にかけての遺物が出土した。その主体は古代から中世と考えられ、比較的大規模な集落が営まれていた可能性が高くなった。とくに対象地北側では古代の遺

構が、南側では中世の遺構が集中していた。南北方向の古河川、浅い谷部もみられた。

調査を必要とする面積は対象地60,000㎡のうち27,117㎡に及び、これは調査体制、期間また工事の進行上からも問題が多かったため、事業者と協議を重ね、田向については設計を見直し、遺構に影響を及ぼさない措置をとり、調整がつかない部分についてのみ調査を行うこととした。最終的に調査面積は17,000㎡と縮小されたが、道路や水路などの構造物部分にとどまらず、取水の関係から南側を中心に田面部分をも広くその対象とすることになった。

本調査

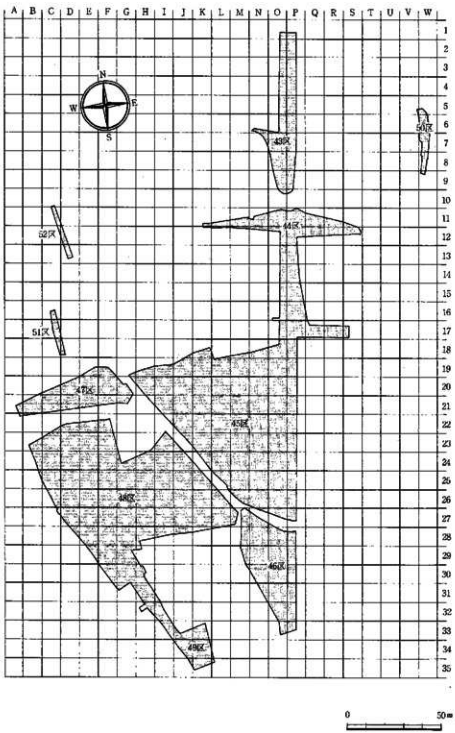
先に述べたように1993年度の調査は東入部遺跡群の第7次調査である。圃場整備地内の調査では、発掘地域が分散するため、同一遺跡群内で便宜的に区名を通して付けている。これまでの東入部遺跡群の場合、第1次調査が1～5区、第2次調査が6～15区、第3次調査が16～42区とした。今次の調査でもこれを踏襲し、道路や水路を境に43～52区の10区に分けた。

本調査は、事業者と田面部分の取扱いを協議する一方、43区の構造物部分の表土剥ぎから開始した。以後本調査は事業者と協議のもと、対象地北側部分から順次終了させていった。最後の48・49区の調査が終了したのは1994年2月28日であった。調査面積は17,000㎡。出土した遺物は縄文時代から近世に及び、その量はコンテナ157箱であった。今回の調査報告は、東入部遺跡群第7次調査のうち、整理の関係から東側部分の43～46・50区を対象としたもので、残りの47～49・51・52区については次年度の報告を予定している。

なお、本報告の作成にあたっては以下のように統一を計った。遺構の番号は4桁の数字で表し、その後に竪穴住居、溝、掘立柱建物、ピットなどの遺構の種類の名称をいれた。この遺構番号は第7次調査で通して使ったものである。調査時期の関係で必ずしも区ごとにまとまっていない（一部欠番あり）。遺物は通し番号とし、実測図・写真とも同じである。なお、200は欠番である。遺構の位置は、第7次調査の10m グリット名で示した（4図）。各区の全体図は、紙幅の関係から50区を除き付図とした。

地区	調査部分	調査期間	発掘面積	備考
43区	道路、用水路	5月17日～7月5日	863.7㎡	本報告
44区	田面、道路、用水路	7月6日～8月31日	1349.8㎡	本報告
45区	田面、道路、用・排水路	10月13日～12月27日	5085.7㎡	本報告
46区	田面、道路、用水路	8月21日～10月18日	1315.0㎡	本報告
47区	田面、道路、用・排水路	12月7日～1月25日	946.2㎡	
48区	田面、道路、用・排水路	12月13日～2月28日	5451.8㎡	
49区	田面、用水路	1月11日～2月28日	633.4㎡	
50区	田面	11月29日～12月7日	159.0㎡	本報告
51区	用水路	1月27日～2月17日	48.0㎡	
52区	用水路	1月27日～2月17日	59.5㎡	

3表　第7次調査調査区一覧



4図　第7次調査グリット配置図

5　調査の記録

5－1　43区の調査

5－1－1　概要

43区は事業地東寄りの北端に位置する長さ約85m、幅約9～23mの狭長な調査区で、南接する44区とは東西方向の農道を境界に区分している。また、既存道路を挟み、北側には第3次調査42区が位置する。本区は道路・用水路建設および田面の切り下げに伴い、863.7㎡を調査した。遺構は表土・床土直下の黄褐色シルト上面で確認した。遺構面には部分的に礫層が露出し、南側では黄褐色のやや粗い砂質土となる。その標高は南側で36.7m、北側で36.2mを測り、北側に緩い傾斜を有する。

検出遺構のうち、0002古河川は調査区の西側を南北方向に縦断するように占地しており、その東西の微高地上では掘立柱建物、土坑、製鉄関連遺構が確認された。

5－1－2　遺構と遺物

掘立柱建物

調査区の南端部を除いて多数のピットを確認したが、出土遺物を有するピットは少数であるものの、7～8世紀代の土師器・須恵器の細片が出土しているものが主体となる。また、鉄滓の出土が比較的目立つ。なお、これらのうち、掘立柱建物としてまとめ得たのは以下の3棟にとどまっている。

0101掘立柱建物（5図・図版3）

P－4・5区で検出した1間×2間の側柱建物で、北東隅の柱穴は0003土坑に切られる。また、西側桁行の中柱は0009製鉄遺構を切る。主軸方位をN－11°－Eにとり、桁行全長4m、柱間1.9～2.4m、梁間2.3mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径約30～50cm、深さ10数cm～40cmを測る。出土遺物には柱穴の1個から縄文土器と思われる細片が1点あるのみである。

0102掘立柱建物（5図・図版3）

0101掘立柱建物の北側に位置する。東側が調査区外に位置しており、1間×2間以上の規模であると推定される。主軸方位はN　80°　－Wで、0101とほぼ直交する。桁行方向と推察される南北の柱間は北側が1.8m、南側が2.2mで、梁間は1.8mを測る。柱穴は円形または楕円形で、径30～55cm、深さは35～50cmである。各柱穴からの出土遺物はない。

0103掘立柱建物（5図・図版3）

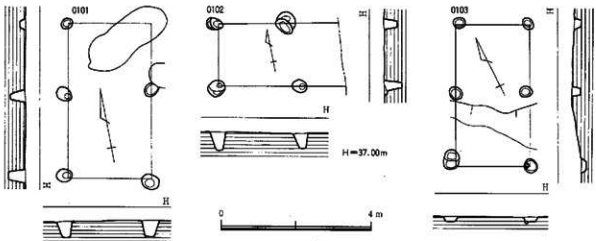
P－7区で確認した1間×2間の側柱建物である。主軸方位をN－28°－Eに有し、桁行全長3.6m、柱間1.8m、梁間2.0mを測る。南側の柱穴は0016古河川の底面で確認できたが、従来は河川覆土の上面からの掘り込みであると思われる。柱穴は円形を呈し、径30～50cm、深さは10～30cmが遺存する。各柱穴から遺物は出土していない。

土坑

ここでは後述する製鉄関連遺構を除いた土坑について報告する。

0003土坑（6図・図版3）

P－4・5区に位置する。不整な長楕円形を呈し、長径2.4m、短径0.9m、深さ30cmを測る。西側には底面からの深さ40cmの掘り込みを有する。底面はほぼ平坦で、壁面は緩く立ち上がる。出土遺物には土師器甕等の細片、鉄滓が少量ある。



5図　43区0101・0102・0103・掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

0004土坑（6図・図版3）

P－5区で検出した隅丸長方形の土坑で、長さ1.3m、幅0.8m、深さ50cmを測る。箱形に掘込まれており、床面は平坦である。東西の壁面の中位は僅かに焼けた痕跡があり、3・4層には炭化物が含まれる。出土遺物は土師器甕の細片1点のみである。

0027土坑（6図）

O－5区で確認した。北側の0028土坑および0010廃滓坑に切られる不整楕円形の土坑で、短径0.9m、深さ35cmを測る。断面は浅皿状を呈する。検出当初は重複する他の遺構との前後関係が不明確で、土層確認により重複関係を把握した。出土遺物には須恵器甕片、鉄滓が少量ある。

0028土坑（6図）

0027土坑を切る不整形な土坑で、長さ1.3m、幅0.9m、深さ45cmを測る。平坦な底面から壁面が立ち上がる。土師器甕・椀、須恵器甕の細片、鉄滓が少量出土している。

0029土坑（6図・図版3）

不整円形を呈する。0027土坑とは掘り下げ後の状況から重複関係を有すると思われるが、前後関係は不明であった。底面は緩やかに窪み、深さ55cmを測る。

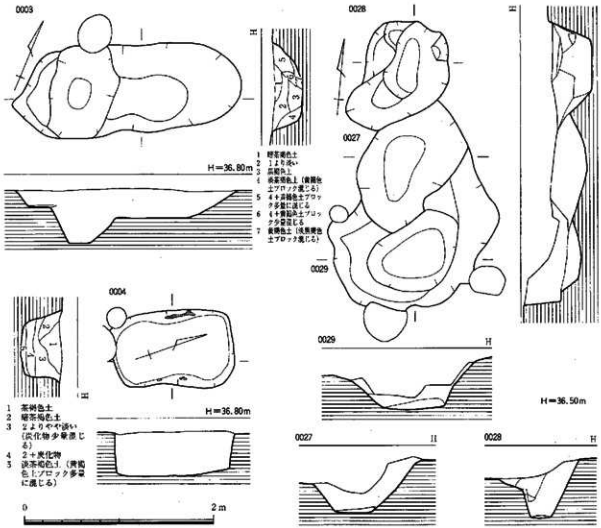
出土遺物（9図1）　小形の土師器甕である。復元口径13.8cmを測り、直立気味の体部に僅かに外反する短い口縁部が付く。頸部内面には緩い稜を有する。調整は外面および口縁部内面はナデ、体部内面は斜方向のヘラ削りである。外面には煤の付着が認められる。他に土師器甕・須恵器坏の細片、鉄滓が少量出土している。

製鉄関連遺構

本調査区ではピットを含め、鉄滓を出土遺物に有する遺構が多く認められたが、ここでは覆土中より多量の鉄滓が出土し、覆土中に炭化物・焼土等が確認された遺構を製鉄関連遺構としてとりまとめて報告する。遺構の分布は調査区北側のP－2・3区の約5m四方に集中する一群（0006・0007・0012～0014・0024）があり、約20m南には0009・0010が隣接して存在する。更に南10mには0015・0026が接して検出された。鉄滓以外の土器等の出土遺物は希少で、7～8世紀代の土師器・須恵器が細片で出土しているが、一部の遺構に過ぎない。

0006廃滓坑（7図・図版4）

P－2区で検出した。0007廃滓坑を切り、東側を近世の小規模な溝に切られる。平面形はやや不整



6図 43区0003・0004・0027・0028・0029土坑実測図（縮尺1:40）

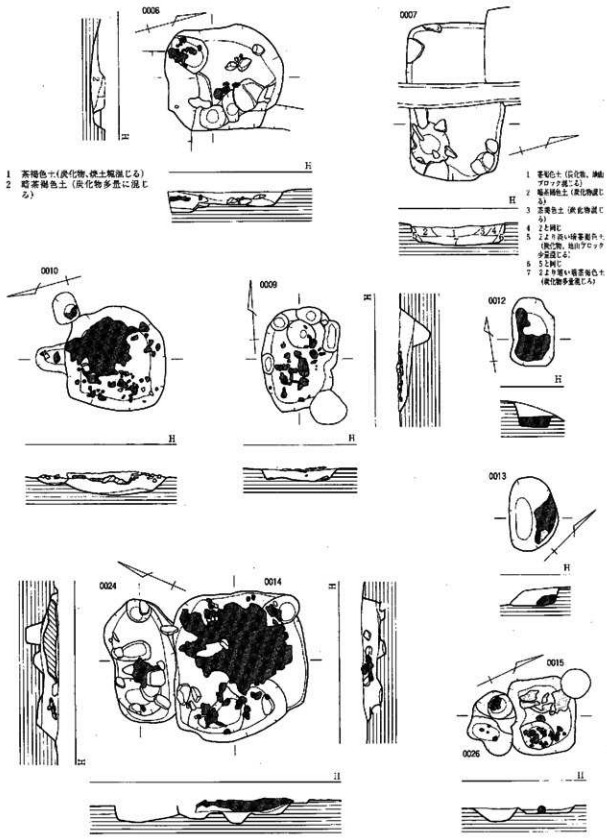
であるが、正方形に近く、一辺1.1～1.3mを測る。底面にはやや凹凸があり、深さは約15cmである。中央部および南西隅のピット状の掘り込みの上位において鉄滓の集中が認められた。覆土の下層には炭化物が多量に含まれ、少量ながら焼土塊も確認できたが、壁面に被熱の痕跡はない。出土遺物には鉄滓がビニール袋で3袋ある。

0007廃滓坑（7図・図版4）

0006の南側に位置する。中央部を0006同様の近世の溝に切られる。隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、深さ20cmを測る。断面は逆梯形をなし、底面はほぼ平坦である。覆土下層には炭化物が多量に認められた。ビニール2袋程度の鉄滓が覆土中より散漫に出土している。焼土塊や焼壁は確認できなかった。遺物には鉄滓以外の出土はない。

0009廃滓坑（7図・図版4）

P－5区に位置し、隅丸長方形を呈する。長さ1.1m、幅0.8m、深さ10cmを測り、北壁際には径30cm、底面からの深さ20cmのピット状の掘り込みを有する。壁面は緩やかに立ち上がるが、凹凸が著しい。暗茶褐色を呈する覆土上位の南側には鉄滓が、北側には焼土が散在し、炭化物が散漫に含まれる。壁面・底面に被熱の痕跡は看取されない。遺物は縄文深鉢片1点の混入を除いては鉄滓のみで、ビニール袋で3袋が出土した。



7図　43区0006・0007・0009・0010・0012・0013・0014・0015・0024・0026製鉄関連遺構実測図（縮尺1:40）

0010廃滓坑（7図・図版4）

0009の西約1mのO－3区に位置し、0027・0028土坑を切る不整な正方形のプランの土坑である。一辺1.1m、深さ20cmを測り、北壁の中央部から北側に長さ30cm、幅25cmの浅い張り出しが認められた。断面は皿状をなし、壁面は緩やかな立ち上がりを有する。暗茶褐色土の覆土の上層には厚さ10cm程度の鉄滓が北半に集中して検出された。また、炭化物や少量の焼土塊も含まれる。鉄滓はビニール袋で8袋が出土した。他に土師器甕の細片が少量ある。

0012廃滓坑（7図・図版4）

0007の南約1.5mに位置する。不整楕円形を呈し、長径0.7m、短径0.4m、深さ25cmを測る小規模な掘り込みである。下層には小振りな鉄滓が炭化物、焼土塊と共に10cm程度堆積する。他に土器等の出土遺物はない。

0013廃滓坑（7図・図版5）

0012の東約1mに位置する。平面プラン、規模、鉄滓出土状況は0012に類似する。なお、図示していないが、両遺構の他に径30～40cmのピット状の掘り込み3基が近接し、検出されている。同様に鉄滓・炭化物・焼土塊を確認したが、いずれも被熱による焼壁は認められない。また、土器等の他の出土遺物はない。

0014廃滓坑（7図）

0012の西50cmに隣接し、0024を切る。不整な正方形を呈し、一辺1.4～1.5m、深さ15cmを測る。東側の上層を主体に、鉄滓が断面浅皿状に厚さ15cmで確認された。その下位には炭混じりの暗茶褐色土層が堆積する。なお、平面プランや鉄滓の出土状況は0010に類似する。底面は浅い掘り込みが多数認められ、凹凸が著しい。壁面の被熱による焼土化は認められなかった。鉄滓はビニール袋15袋に及ぶ。他に土師器甕・坏、須恵器の細片が少量出土した。

0015廃滓坑（7図・図版5）

P－6区で検出した。0026に切られる一辺0.8mの隅丸正方形の土坑である。深さは10cm弱しか遺存していない。西側にはよく焼けた焼土層が、東側には鉄滓の散布が認められたが、壁面の焼土化は確認されなかった。覆土は暗茶褐色土を呈し、炭化物は含まれない。鉄滓以外の出土遺物はない。

0024廃滓坑（7図・図版5）

不整楕円形を呈し、0014に切られる。長径1.3m、短径0.7m、深さ15cmを測る。中央部の上層で鉄滓が出土した。覆土には炭化物、焼土塊が少量含まれる。底面には不整形な深さ5～15cmの掘り込みを有する。出土遺物には鉄滓がビニール袋2袋、土師器甕等の細片が数点ある。

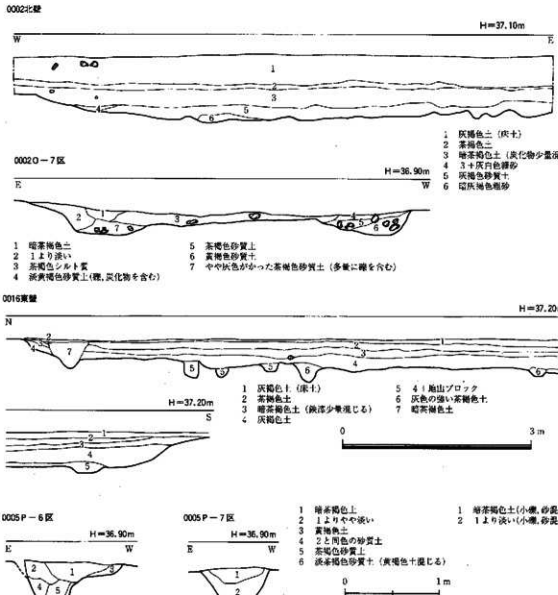
0026廃滓坑（7図）

0015を切るピット状の掘り込みである。検出時には1遺構として掘り下げを行なったが、径30～50cmを測る2基の切り合いであることが判明した。なお、前後関係は不明である。共に小振りな鉄滓がビニール1袋出土している。焼土塊を少量含むが、炭化物は認められなかった。他に土師器甕・椀、須恵器甕の細片が出土している。

溝・古河川

0001溝

0002古河川の上面で確認した深さ5～10cmの浅い溝状遺構である。O－7区～O－2区に位置し、0002を縦断する。北端は東側にやや折れ、P－2区で削平により消失する。北側に向かって極めて緩く傾斜する。覆土は黄灰色を呈し、土師器皿、瓦器、白磁、青磁、鉄滓等が出土している。



8図　43区0005溝，0002・0016古河川土層断面実測図（縮尺1:40，1:60）

0005溝（8図）

P－6区～P－8区に位置する南北方向の溝で、0016古河川を切る。北側は調査区外に延び、南側はP－8区の北壁で終結する。断面は大半が逆梯形を呈するが、北側では西に平坦面を有し、「U」字形となる。深さは30～50cmを測り、北側に緩い傾斜を有する。出土遺物には土師器甕、須恵器坏蓋・甕の細片が少量ある。

0002古河川（8図・図版5）

概要で触れたように調査区の西側を縦断しながら、北流する埋没河川で、第3次調査の42区で確認されている河川の南側延長部に該当する。調査区の大半では東側の肩のみを検出したが、O－7区および北端のO－1区では両肩を確認することができた。その幅は約6～7mを測り、深さは40～50cmである。上層を重機によって掘り下げた後、下層は人力掘削を行なった。覆土には礫を混じえ、シルト・砂等の水性堆積物が認められた。出土遺物より7～8世紀代の埋没が推定される。

出土遺物（9図2～24、10～12図、13図60～63・65～66）　須恵器、土師器を主体に多量の遺物が

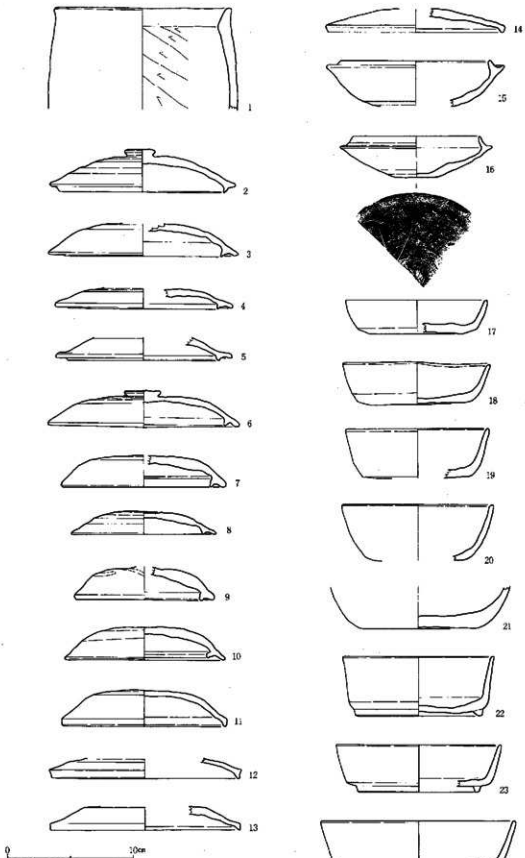
出土した。以下、種別に報告を行なう。

2～50は須恵器である。このうち、2～14は坏蓋で、2～10はかえりを有する。天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面はナデ、他はヨコナデ調整を施す。2は復元口径13.0cm、器高3.4cmを測り、扁平なつまみを有する。3はつまみを欠損するもので、復元口径は12.4cmである。4もつまみを欠損するものと考えられ、天井部は平坦気味である。復元口径は11.9cmを測る。5は天井部を欠損するもので、体部からかえりにかけて内湾気味に反り、鈍く折れる。復元口径は14.0cm。6はつまみの中央部が僅かに突出するもので、ヨコナデによって仕上げる。復元口径14.9cmを測る。焼成はやや軟質である。7は平坦な天井部を有し、つまみをもたない。器壁は厚手で、復元口径は12.5cmである。8は全体的に扁平な器形を呈し、かえりは浅くつくられる。復元口径11.3cm、器高1.8cmを測る。9は肉厚な器壁を有し、かえりも厚手に成形する。復元口径は10.7cmとやや小振りである。10は復元口径12.4cm、器高2.6cmを測る。長めのかえりを有する。11～14はかえりが消失したもので、天井部外面に回転ヘラ削り、天井部内面はナデ、他にはヨコナデを施す。11は口縁端部を緩く下方に折り曲げ、天井部には丸味を有する。復元口径12.7cm、器高2.9cmを測る。12は内傾気味に端部が折れる。口縁部外面は強いヨコナデによって緩く窪む。復元口径は14.6cm。13・14は短く折れる口縁部を有する。14は体部から直線的に口縁部が続く。復元口径はそれぞれ14.8cm、13.8cmを測る。

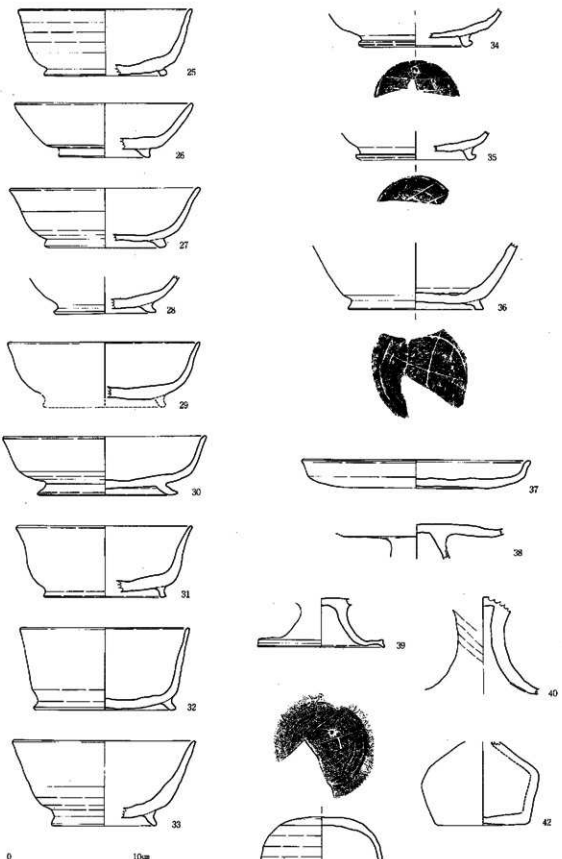
15～36は坏身である。15・16は立ち上がりを有する身である。15は内傾する短い立ち上がりをもち、外底部は回転ヘラ削り、内底部はナデ調整し、他をヨコナデする。復元口径は11.7cmである。16の立ち上がりは同様に内傾するが、やや長めにのびる。小振りで平坦な外底部にはヘラ記号が認められる。復元口径は10.0cmである。17～36は立ち上がりのない口縁部を有するもので、17～21は高台を付さない。17・18・20・21は底部から丸味をもって体部が立ち上がる。17・18はそれぞれ復元口径11.0cm、11.6cm、器高2.7cm、3.3cmを測る。18は歪みが著しい。19は外底部にヘラ切り痕を残し、底部からの屈曲部に稜を有する。22～33は高台付坏である。22は断面台形状の高台を底部端に貼り付け、体部は屈曲して上方にのびる。内外底部にはナデ、体部はヨコナデを施す。復元口径11.8cm、器高4.8cmを測る。23・24は高台を底部のやや内側に貼り付け、外方へ直線的に立ち上がる体部をもつ。23の復元口径は12.9cm、器高は3.8cm、24は法量が大きく、順に15.2cm、4.6cmを測る。25～36は高台が外に張るものである。25は坏部は深みをもち、復元口径13.5cm、器高5.3cm。26は外向気味の断面三角形状の高台を付す。体部は直線的に大きく開く。復元口径13.7cm、器高は4.2cmである。27は内湾気味に体部が開き、外底部は回転ヘラ削りを残す。28も26同様の高台を有するが、外向の度合いが強く、体部には丸味を有する。29は高台を欠損するもので、口縁部は内湾気味に立ち上がる。復元口径は14.9cmを測る。30は長めの高台が強く張りだす。外底部から体部外面下半には回転ヘラ削りを施す。復元口径15.8cm、器高4.6cm。31・32は深みのある坏部を有する。31は内湾気味の体部を呈し、32は直線的にのびる。32の高台は底部端に付され、外に張りだす。順に復元口径13.5cm、13.1cm、器高6.6cm、6.5cmを測る。33は底部と体部の境界に丸味をもち、径の小さい底部に長めの体部を有する。外底部にはヨコナデを加える。34～36は外底部にヘラ記号を有するものである。34・35は高台端部を跳ね上げる。36は「×」字の記号が残る。

37は皿である。復元口径17.6cm、器高2.2cmを測り、上げ底気味の底部を有する。体部の中位で鈍く屈曲し、緩く外反する口縁部がつく。端部は丸くおさめる。外底部にはヘラ切り痕を残し、刷毛目風の擦痕が認められる。内底部はナデ、体部の内外面はヨコナデ調整を施す。

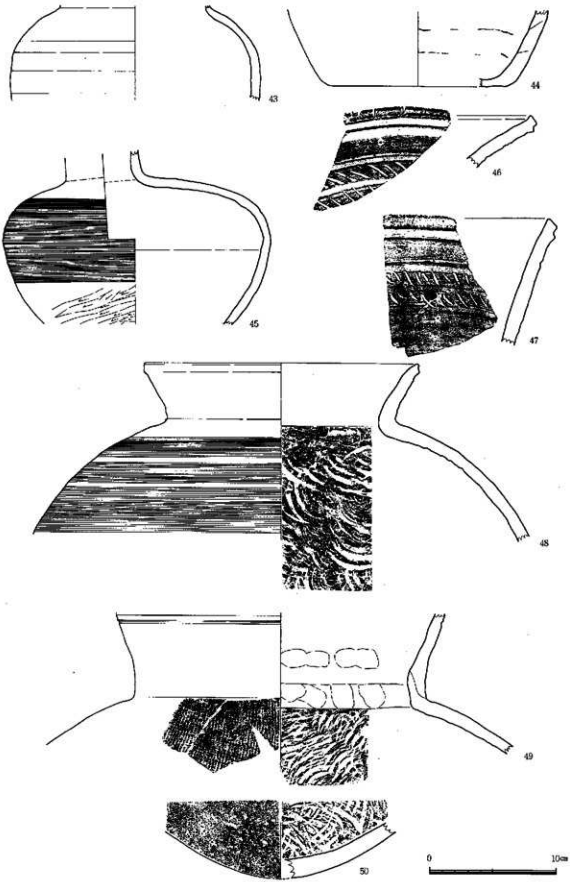
38～40は高坏である。38は皿状の坏部がつくものであろう。39は脚部端を屈曲させ、折り曲げる。



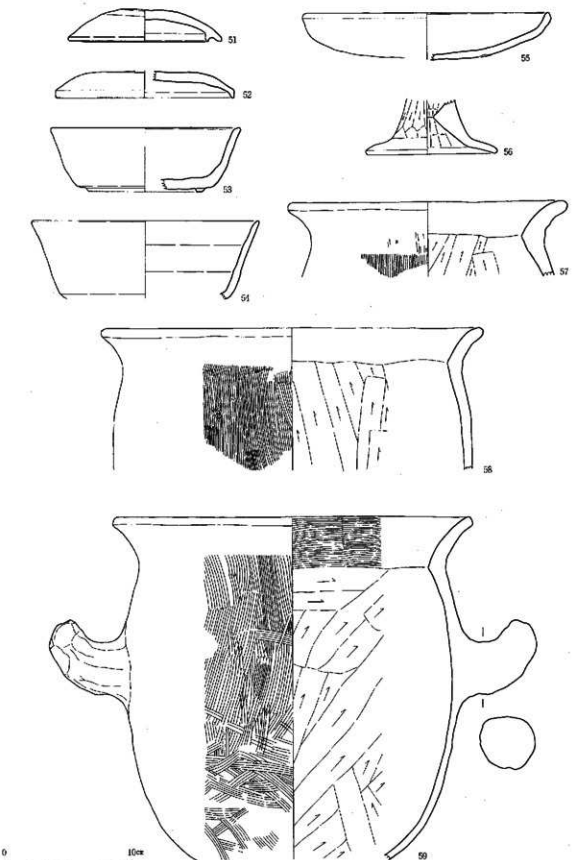
9図 43区出土遺物実測図1（縮尺1：3）



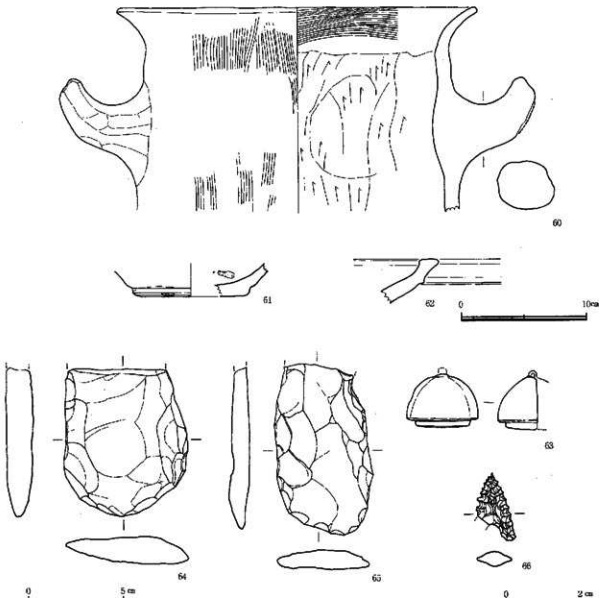
10図　43区出土遺物実測図２（縮尺１：３）



11図　43区出土遺物実測図３（縮尺１：３）



12図　43区出土遺物実測図4（縮尺1：3）



13図　43区出土遺物実測図5（縮尺1：1，1：2，1：3）

ヨコナデを行なう。40はシボリ痕が外面に僅かに観察できる。

41は蓋であると思われる。天井部外面は回転ヘラ削りし、「×」字のヘラ記号を有する。体部は丸味をもち、口縁部は僅かに外反する。復元口径9.8cm、器高4.4cmを測る。

42～44は壺である。42は小形の長頸壺で、肩が強く張る。頸部上位を欠失する。器面全体の磨滅がすすむ。43は短頸壺で、口縁部および体部下半を欠損する。外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデを施す。44は底部資料で、外面を回転ヘラ削り、内面をヨコナデするが、接合痕が残る。

45は平瓶である。体部外面の上半にカキ目、下半はヘラ削り、内面はヨコナデ調整を施す。

46～50は甕である。46・47は口縁部片で、46は口縁下に左上がりの短い沈線文を2列巡らせる。47は不規則な波状文が2列巡る。48・49は体部の大半を欠失するもので、48は短い口縁部を有し、外面にはカキ目を施し、内面には青波文の当て具痕が残る。口縁部はヨコナデする。復元口径は21.4cmを測る。49は口縁端部を欠失する。体部外面には平行叩き、内面には青波文の当て具痕が残る。50は

底部片で、外面は磨滅するが、僅かに平行叩きが、内面には青波文の当て具痕が認められる。

51～60は土師器で、このうち51～54は須恵器を模倣したものである。51は短いかえりを有する坏蓋で、前述の須恵器坏蓋同様の調整を施す。52はかえりのない蓋で、口縁端部を直角に折り曲げる。53・54は高台付坏である。53は復元口径14.9 cm、器高5.1 cmを測り、断面台形状の低い高台を付す。55は復元口径19.1 cmを測る皿で、底部から体部にかけて丸味をもち、口縁端部は短く上方にのびる。外底部は回転ヘラ切りを残す。56は高坏の脚部で、端部は外湾気味に開く。筒部の内外面にはヘラ削り調整を行なう。57・58は甕で、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りする。口縁部は反り気味に外反する。59・60は甑で、上方にのびる把手を有する。体部外面および口縁部内面に刷毛目、体部内面にはヘラ削りを施す。

61は越州窯系の青磁椀で、オリーブ色の釉が施されるが、高台から外底部にかけては露胎となる。内底部および畳付きには目跡を有する。

62は褐釉陶器の鉢の口縁部片である。口縁部上面は平坦で、口縁下には突帯が巡る。

63は粘板岩を石材とした権であろう。丁寧に研磨を施す。頂部の吊り穴は欠損する。

65は玄武岩製の打製石斧、66は黒曜石製の石鏃である。

0016古河川（8図）

O・P－7～9区で確認した幅13～21 mを測る東西方向の河川で、0002に切られる。土師器甕、須恵器甕・坏の細片が出土している。

ピット出土遺物（13図64）　O－7区に位置する径50 cmのピットから出土した玄武岩製の打製石斧である。両面から剥離調整を加え、刃部を作出する。他に土師器の甕片の出土がある。

5－1－3　小結

出土遺物から0002古河川は7世紀後半から8世紀代に埋没したものと考えられる。微高地上の遺構については出土遺物が希少で、時期比定については直接的に言及できないが、細片の観察によっても0002の示す時期と大方の差異はないものと考える。製鉄関連遺構としてとりまとめて報告した各遺構については前述したように壁面に被熱の痕跡が看取されないことや、羽口等の生産関連遺物の出土もないことから鍛冶炉等の鉄器製作の遺構ではなく、鉄滓等の廃棄物が投棄された土坑と理解しておきたい。ただし、数基が重複または近接して設置されており、一連の製鉄遺構が近接地に存在する可能性が高い。

5－2　44区の調査

5－2－1　概要

44区は43区の南側にあたる。グリットで示せば、北端はO・P－11、南端はO～S－17に相当し、南北長67.5 m、東西幅83 m、形状的にはT字形に近い。新設道路・水路部分を中心に、一部出面削平部を含んだ調査対象地である。検出面標高は北端で37.35 m、南端で37.85 m。

44区の発掘は7月6日から開始し、8月からは46区と併行しながら、8月31日に終了した。調査面積は1349.8 m²。

道路部分の調査であったため、面的な遺構の確認は困難な場面が多かった。43区から続く0002古河川は、調査区北側ではその川幅をとらえることができたが、それ以南は調査区西側をわずかにかすめ、

46区でまた川幅を現す。この0002の東側約10mは、近・現代の撹乱があるだけで、それ以前の遺構はほとんど見られない。また、南端の東側に延ばした調査区内にも遺構は少ない。遺構が集中するのは北端部分の東西に延ばした調査区内である。東側部分ではピットが集中し、掘立柱建物を確認できた。西側部分は溝、土坑が重複する。

44区全体で検出した遺構は掘立柱建物7棟、土坑23基、製鉄関連遺構1基、溝17条、0002古河川、および多数のピットである。以下、掘立柱建物から順に遺構の形態や出土遺物などについて説明する。

5－2－2　遺構と遺物

掘立柱建物

調査区北端の東側部分で7棟検出した。0267の1棟以外はすべて調査区外にかかり、その全容は定かではない。検出した部分で見る限り、身舎の側柱からなるもので、特に大きな建物になるとは考えられない。建物は重複がみられ、また明らかな柱穴が他にもあり、まとめきれなかった建物の棟数を考慮すると、長期間にわたる集落跡の一部である可能性が高い。北端西側にも柱穴がみられたが、建物としてまとめることはできなかった。

0261掘立柱建物（14図・図版8）

S－11・12区で検出した南側柱3間の建物であろう。全長600cm、柱間は東から180cm、210cm、210cmと不等。柱穴は径29～55cmの円形状で、深さは24cm～44cm。おそらく2×3間規模の東西棟になるものであろう。建物方位はN－67.5°－Wである。鉄滓が0186柱穴から出土したにとどまる。0153土坑を切る。

0262掘立柱建物（14図・図版8）

0261掘立柱建物の南側に重複する2×3間の東西棟であろう。建物方位はN－77.5°－W。北側柱のほとんどが調査区外にかかる。確認できた梁行の全長は360cm、柱間は180cmの等間。桁行全長690cm、柱間は東から210cm、210cm、270cmとなる。柱穴は径23～48cmの円形状で、深さは19～46cm。0191柱穴から弥生土器片が出土した。東南隅柱が0153土坑を切る。

0263掘立柱建物（14図・図版8）

0261・0262掘立柱建物と重複する梁行2間、桁行3間以上の南北棟である。建物方位は真北。梁行全長420cm、柱間は210cmの等間。確認できた桁行の柱間は西側柱で、南から210cm、180cm。柱穴は径35～42cmの円形に近く、深さは20～34cm。柱穴からの出土遺物はない。

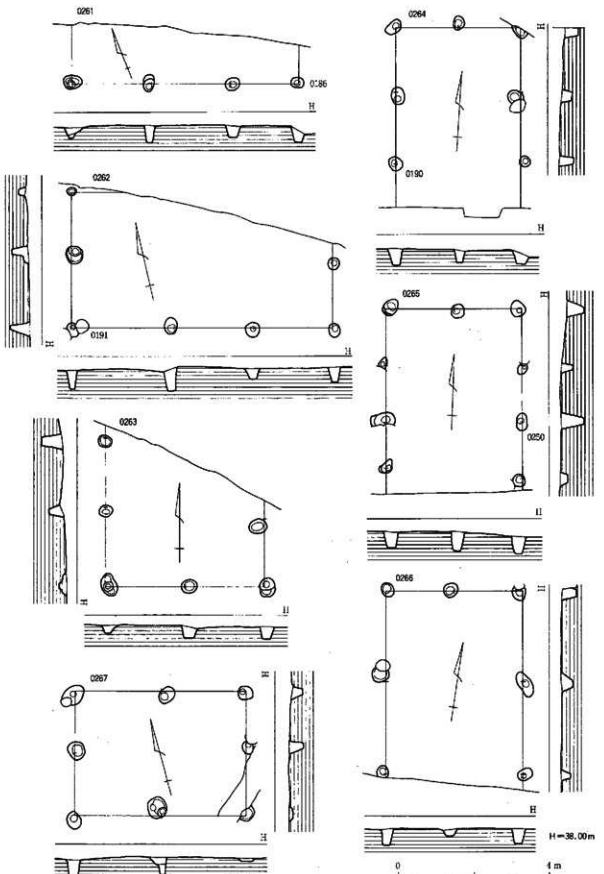
0264掘立柱建物（14図・図版8）

0261・0262・0263掘立柱建物の南側に重複する梁行2間、桁行3間以上の南北棟である。建物方位はN－3.5°－W。梁行全長330cm、柱間は165cmの等間、桁行は確認できる北2間が180cmの等間。柱穴は径36～47cmの円もしくは楕円形で、深さは24～55cmをはかる。西側柱うち西北隅柱を除く2柱穴の柱痕跡は焼土となっており、建物が焼失した可能性がある。建物の南側に0151土坑が位置するが、関係は定かでない。

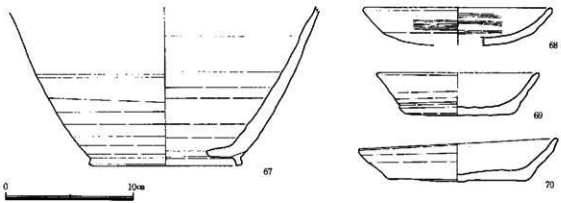
出土遺物（15図67）　0190柱穴から出土した須恵器の壺下半部である。高台は低く張りも小さい。底部には焼成後の穿孔がある。底部下半は横方向のへら削り、他は横ナデで仕上げる。焼きはあまく、灰色を呈する。0190柱穴からはこの他鉄滓が出土した。他の柱穴からの出土遺物はない。

0265掘立柱建物（14図・図版8）

R－12区で検出した梁行2間、桁行4間以上の南北棟である。建物方位はN－2.0°－W。梁行全長360cm、柱間は180cmの等間。確認できた桁行の柱間は150cmの等間。柱穴は径24～59cmの円



14図　44区0261・0262・0263・0264・0265・0266・0267掘立柱建物実測図（縮尺1:100）



15図　44区掘立柱建物・ピット出土遺物実測図（縮尺1：3）

形もしくは楕円形で、深さは20～71 cm とばらつきがある。0250柱穴から土師器甕片１点が出土したにとどまる。0264掘立柱建物の西約５ m に、建物方位および北梁柱をほぼそろえて建つ。

0266掘立柱建物（14図・図版８）

0265掘立柱建物の西側に隣接する梁行２間、桁行３間以上の南北棟である。建物方位はN－10°－W。梁行全長360 cm、柱間は180 cm の等間。確認できた桁行の柱間は240 cm の等間。柱穴は径32～71 cm の円形もしくは楕円形で、深さは17～50 cm。柱穴からの出土遺物はない。建物方位からみて、南側は0265掘立柱建物と重複する。

0267掘立柱建物（14図・図版８）

Q－11区で検出した２×２間の東西棟である。建物方位はN－75°－W。梁行全長330 cm、柱間は165 cm の等間。桁行全長450 cm、柱間は225 cm の等間。柱穴は径36～65 cm の円形に近く、深さは10～67 cm とばらつきがある。柱穴からの出土遺物はない。東梁柱が0156溝に切られる。

ピット出土遺物（15図68～70、22図117・118）　68～70は土師器である。68は口径15.0 cm の丸底杯で、内面と外面上部はヘラ磨きを行う。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。R－12区の0193ピットから出土。69は口径12.9 cm、高さ3.6 cm の杯。底部はヘラ切り。Q－12区の0199ピットから出土。70は口径15.７cm、高さ3.４cm のややいびつな杯。底部は糸切りで、板状圧痕がある。N－11区の0225ピットから出土。117は両側面に刃を造り出した安山岩ホルンフェルス製の石器。形態から石戈の未製品、あるいは石鎌とも考えられるが、確定はできない。Q－11区の0206ピットから出土。118は黒曜石の剥片石器。剥片の両側面に調整を加える。一端は尖り、他端は未加工のまま残る。R－12区の0196ピット出土。

土坑

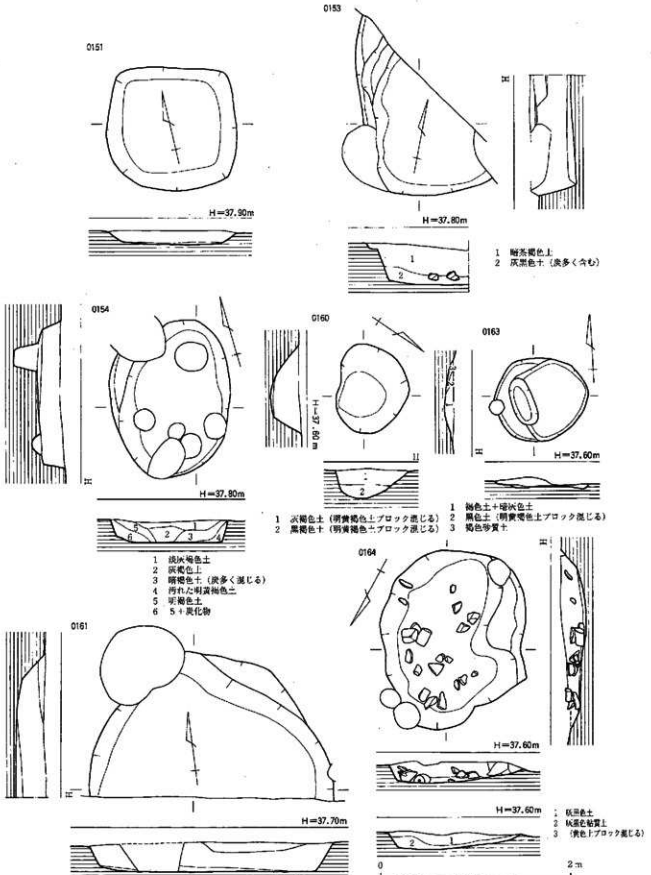
平面形が方形、楕円形、不整形などを呈し、規模もまちまちの掘り込み遺構23基を土坑として一括した。土坑は調査区北側のM・N－11区に集中し、他のところでは散在的である。

0151土坑（16図）

S－12区、0264掘立柱建物の中に位置する。平面は東西1.35 m、南北1.30 m の隅丸方形。深さは17 cm。覆土はシルト質の灰黒色土で、地山の黄色土ブロックが若干混じる。出土遺物は糸切り底で板状圧痕のある土師器皿など10片である。

0153土坑（16図・図版８）

S－12区、調査区境で検出した。平面は南北に長軸をとる長方形状を呈するものと推定され、規模は長さ1.90 m 以上、幅は1.60 m 前後であろう。深さは47 cm で、底面の上には厚さ15 cm ほどの炭化



16図 44区0151・0153・0154・0160・0161・0163・0164土坑実測図（縮尺1：40）

物層がある。0261・0262掘立柱建物に切られる。

出土遺物（18図71・72）　ともに須恵器である。71は低い高台をもつ壺。外面下半はヘラ削り、他は横ナデで仕上げる。焼成は良好、灰色を呈する。72も壺であろうか。肩部が大きく張り、頸部下に小さな方形状の凸帯、肩部の最大径部に三角凸帯をめぐらす。外面は横ナデ、内面には青海波文の当て具痕がある。焼成良好、灰褐色を呈する。他に土師器甕、杯などの細片が出土している。

0154土坑（16図）

S－11区。ほぼ南北に長軸をとる平面楕円形の土坑である。長さ1.70m、幅1.26m、深さ30cm。西北側壁に浅い段をつくる。壁面から底面までの覆土には炭化物を含む。0263・0264掘立柱建物に切られる。出土遺物はない。

0160土坑（16図）

N－11・12区。ほぼ東西に長軸をとる長さ0.93m、幅0.70mのいびつな楕円形土坑である。深さは33cm。南側で0161土坑を切る。糸切り底の土師器皿、土師質土器など7片が出土した。

0161土坑（16図）

0160土坑に西北壁面を切られ、また南側の大半が調査区外にかかる。円形状の平面形で、調査区境での東西幅は2.60m、深さは31cm。底面は平坦。覆土は暗褐色砂質土で、底面には厚さ1～2mmの薄い炭化物層が部分的にみられる。0159溝を切る。出土遺物には土師器甕・杯（底部ヘラ切り）、黒色土器椀A・B類、白磁椀Ⅱ類？、フイゴ羽口などがあるが、実測に耐えない。

0163土坑（16図）

0162土坑の北東に位置する平面円形状土坑である。径0.90～1.00m、深さは12cmと浅く、西側壁には段がつく。東で0164土坑を切る。土師器および黒色土器の細片が若干出土した。

0164土坑（16図・図版9）

0163土坑東側に位置する長軸をほぼ南北にとる平面不整楕円形の土坑。長さ1.95m、幅1.50m、深さ25cmをはかる。西側壁には段がある。底面はほぼ平坦で、礫に混じりフイゴ羽口、鉄滓などが密着して出土した。0165土坑を西南側で切る。

出土遺物（18図73・74、22図114）　73・74はフイゴの羽口である。73は径9.5cm、内部孔径3.8cm。外面は縦方向に面取りする。図上端が炉に挿入された部分で、付着した砂などがガラス化している。74は挿入先端部片で、径9cm前後、外面は縦方向の面取りがある。内部孔は断面隅丸方形状で、幅3.6～3.9cm。先端部は外面、孔とも焼け、鉄滓が付着する。114は滑石製石鍋胴部片。厚さ約3cm。外面は縦方向に削る。煤が付着する。他に土師器杯・皿（糸切り底あり）、黒色土器椀B類などの破片が少量出土している。

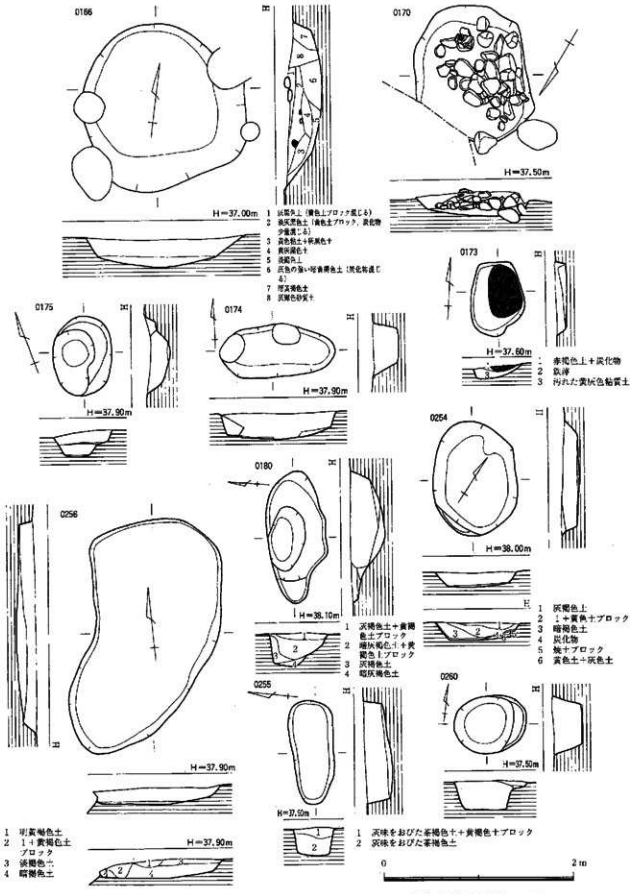
0166土坑（17図）

0164土坑北側に位置する平面不整円形の土坑。径1.75～1.80m、深さ40cm。南側壁の傾斜が北側に比べ緩く、底面は鍋底状になる。土師器皿、須恵器、白磁椀Ⅱ類などの破片が鉄滓とともに出土。

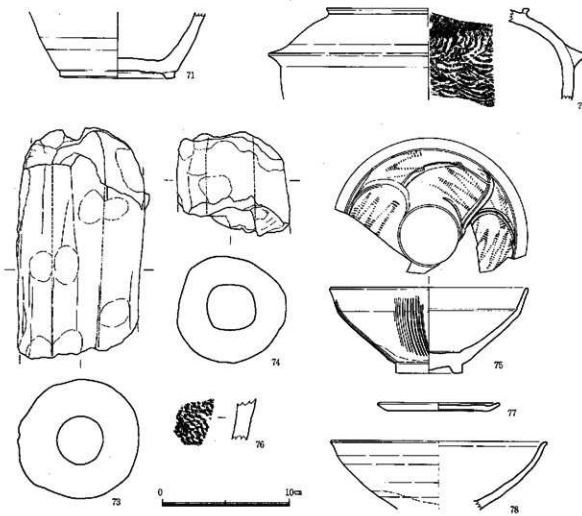
0170土坑（17図・図版9）

M－11区、調査区北端で検出した平面楕円形の土坑である。長軸をほぼ南北にとり、長さ1.45m、幅1.17m、深さ25cmをはかる。覆土は褐色砂質土で、20～30cm大の礫が多量に入る。0185土坑を切る。

出土遺物（18図75）　同安窯系青磁碗である。口径16.2cm、高さ7.4cm。外面口縁下に沈線をめぐらせ、その下に縦方向の櫛描文を、また内面口縁下に沈線を入れ、見込みの沈線に向かい片彫りの花文と櫛目文を施す。釉色は灰味をおびた緑で、高台部は露胎となる。胎土には砂粒が多い。他に土



17図　44区0166・0170・0173・0174・0175・0180・0254・0255・0256・0260土坑実測図（縮尺1：40）



18図　44区土坑出土遺物実測図（縮尺1：3）

師器皿（底部糸切り）、白磁・青磁細片などがある。

0174土坑（17図）

0－14区で検出した長軸を東西にとる平面楕円形土坑。長さ1.22m、幅0.55m、深さ29cmをはかる。覆土は青味をおびた灰色砂質土。0156溝を切る。土師器細片が若干出土した。

0175土坑（17図）

0174土坑の南に位置する平面楕円形の土坑。ほぼ南北に長軸をとり、長さ0.83m、幅0.60m、深さ29cmをはかる。覆土は灰褐色土、灰色砂、黄色粘土が混じる。0172段落ちを切る。出土したのは土師器細片が2点である。

0180土坑（17図）

0178土坑の北約1mで検出した平面楕円形の土坑。ほぼ東西に長軸をとり、長さ1.40m、幅0.60m、深さ41cm。側壁には段がつき、底面は北側に傾る。土師器の細片2点が出土。

0183土坑

R－17区に位置する不整形土坑。長さ0.93m、幅0.60m。底面は二段になり、深い方で検出面から35cm。次の縄文土器1点だけが出土。

出土遺物（18図76）　縄文土器粗製深鉢細片である。外面には山形の押型文を施す。内面はナデ。胎土には砂粒が多く、褐色を呈する。

0185土坑

M－11区。0170土坑や多数のピットに切られ、また残存部が深さ5 cm程度と浅かったため、確認が困難であった。平面は北東－西南に長軸をとる楕円形状を呈し、長さ2.70 m、幅1.60 m。覆土は黒褐色土。

出土遺物（18図77・78）　77は土師器皿。口径9.7 cm、高さ0.7 cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。内面に煤が付着しているところから灯明皿として使用されたものか。78は白磁碗Ⅴ類片。釉は淡緑褐色で、底部近くは露胎となる。他に土師器杯・皿片があり、底部の切り離しはヘラ、糸がまじり、また板状圧痕もみられる。

0254土坑（17図）

調査区南端、45区と接するP－17区に位置する平面楕円形の土坑。長軸を西北－東南にとり、長さ1.20 m、幅0.90 m、深さ19 cmをはかる。底面は平坦。側壁から底面に貼りつくように厚さ1 cm炭化物・焼土層がみられた。

出土遺物（22図116）　磨製石斧の刃部片である。縄文時代のものか。他に須恵器片1点がある。

0255土坑（17図）

0254土坑の北約2 mで検出した平面楕円形の土坑である。長軸を東西にとり、長さ1.10 m、幅0.43 m、深さ31 cmをはかる。土師器、須恵器の破片若干が出土。

0256土坑（17図）

0255土坑のすぐ西側で検出した平面瓢形の土坑。長軸はほぼ南北、長さ2.65 m、幅1.30 m、深さ28 cm。底面は平坦で、南端のピット上には40～50 cm大の礫が集中する。0002古河川を切る。覆土は暗褐色土。土師器、黒色土器、須恵器などの細片若干が出土。

0260土坑（17図）

M－11区に位置する径0.60～0.75 mの平面円形状の土坑。深さは30 cm。0253溝を切る。糸切り底の土師器皿などが若干出土。

製鉄関連遺構

0173廃滓坑（17図・図版9）

M－12区に位置する。長軸を南北にとる長さ0.80 m、幅0.50 mの平面不整楕円形土坑の東側に、長さ0.50 m、幅0.30 m、厚さ4 cmの小鉄滓溜まりがある。壁面などに熱を受けた痕跡はない。坑の深さは13 cm。44区でも多くの遺構から鉄滓が出土するが、まとまって出土したのはこの遺構だけである。鉄滓以外の出土物はない。

溝・古河川

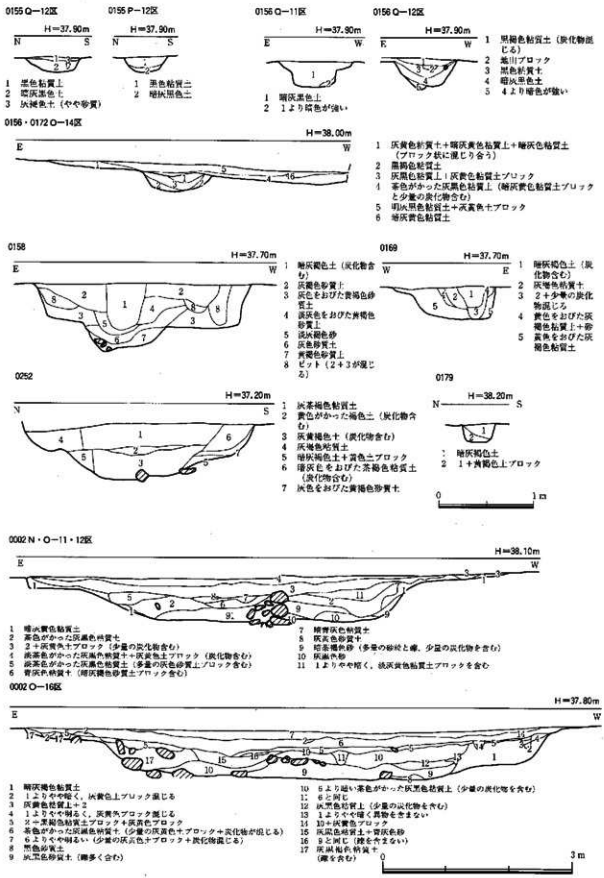
43区から続く0002古河川の他、大小溝を17条確認した。また段落ち遺構もこの項で扱う。

0152溝

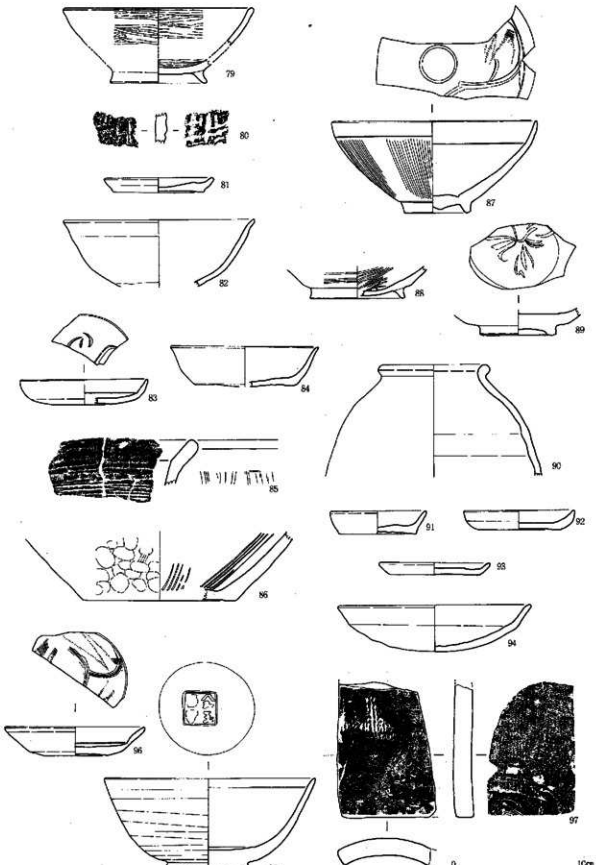
S－12区、調査区東端を南北に走る幅0.55 m、深さ18 cmの溝である。断面はU字形。覆土は黒褐色土。出土遺物はない。

0155溝（19図）

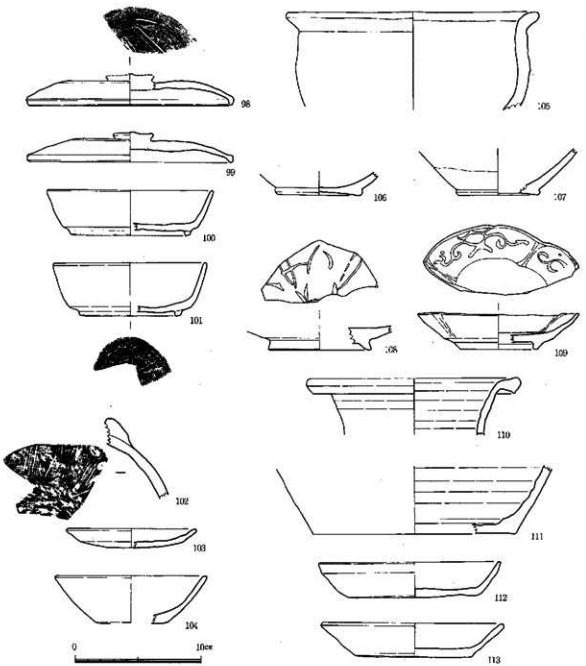
Q－12区調査区境から北北西に約12 m続く幅0.5～0.7 m、深さ15 cm前後の溝。図にその土層断面を示した。0156溝を切るあたりで溝底は浅くなる。また北端部は0171溝に切られる。この部分では溝幅、深さとも小さくなっており、この先さらに溝が続くかは疑問である。出土遺物はない。



19図　44区0155・0156・0158・0169・0172・0179・0252溝，0002古河川土層断面実測図（縮尺 1：40，1：60）



20図　44区溝出土遺物実測図（縮尺1：3）



21図　44区0002古河川出土遺物・表土出土遺物実測図（縮尺1：3）

0156溝（19図・図版9）

0－15区調査区境から北北東に走り、Q－11区の調査区境まで続く幅0.45～0.75m、深さ30cm前後の溝。P－12区付近から向きを北東に変え、0155溝に切られるあたりが溝幅が最も広い。土層断面は図に示した。45区にこの溝の延長は見られない。0267掘立柱建物、0002古河川を切る。

出土遺物（20図79・80）　79は黒色土器椀。内外面ともヘラ磨きを行い、黒く燻したB類。胎土は精良。80は縄文土器粗製深鉢細片。外面は格子目状に凹線を入れる。内面は縦方向の条痕を施す。砂粒が多い胎土で、暗褐色を呈する。他に土師器甕・椀・皿、須恵器などの破片が出土している。

0158溝（19図）

N－11・12区を南北に走る幅2.20m前後の溝。溝底までの深さは73cm。東西側壁とも深さ50cm

部分に平坦面ができ、中央東寄りが一段深くなる。南端部のトレンチ調査にとどめ、そこの土層断面を図示した。0159溝を切る。

出土遺物（20図81～83）　81は土師器皿。口径8.6cm、高さ1.2cm。底部は糸切り。82は白磁碗Ⅸ類。口縁部に釉薬かからない口禿碗である。釉は乳白色で、底部近くは施されない。83は龍泉窯系青磁皿。見込みに片彫りの花文を施す。釉は灰緑色で全面にかけ、底部だけを焼成前に掻き取る。この他土師器皿（大小あり、すべて糸切り底）、龍泉窯系青磁碗（蓮弁文）などの破片が出土。

0159溝

0158溝の東側を北北西に走る幅0.70m前後、深さ35cmの溝。断面はU字形。0161土坑、0158溝に両端を切られる。縄文時代後期の粗製深鉢片1点が出土した。

0168溝

M－11区中央から東北東に走る溝だが、0525溝に北側を切られ幅は不明。溝底幅は0.90m前後、深さは17cm。幅0.50m隔てた西側に、0253溝が同じ方向で走り、同一あるいは関連した溝の可能性がある。0170土坑、0169溝を切る。

出土遺物（20図84～86）　84は土師器杯。口径11.6cm、高さ4.2cm。底部は糸切り。85は土師器鉢。口縁部は外傾し、内面には横方向の粗く強い刷毛目、外面には縦刷毛目調整を行う。胎土には砂粒が多く、暗褐色を呈する。86は土師質のすり鉢。内面には5本一組の筋目が5ヶ所入る。外面は指頭痕が著しい。胎土には砂粒が多く、淡褐色を呈する。他に土師器皿（ほとんど糸切り底）、白磁、龍泉窯系青磁などの破片が出土している。

0169溝（19図）

M－11・12の中央を南北に走る幅0.60m、深さ35cmの溝。図示した土層断面は0257土坑を切った部分である。溝底部分が一段深くえぐれる。0168・0252溝に切られる。

出土遺物（20図87）　同安窯系青磁碗である。形態、内外面の施文など18図75と変わるところがない。釉色はオリーブ。他に土師器皿、龍泉窯系青磁皿片などが出土している。

0172段落ち（19図）

O－14・15区の調査区境に、0156が埋没した後の西側に下がる段落ちがある。東壁から調査区境までの深さは約20cm。0174・0175土坑、0176溝はこの段落ちを切る。

出土遺物（20図88）　黒色土器椀片。内外面ともヘラ磨きし、内面だけを燻したA類である。他に土師器杯、黒色土器椀B類、須恵器片などが出土している。

0177溝

R－17区を北東に走る幅1.50～2.00mの溝。溝肩は出入りがあり、溝内には大小礫が満ちる。深さ48cm。自然流路であろう。

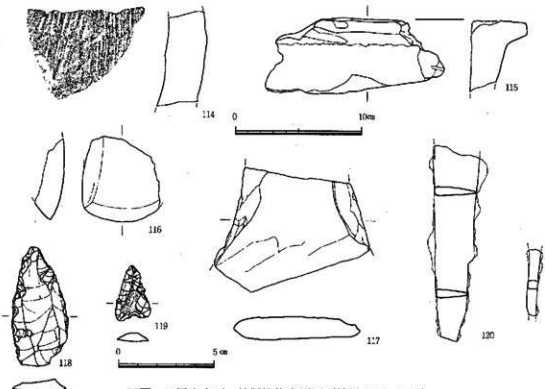
出土遺物（20図89・90）　89は龍泉窯系青磁碗。見込みには沈線を入れ、中に片切彫りの花文を施す。釉は灰緑色で、ガラス質の表面には氷裂ができる。90は中国産陶器壺。口縁は小さく外反し、丸い口唇には日跡が残る。灰緑色の釉が内外面ともかかる。他に土師器甕・皿（糸切り底）、須恵器、白磁などの破片が出土している。

0179溝（19図）

0177溝の南東で検出した東西方向の溝状遺構である。幅は0.30～0.56m、長さ2.90m。深さは10～20cm。土師器の細片4点だけが出土した。

0252溝（19図・図版9）

K～M－11区を東北東に走る溝。北肩は0167溝に切られ確認できない。溝底幅は広いところで1.40



22図　44区出土石・鉄製遺物実測図（縮尺1：2，1：3）

m。図示した土層断面では4層が0167溝になるが、切り合いがうまく図化されていない。南肩は0168・0169・0253溝を切る。

出土遺物（20図91～93、22図120）　91～93は底部糸切りの土師器皿。91は口径7.6cm、高さ1.8cm。92・93は口径8.8cm、高さは92が1.5cm、93が0.9cm。92の底部には板状圧痕がある。120は鉄刀片。残存する刃幅は2.5cm、厚さは0.5cm。他に土師器甕、瓦器、白磁、龍泉窯系青磁、滑石製石鍋片、鉄滓などが出土した。

0253溝（図版9）

0252溝と同方向に走り、M－11区中央で立ち上がる溝。幅1.05m、深さ28cm。断面はU字形を呈する。0168溝と関連するものか。260土坑、0252溝に切られる。

出土遺物（20図94～97）　94は上師器杯。口径15.2cm、高さ3.7cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。95は龍泉窯系青磁碗。口径16.6cm、高さ7.6cm。内面口縁下には沈線をめぐらし、見込みには方格に「金玉□□（満堂か）」の文字を入れた刻印を施す。釉は緑褐色。96は同安窯系青磁皿。見込みに沈線を入れ、その内側に片彫りの花文と櫛描き文を施す。釉は淡青緑色で、底部は露胎となる。97は平瓦片。外面はタタキ、内面には布目痕がある。灰黒色を呈する。他に底部糸切りの土師器皿、瓦器、須恵器、中国産陶器などがある。

0002古河川（19図・図版9）

N・O区を南北に走る。調査区内で川幅が確認できたのはN・O－11・12区だけで、あとは調査区西境に東肩が確認できるだけである。そのためO－16区で西肩を探るためトレンチを設けた。この二つの地区の土層断面を図に示した。川幅は下流のN・O－11・12区が広く9m前後をはかる。深さは70～80cm、底面は平坦。覆土下部には大小礫の混じりが多い。

出土遺物（21図98～111）　98～102は須恵器。98・99は口径16.2cm前後の杯蓋。端部断面はやや丸みを帯びた三角形となる。99には扁平な宝珠形の摘みがつく。98の天井部にはヘラ記号を刻む。100

・101は断面方形の低い高台をもつ杯。100が口径が大きく、身が浅い。また体部と底部の境に稜を作る。101の底部高台内側にヘラ記号を刻む。102は壺であろうか。肩部近くに把手をつける。外面上位は格子状のタタキ、下位は横ナデ、内面上位は縦の擦痕、下位は当て具痕がある。焼きはあまく、灰色を呈する。103～105は土師器。103は皿。口径10.3cm、高さ1.5cm。底部はヘラ切り。内外面に煤の付着があり、灯明皿として使われたものか。104は杯。口径12.0cm、高さ3.8cm。底部の切り離しは不明。105は甕か。口縁は短く外反する。内面はヘラ削りの後ナデ消す。外面には煤が付着する。焼成良好、暗褐色を呈する。

106～108は越州窯系青磁碗。106は上げ底、107は蛇の目高台をもち、黄緑色の釉が内面から外面体部下半までかかる。107の高台には目痕が残る。108は見込みに片切り彫りの花文を施すもので、高台は外に張り出し気味になる。釉はオリーブ色で、全体にかかる。109は白磁高台付皿。口縁は輪花状になり、体部内外面は縦の降線で区画（5区画か）し、内面の区画の間に唐花状の陽刻を施す。見込みには小さな段を設ける。胎土は精良で、半透明で淡灰褐色の釉が全面にかかる。110・111は朝鮮系無釉陶器壺。口縁は横に張り出し、端部は肥厚する。また底部と体部の境はシャープである。内面の横方向の何段ものロクロ目が明瞭である。焼成堅緻、内外面は灰黒色、内部は茶褐色を呈する。

その他の出土遺物（21図112・113、22図115・119）

検出面などで出土した遺物である。112・113は口径14cm前後、高さ2.7cmの土師器皿。底部は糸切りで板状圧痕がある。112の体部と底部の境が丸みをおびるのに対し、113はシャープである。115は滑石製石鍋片。口縁が短く外に出る。内外面とも削り痕が明瞭である。119は安山岩製の石鏃。長さ2.9cm、幅1.9cm、重量2g。

5－2－3　小結

44区では北側に遺構が集中した。それも西北部と東北部に限られた。時代的に遺構をみれば、中央を南北に走る0002古河川が奈良時代のもので、11世紀には埋没している。この古河川の影響で調査区中央に遺構が少ないものであろう。また0153土坑が奈良時代の可能性が高い。東北部に集中する掘立柱建物は重複が多く、少なくとも4時期の建て替えが想定される。周辺ピットの出土遺物を考えあわせると、11世紀～12世紀後半となり、1時期の棟数はきわめて限られたものとなる。建物域は多少南に延びるものの、その主体は西北側にある可能性が強い。西北部の土坑・溝もおよそこの時期に相当する。ただ東西溝は14世紀以降に降る。東側の建物群とは別グループの集落が西南方向に向かって広がるものと想定される。

5－3　45区の調査

5－3－1　概要

45区は44区の南側にあたる。グリットで示せば、北端はJ～P－18、南端はN～P－27に相当し、南北長約96m、東西幅90m、形状的には西北　東南に斜面をもつ三角形に近い。この地区は表土直下に遺構があり、東側と北側の新設道路・水路部分を除いた大半が、工事との調整がつかなかった田面を調査対象地とした。検出面標高は北端で37.66m、南端で37.85m。

45区の発掘は、7月の表土剥ぎから開始し、一部遺構検出を行ったが、本格的な発掘作業そのものは46区が終了しかけた10月13日から始め、12月27日に終了した。調査面積は5085.7m²。

調査区南側を除けば、遺構の密度は濃く、とくに北側部分は足の踏み間もないほどピットが集中していた。このなかから時代の異なる2群の掘立柱建物を検出した。中世の掘立柱建物はほぼ調査区全域に広がりをみせる。調査区西側には竪穴住居が点在する。また調査区中央を46区から続く0301溝が、南北に縦断する。43・44区に続く0002古河川はO・P－18・19で川幅が確認できた。ただ遺構の密度の割には出土遺物が少なかった。45区全体で検出した遺構は掘立柱建物28棟、竪穴住居7基、土坑35基、製鉄関連遺構6基、溝8条、0002古河川、および多数のピットである。

5－3－2　遺構と遺物

掘立柱建物

掘立柱建物は全部で28棟あり、造営時代は大きく二つに分かれる。ひとつは古代以前の建物で、調査区西北部のI～K－19・20区に5棟、他に2棟のあわせて7棟ある。残りは調査区全域に広がる中世の建物である。出土遺物は少ないが、柱構成、柱穴の大小、覆土の違いにより区別は明瞭である。

0851掘立柱建物（23図・図版12）

J・K－19区で検出した3×5間の東西棟である。建物方位はN－75.5°－Eo。梁行の全長は270 cm、桁間は西が3間で、北から120 cm、100 cm、150 cm、東は2間で、北から270 cm、100 cmと揃わない。桁行全長は480 cm、柱間は90～100 cmo。柱間実長は南北で必ずしも対応しない。柱穴は径49～73 cmの円あるいは隅丸方形で、深さは34～72 cm。特定の柱穴が深いという状況はない。柱痕跡は径20 cm前後である。土師器甕等の細片が出土。0876掘立柱建物、0819土坑に切られる。

0852掘立柱建物（23図・図版12）

0851掘立柱建物の東側に位置する2×2間の南北棟である。建物方位はN－25.0°－W。梁行全長310 cm、柱間は東から130 cm、180 cmo。桁行全長340 cm、柱間は北から160 cm、180 cmo。柱穴は径43～89 cmの円あるいは楕円形で、深さは18～54 cmo。柱痕跡は径20 cm前後である。0876掘立柱建物に切られる。

出土遺物（32図121）須恵器杯蓋細片である。口縁端部は小さな三角形で短く立つ。1506出土。

0853掘立柱建物（23図・図版12）

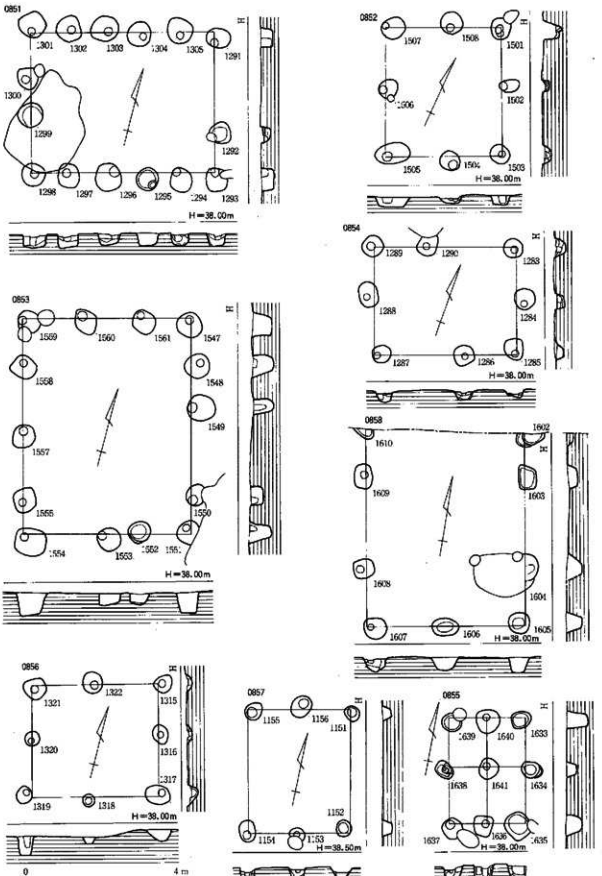
0851掘立柱建物の西南に位置する3×4間の南北棟である。建物方位はN－14.5°－Wo。梁行全長444 cm、柱間は北梁で160 cm、150 cm、134 cmと揃わず、また南梁とも対応しない。桁行全長574 cm、柱間は西桁で北から118 cm、180 cm、190 cm、86 cmと不等。また東桁の柱間実長とも対応しない。柱穴は径62 cm～83 cmの円あるいは隅丸方形で、深さは29～63 cm。柱痕跡は径20 cm前後である。0878掘立柱建物、0823竪穴住居に切られる。土師器甕、須恵器甕など細片数点が出土。

0854掘立柱建物（23図・図版12）

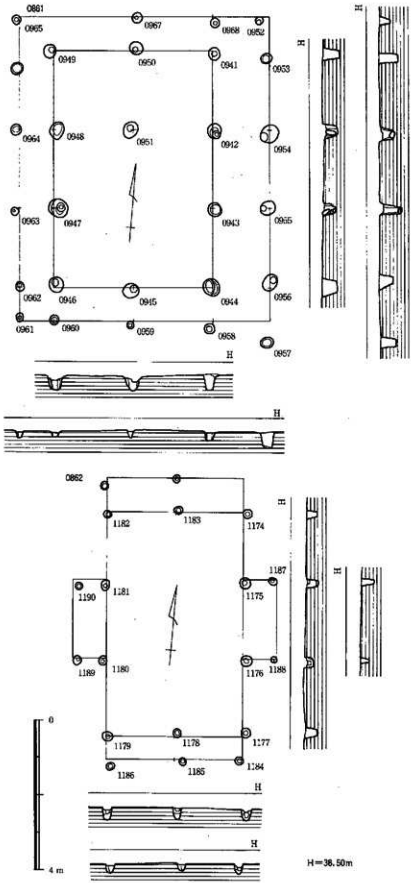
0853掘立柱建物の東南に位置する2×2間の東西棟である。建物方位はN－70.0°－Eo。梁行全長290 cm、柱間は145 cmの等間。桁行全長376 cm、柱間は北側桁が東から240 cm、136 cm、南側桁は逆に東から136 cm、240 cmとなる。柱穴は径48～66 cmの円あるいは楕円形で、深さは24～39 cmo。柱痕跡は径20 cm前後である。0823竪穴住居に切られる。1286柱穴から縄文土器片1点が出土。

0855掘立柱建物（23図・図版12）

0853掘立柱建物の西北に隣接する2×2間の総柱建物である。建物は南北に長く、方位はN－12.0°－Wo。梁行全長200 cm、柱間は100 cmの等間。桁行全長280 cm、柱間は北から130 cm、150 cmo。柱穴は径52～70 cmの円あるいは隅丸方形で、深さは25～58 cmo。柱痕跡は径20 cm前後である。0878掘立柱建物に切られ、0858掘立柱建物と重複する。1633柱穴から土師器細片2点が出土。



23図 45区0851·0852·0853·0854·0855·0856·0857·0858掘立柱建物実測図（縮尺1：100）



24図　45区0861・0862掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

0856掘立柱建物（23図・図版12）

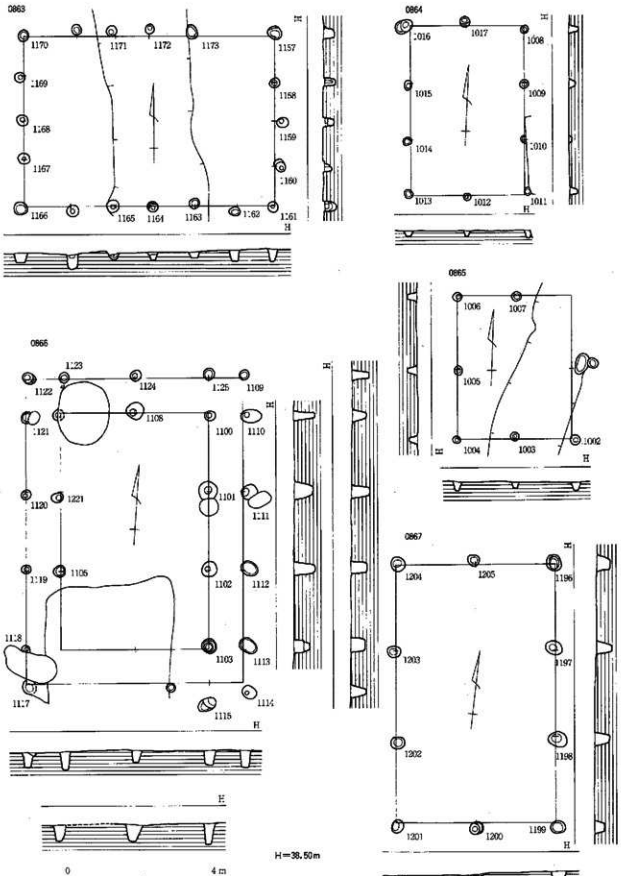
K・L－23区に位置する2×2間の東西棟である。建物方位はN－74.0°－E。梁行全長300cm、柱間は150cmの等間。桁行全長330cm、柱間は東から180cm、150cm。柱穴は径38～68cmの円あるいは楕円形で、深さは16～56cm。柱痕跡は径20cm前後である。0826竪穴住居に切られる。1315・1316柱穴から土師器細片などが出土した。

0857掘立柱建物（23図・図版13）

M－21区に位置する桁行1間、梁行2間の南北棟である。建物方位はN－11.5°－W。梁行全長270cm、柱間は135cmの等間。桁行全長330cm。柱穴は径36～62cmの円あるいは楕円形で、深さは25～56cm。柱痕跡は径20cm前後である。0862掘立柱建物に切られる。1155・1156柱穴から土師器細片が出土した。

0858掘立柱建物（23図・図版13）

I－19区に位置する梁行2間、桁行3間以上の南北棟である。建物方位はN－10.0°－W。梁行全長420cm、柱間は210cmの等間。桁行は540cm以上で、確認できる柱間は南から150cm、240cm、150cm。柱穴は径59～72cmの円あるいは隅丸長方形で、深さは28～43cm。柱痕跡は径20cm前後である。0832土坑に



25図　45区0863・0864・0865・0866・0867掘立柱建物実測図（縮尺１：100）

切られる。6柱穴から土師器甕片、須恵器片、鉄製品、鉄滓が出土。

0861掘立柱建物（24図・図版13）

N・O−22・23区で検出した2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN−5.0°−W。梁行全長420cm、柱間は210cmの等間。桁行全長660cm、柱間は210cmの等間。北1間の身舎中央に床束柱がある。庇は身舎から東側が150cm、他の三面が90cm離れる。柱穴は円形状で径32〜52cm、深さ10〜59cm。身舎、床束および東側庇の柱穴が大きく、深い。

出土遺物（32図122）　土師器皿である。口径9.4cm、高さ1.2cm。底部はヘラ切り。土師器椀、黒色土器B類、鉄滓などが出土。

0862掘立柱建物（24図・図版13）

0861掘立柱建物の西北に位置する2×3間の南北棟で、南北に庇、また東西桁行の中央1間に軒が付く。建物方位はN−5.0°−W。梁行全長360cm、柱間は180cmの等間。桁行全長600cm、柱間は北から180cm、210cm、210cm。南庇は身舎から60cm、北庇および東西軒は90cm離れる。柱穴は円形で径18〜31cm、深さ10〜40cm。身舎と他の柱穴の差はない。1179柱穴から土師器細片1点が出土。0857掘立柱建物を切る。

0863掘立柱建物（25図・図版13）

0862掘立柱建物の西側に隣接する4×6間の東西棟である。建物方位はN−90.0°−E。梁行全長450cm、柱間は東梁で北から105cm、120cm、120cm、105cm、西梁で北から105cm、120cm、100cm、125cmとなるが、1間とばすと東西とも225cmの等間となる。桁行全長660cm。北桁は東側1間の柱穴が抜け、東から210cm、120cm、100cm、100cm、140cmの柱間となり、南桁は東から110cm、110cm、120cm、90cm、120cm、120cmとなる。梁同様1間とばしでの柱間は南北桁とも東から210cm、210cm、240cmとなる。おそらく2×3間の建物に床束を置いたものであろう。柱穴は円形で径24〜42cm、深さ14〜35cm。柱穴の大きさ、深さにとくに差はない。1161柱穴から鉄滓2点が出土したにとどまる。0301溝を切る。

0864掘立柱建物（25図・図版13）

0862掘立柱建物の北東に位置する2×3間の南北棟である。建物方位はN−3.0°−W。梁行全長300cm、柱間は150cmの等間。桁行全長450cm、柱間は150cmの等間。柱穴は円形で径17〜33cm、深さ12〜23cm。柱穴からの出土遺物はない。

0865掘立柱建物（25図・図版14）

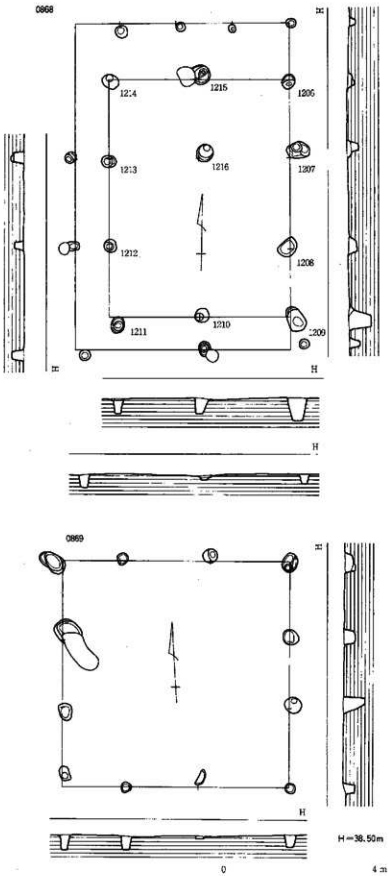
0861掘立柱建物の北東に位置する2×2間の南北棟である。建物方位はN−2.5°−W。梁行全長300cm、柱間は150cmの等間。桁行全長390cm、柱間は195cmの等間。柱穴は円形で径22〜25cm、深さ18〜27cm。0818溝に切られる。1007柱穴から土師器細片1点が出土した。

0866掘立柱建物（25図・図版14）

M・N−19区で検出した2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN−4.5°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長660cm、柱間は210cmの等間。庇は身舎から90cm離れる。柱穴は円形あるいは楕円形で径23〜56cm、深さ32〜56cm。庇柱では東側の柱穴が大きい。0802・0803・0806土坑に切られる。土師器皿（ヘラ切り）、白磁碗Ⅱ類などの細片が出土している。

0867掘立柱建物（25図・図版14）

0866掘立柱建物の西側に位置する2×3間の南北棟である。建物方位はN−7.0°−W。梁行全長420cm、柱間は210cmの等間。桁行全長690cm、柱間は230cmの等間。柱穴は円形で径32〜48cm、深さ22〜44cm。1197・1198柱穴抜き痕から完形の土師器などが出土しており（31図）、建物廃棄後の



26図 45区0868・0869掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

祭祀と考えられる。0868・0877掘立柱建物と重複する。

出土遺物（32図123～127・133・134）

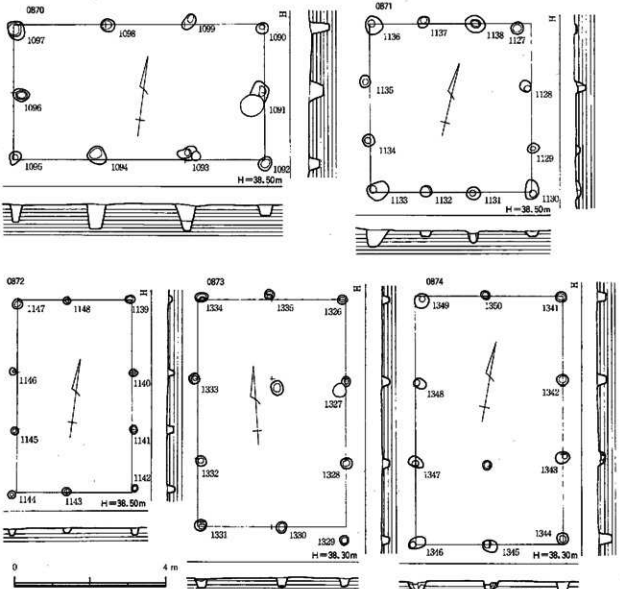
123・124・127は1197柱穴抜き跡から出土したもの。123・124は土師器皿。口径9.5～10.4cm、高さ1.3～1.6cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。127は黒色土器椀B類。133・134はともに1198柱穴抜き跡から出土した土師器である。133は完形の皿で、口径10.3cm、高さ1.5cmをはかる。底部はヘラ切り。134は丸底杯の破片。底部はヘラ切り、体部は横ナデ調整を行う。残りの2点は他の柱穴覆土からの出土で、125は土師器丸底杯、126が黒色土器椀A類片である。

0868掘立柱建物（26図・図版14）

0866掘立柱建物の西側に隣接する2×3間二面庇の南北棟。建物方位はN－1.0°－W。梁行全長480cm、柱間は240cmの等間。桁行全長630cm、柱間は北から210cm、240cm、180cm。北1間の中央に床束がある。庇は東面を除く三面に付き、身舎から北は150cm、南と西は90cm離れる。柱穴は円形あるいは楕円形で径21～60cm、深さ13～60cm。庇柱が全体的に小さい。0867・0877掘立柱建物と重複する。柱穴から土師器杯など3点が出土。

0869掘立柱建物（26図・図版14）

0866掘立柱建物の東側に位置



27図 45区0870·0871·0872·0873·0874掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

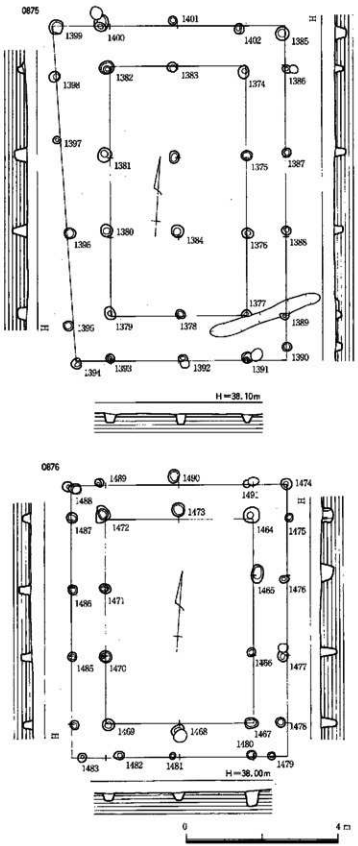
する3×3間の建物である。建物方位はN−3.5°−E。1辺600cmの方形で、柱間は150～240cm。南と北、東と西の柱間実長は一致しない。柱穴は円形あるいは楕円形で径27～71cm、深さ6～57cm。柱穴からの出土遺物はない。

0870掘立柱建物（27図・図版14）

0866掘立柱建物の北東に隣接する2×3間の東西棟である。建物方位はN−82.0°−E。桁行全長360cm、柱間は180cmの等間。桁行全長660cm、柱間は東から210cm、210cm、240cm。柱穴は円あるいは楕円形で径33～55cm、深さ29～70cm。1090柱穴から鉄滓1点が出土。

0871掘立柱建物（27図・図版15）

L・M−23・24区で検出した3×3間の建物である。建物方位はN−14.0°−W。東西全長420cm、柱間は東から150cm、120cm、150cm。南北全長450cm、柱間は150cmの等間。東北隅柱がやや西に寄る。柱穴は円形で径31～59cm、深さ8～47cm。柱痕跡は径20cm前後である。0872掘立柱建物と重複する。柱穴からの出土遺物はない。



28図 45区0875·0876掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

0872掘立柱建物（27図・図版15）

0871掘立柱建物の西側で重複する2×3間の南北棟である。建物方位はN−8.0°−W。梁行全長300cm、柱間は東から170cm、130cm。桁行全長510cm、柱間は北から195cm、150cm、165cm。柱穴は円形で径19～27cm、深さ9～28cm。柱穴からの出土遺物はない。

0873掘立柱建物（27図・図版15）

K・L−22区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN−3.5°−E。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間だが、南梁の中間柱がやや東に寄る。桁行全長600cm、柱間は北から210cm、210cm、180cm。東南隅柱が南に出る。柱穴は円形で径23～31cm、深さ8～27cm。1329柱穴から土師器細片1点が出土。

0874掘立柱建物（27図・図版15）

0873掘立柱建物の西南に位置する2×3間の南北棟である。建物方位はN−9.5°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長660cm、柱間は北から東桁が210cm、210cm、240cm、西桁が240cm、210cm、210cm。柱穴は円形で径27～47cm、深さ18～31cm。0825·0826竪穴住居を切る。

出土遺物（32図128）　高台の低い白磁碗である。見込みに沈線を入れ、内側に櫛描きで花文を施す。釉は灰白色で、高台部が露胎となる。1347柱穴から出土。この他土師器杯、黒色土器椀B類、白磁碗Ⅳ類、滑石製石鍋などの細片がある。

0875掘立柱建物（28図・図版15）

0873掘立柱建物の北側に位置する2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN−5.0°−W。梁行全長360cm、

柱間180cmの等間。桁行全長660cm、柱間は北から240cm、210cm、210cm。身舎中央には東柱が立ち、総柱となる。庇は身舎から北と東が105cm、南が120cm、西が最大150cm離れる。柱穴は円形で径24～43cm、深さ11～33cm。西庇柱がやや小さく、浅い。

出土遺物（32図129）　土師器皿。口径9.2cm、高さ1.1cm。底部はヘラ切り。1386柱穴から出土。他に土師器甕、椀などの細片が若干出土。

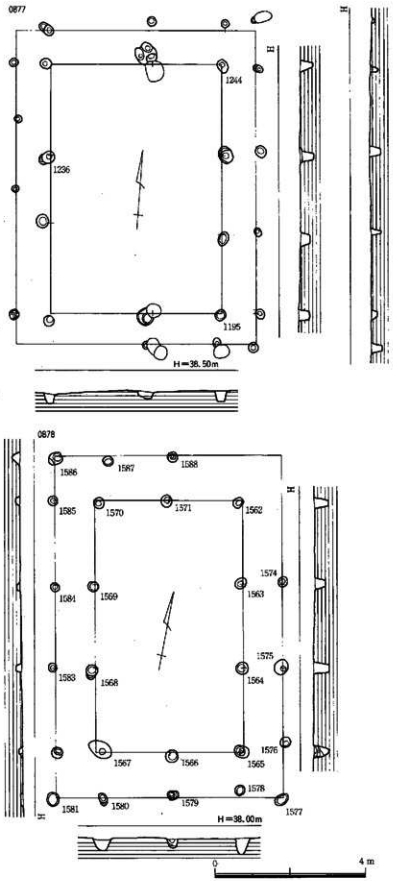
0876掘立柱建物（28図・図版15）

K－18・19区で検出した2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN－4.0°－W。梁行全長390cm、柱間195cmの等間。桁行全長540cm、柱間は北から150cm、210cm、180cm。庇は身舎から90cm離れる。柱穴は円あるいは楕円形で径25～50cm、深さ21～42cm。庇柱がやや小さいが、深さは身舎とほとんど変わらない。

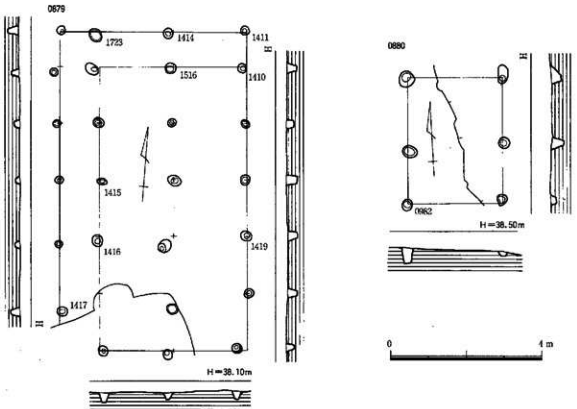
出土遺物（32図130・131）　ともに土師器。130は丸底杯。口径13.0cm、高さ2.6cm。底部はヘラ切り。内面にはコテ当て痕が残る。131は土師器皿。口径9.0cm、高さ1.5cm。底部はヘラ切り。他に黒色土器椀B類、青磁、鉄滓などが出土。

0877掘立柱建物（29図）

M－19・20区で0867・0868掘立柱建物と重複する2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN－4.5°－W。梁行全長450cm、



29図　45区0877・0878掘立柱建物実測図（縮尺1：100）



30図　45区0879・0880掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

柱間は東から180 cm、270 cm。桁行全長660 cm、柱間は北から240 cm、180 cm、240 cm。庇は身舎から90 cm 離れる。柱穴は円形で径18～45 cm、深さ15～55 cm。庇柱が小さく、浅いものが多い。

出土遺物（32図132、49図235・236）　132は白磁小碗。身は浅く、内面に花文を施す。釉は淡褐色。235は滑石製石鍋。厚さ2.5 cm の底部片。236も縦耳をもつ滑石製石鍋片だが、表面、側面とも　再加工する。いずれも1195柱穴から出土。他に土師器杯（ヘラ切り）細片、鉄滓などがある。

0878掘立柱建物（29図・図版16）

I－19・20区で検出した2×3間四面庇の南北棟。建物方位はN－11.0°－W。梁行全長390 cm、柱間は東から195 cm の等間。桁行全長660 cm、柱間は220 cm の等間。庇は身舎から東西が105 cm、南北が120 cm 離れる。柱穴は円形で径22～47 cm、深さ6～55 cm。庇柱が小さく、浅いものが多い。柱穴からは、土師器細片などが少量出土したにとどまる。

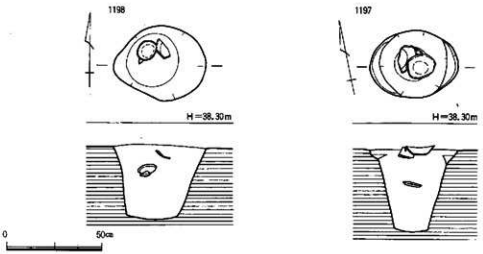
0879掘立柱建物（30図）

K－21区で0875掘立柱建物とならんで建つ2×5間二面庇の南北棟。建物方位はN－4.5°－W。梁行全長390 cm、柱間は東から195 cm の等間。桁行全長750 cm、柱間は150 cm の等間。身舎中央には床束が列び総柱となる。庇は北と西に付き、身舎から北が90 cm、西が105 cm 離れる。柱穴は円形で径16～38 cm、深さ7～37 cm。

出土遺物（49図238）　厚さ1.9 cm の滑石製品片である。方形状の隅部だけが残る。1414柱穴から出土。他に土師器皿（ヘラ切り）、白磁細片、鉄滓などが出土。

0880掘立柱建物（30図）

O－20区で検出した1×2間の南北棟。建物方位はN－3.0°－E。梁行全長250 cm。桁行全長330 cm、柱間は東が165 cm の等間、西が北から180 cm、150 cm。柱穴は円あるいは楕円形で径28～50 cm、深



31図 45区柱穴遺物出土状況実測図（縮尺1:20）

さ15～42cm。0002古河川を切り、0809・0814・0815土坑と重複する。柱穴からは、土師器細片、鉄滓が数点出土したにとどまる。

ピット出土遺物（32図135～146、49図247）

ピットからの出土遺物は少なく、あっても小片が多い。実測できる遺物についてここでとり上げた。

135～141は土師器杯皿類で、すべて底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。図示しなかったものもヘラ切りが多く、糸切りと確認できるものは1～2点にすぎない。135～139は小皿で、口径8.9～10.0cm、高さ1.1～1.5cm。141は口径18.0cm、高さ2.6cmの皿。140は口径16.0cmの杯。142は黒色土器椀B類片。143は須恵器壺。胴部は厚みがあり、角張る。頸部は絞る。口縁下にヘラ記号？がある。焼成良好、灰～灰黒色を呈する。144は須恵器高杯脚部片。焼成はあまく、灰色を呈する。145は中国産陶器四耳壺。口縁端部は断面三角形で、肩部には半環状の耳が付く。釉は黄褐色で、外面口縁～肩部、内面の口縁下～肩部内側付近までを除いた部分に施す。146は縄文土器深鉢あるいは壺の底部片。調整は板状工具によるナデ。胎土には砂粒が多く、焼成良好、褐色を呈する。247は現状で主頭形の砥石である。図の右側面から下側は欠損する。厚さは3.3cm。上面と左側面を砥面とする。安山岩製。

竪穴住居

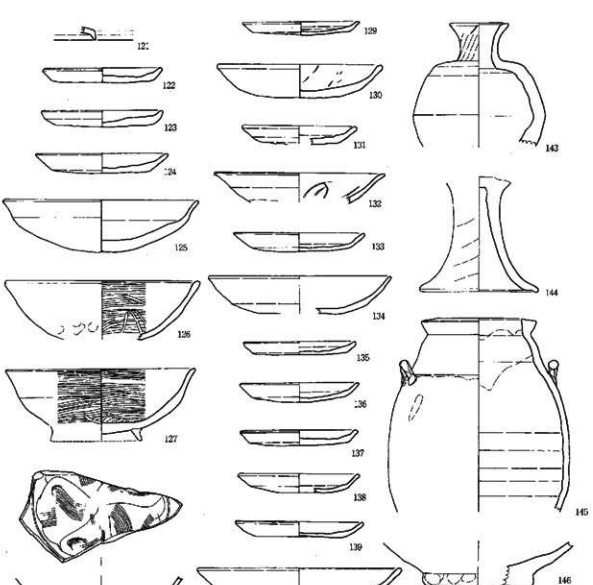
I～K－18～20区で4基、K・L－21～23区で3基のあわせて7基を検出した。0826竪穴住居を除き、竈をもつ。

0821竪穴住居（33図・図版16）

K－18区で検出した南北3.25m、東西3.10mの方形竪穴住居である。壁高は32cm。東側壁中央下に不整形の土坑と焼土・炭化物がみられ、竈の痕跡と考えられる。床面の南北に列ぶ径24～30cm、深さ28～37cmのp1、p2が主柱穴である可能性高い。

出土遺物（35図147・148、50図248・250・252）　147・148は土師器。147は口縁が短く開く甕。外面は板状工具によるナデ。煤が付着する。148は復元口径24cmの皿。内外面とも赤色顔料を施すが、摩滅して残りは悪い。50図の3点は鉄刀子。248に比べ他の2点は刃幅が小さい。

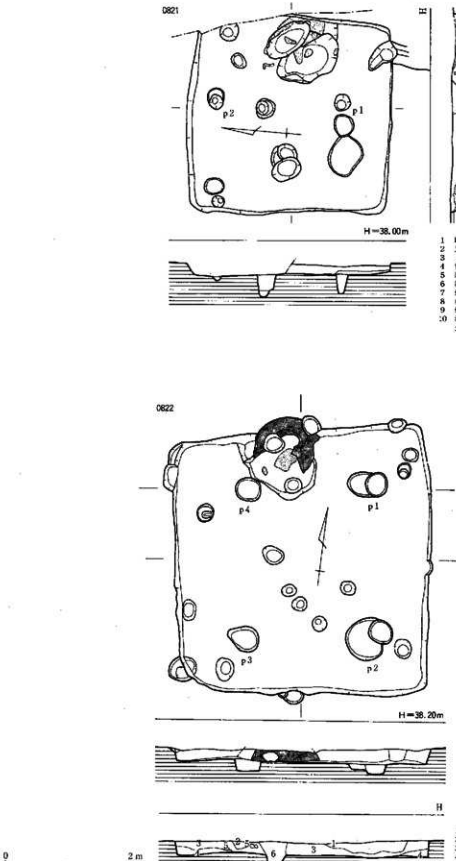
0822竪穴住居（33図・図版16）



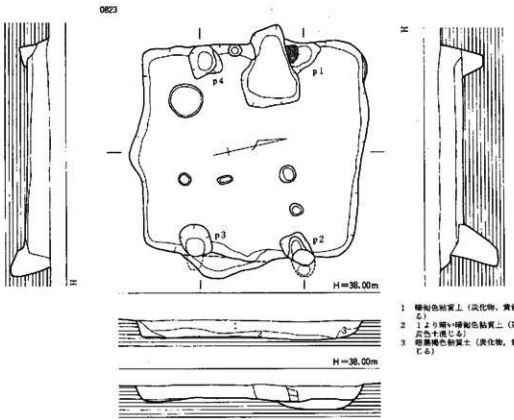
32図　45区掘立柱建物，ピット出土遺物実測図（縮尺1：3）

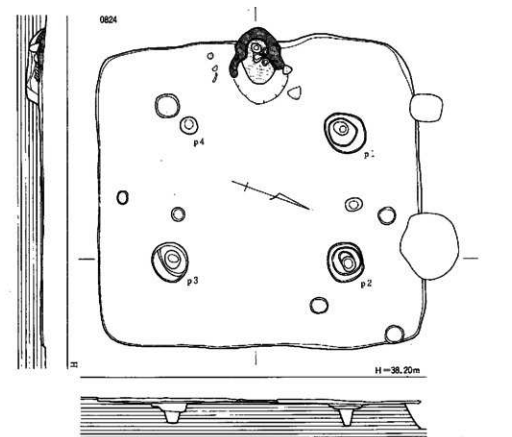
K－19・20区で検出した南北4.20m、東西4.05mの方形竪穴住居である。東側壁がわずかに長く、西南隅は丸みをもつ。壁高は25cm。北側壁中央やや西寄りに、竈の基底部が残存する。焚口部分は一段掘りくぼめ、中には焼土・炭化物が多い。主柱穴はp1～p4で、径40～50cm、深さ10～20cmをはかる。柱間はp1－p2が2.4m、p2－p3が2.1m、p3－p4が2.4m、p4－p1が2.0m。

出土遺物（35図149～151）　149は須恵器杯。復元口径10.0cm。立ち上がり部は小さく、内傾する。底部のわずかな部分にだけヘラ削りを行う。0823竪穴住居出土破片と接合する。150は土師器甕。張った胴から口縁が立ち上がり、端部が小さく外反する。151は土師器高杯。杯部外面はヘラ磨き、筒部外面は縦方向のヘラ削りを行う。

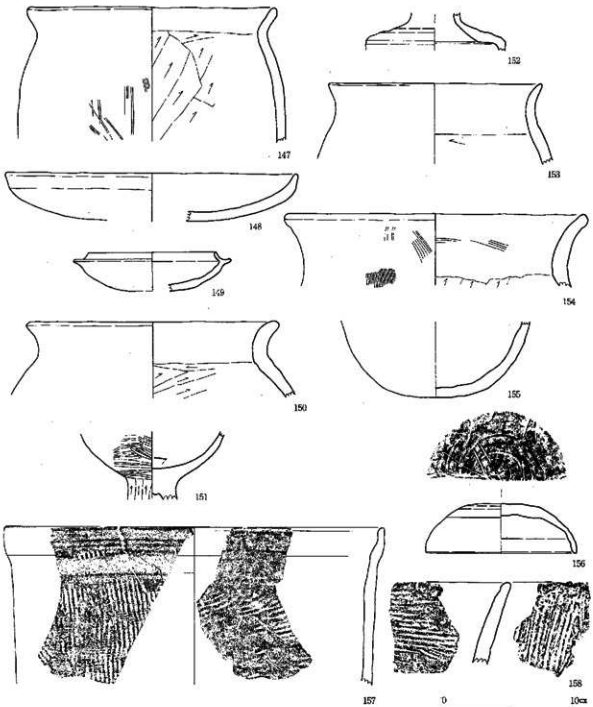


33図　45区0821・0822竪穴住居実測図（縮尺1：60）





34図　45区0823・0824竪穴住居実測図（縮尺１:60）

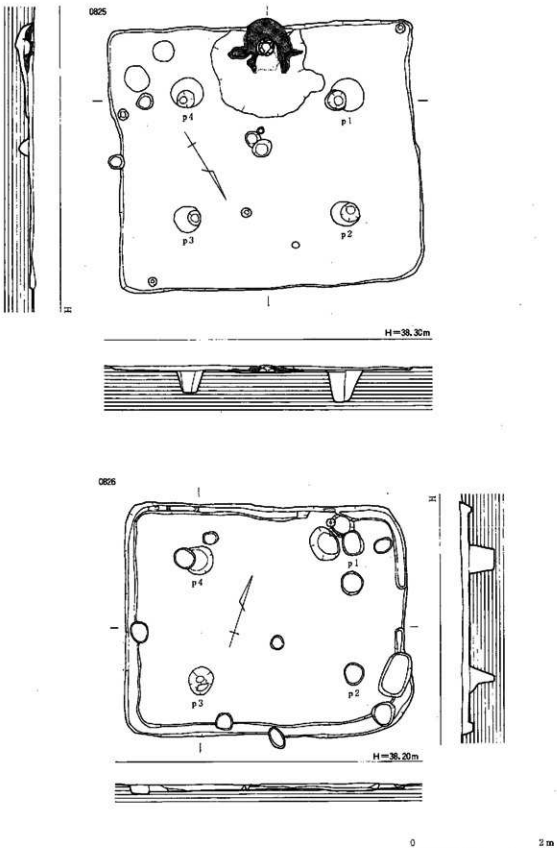


35図　45区0821・0822・0823・0824竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1:3）

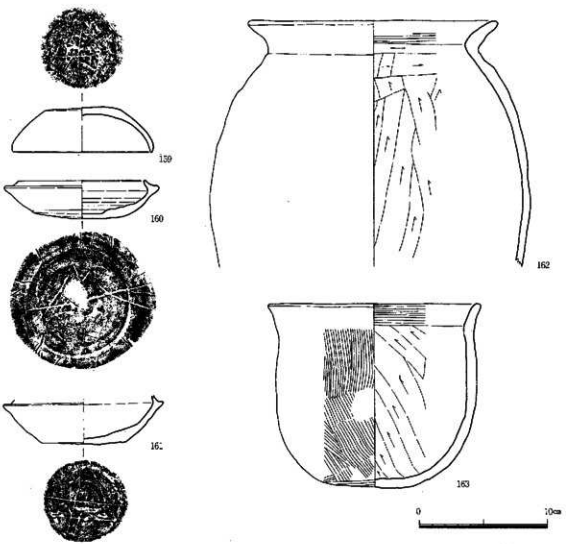
0823竪穴住居（34図・図版16）

0822竪穴住居の西側に位置する。南北3.50m、東西3.60mの平面方形の竪穴住居である。西北、北東隅は丸みをもつ。壁高は30cm。西側壁中央やや北寄りに、竈の痕跡と焚口の掘り込みが残る。その周囲には焼土・炭化物が多い。床面中央は硬くしまる。主柱穴は東西側壁下に設けたp1～p4で、径40～55cm、深さ15～75cmをはかる。垂直に掘るのではなく、住居内部に傾け、斜めに掘り下げている。柱間はp1－p2が3m、p2－p3が1.5m、p3－p4が3m、p4－p1が1.5m。北側床面は貼床で、当初の掘削面は20cmほど深い。0853・0854掘立柱建物を切る。

出土遺物（35図152～155）　152は須恵器甕片であろう。153～155は土師器甕。大小あるが、口縁



36図 45区0825・0826竪穴住居実測図（縮尺1：60）



37図　45区0825竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1：3）

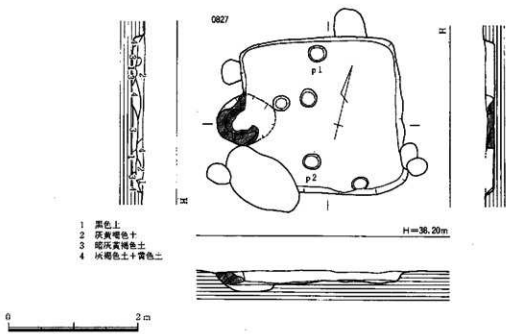
の外反は小さく、端部は丸くおさめる。154の口縁は内外面とも刷毛目をナデ消す。未実測の出土遺物にも土師器甕の破片が多い。

0824竪穴住居（34図・図版16）

K－21・22区で検出した南北4.85m、東西5.10mの平面方形の竪穴住居である。周壁の隅は全体に丸みをもつ。壁高は15cm。西側壁中央に、竈の基底部が残存する。竈の壁体は黄白色の砂質土であるが、ほとんど残らない。焚口部分は焼けて硬くなり、周囲には焼土・炭化物が多い。主柱穴はp1～p4で、径28～72cm、深さ33～52cmをはかる。柱穴のものは30cm前後である。柱間はp1－p2が2.15m、p2－p3が2.80m、p3－p4が2.15m、p4－p1が2.45mo

出土遺物（35図156～158）　156は須恵器杯蓋。口径11.9cm、高さ3.9cm。天井部の約半分にヘラ削りを行い、その後ヘラ記号を刻む。端部は丸くおさめる。157は土師質の甑であろうか。直線的な胴部から外側に屈曲して口縁が立つ。外面は平行タタキ、内面は当て具痕を部分的にナデ消す。砂粒を少し含んだ胎土で、焼成良好、褐色を呈する。158は縄文土器粗製深鉢。外面は縦、内面は横方向に条痕を施す。

0825竪穴住居（36図・図版16・17）



38図 45区0827竪穴住居実測図（縮尺1：60）

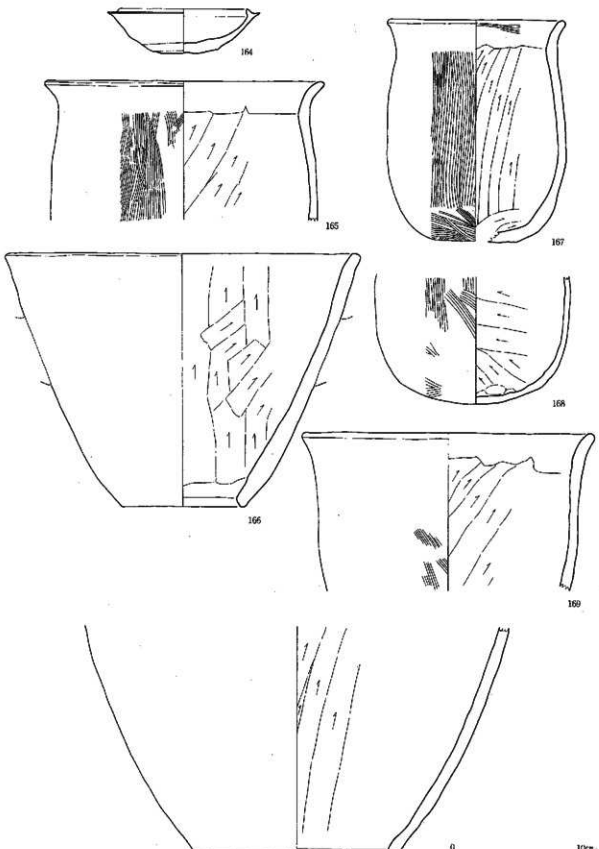
0824竪穴住居の南側に位置する長さ4.70m、幅4.35mの南東－西北に建物軸をとる竪穴住居である。平面はおおむね方形。壁高は8cmと残りが悪い。西側壁中央に竈の基底部が残存する。竈の中央は一段掘りくぼめ、胴下半部を打ち欠いた甕を据え付け、支台とする。焚口部分は焼けて硬くなり、周囲には焼土・炭化物が多い。主柱穴はp1～p4で、径42～51cm、深さ35～51cmをはかる。柱そのものは20～30cmと考えられる。柱間はp1－p2が1.75m、p2－p3が2.45m、p3－p4が1.90m、p4－p1が2.45m。竈の北側床面に小鉄滓を10個ほどまとめ置いている。

出土遺物（37図159～163）　159～161は須恵器杯蓋。いずれも天井部あるいは底部にヘラ記号を刻む。159は蓋。口径11.0cm、高さ3.5cm。天井部のわずかな部分をヘラ削りし、平坦にする。160・161は口径10.0～11.0cm、高さ3.0～3.7cmの杯。ともに立ち上がり部は短く、受け部も小さい。底部のヘラ削り範囲も少ない。162は土師器甕。口縁部の屈曲は大きく、内面に稜を作る。外面はヘラ状工具による縦方向のナデ。胴部最大径部分に黒斑がある。163は土師器鉢。張りのない胴部から口縁部が緩く外傾する。口縁内面と胴部外面は刷毛目調整。胴部には煤が付着する。竈横以外に粗土からも鉄滓が出土している。

0826竪穴住居（36図・図版17）

0825竪穴住居の南側に位置する東西長4.40m、南北幅3.65mの平面長方形の竪穴住居である。壁高は15cm。周壁下には幅20cm前後、床面からの深さ10cm前後の周溝をめぐらせるが、東側壁中央下と北側壁下東寄りの二ヶ所で途切れる。北東隅の床面には焼土のブロックがみられ、また遺物も集中する。主柱穴はp1～p4で、径36～57cm、深さ10～42cmをはかる。柱間はp1－p2が2.10m、p2－p3が2.45m、p3－p4が1.90m、p4－p1が2.10m。0856掘立柱建物を切る。

出土遺物（39図164～168）　164は須恵器杯。口径10.0cm、高さ3.5cm。立ち上がり部は短く、受け部は細い。ヘラ削りは底部の約3分の1に行う。残りの4点は土師器。165は甕。胴部は張りがない。166は甑。残存部に把手はみられない。外面は粗い刷毛目調整のようだが、摩滅が著しい。167・168は鉢。やや下膨れの胴部で、口縁の外反も小さい。底部は平底に近くなる。ともに外面は刷毛目調整で、煤が付着する。



39図　45区0826·0827竪穴住居出土遺物実測図（縮尺１：３）

0827竪穴住居（38図・図版17）

I－19・20区で検出した幅2.50mの平面方形の竪穴住居である。周壁の隅は全体に丸みをもつ。壁高は20cm。西側壁中央に、竈の基底部が残存する。焚口部分は焼けて硬くなり、周囲には焼土・炭化物が多い。上柱穴はp1、p2の可能性が高く、径28cm、深さは10cmに満たない。柱間は1.70m。床面中央は硬くしまる。

出土遺物（39図169・170、50図251）　169は土師器甕。胴の張りはほとんどなく、口縁部の外反も小さい。外面には刷毛目調整が残る。170は土師器甑。外面は刷毛目をナデ消したものであろうか。251は鉄刀子片。刃幅は0.9cm。

土坑

上坑は調査区全域から35基確認した。その性格、時代は多様にわたると考えられるが、ここでは実測図を掲載した土坑を中心に報告する。

0803土坑（40図・図版17）

M－19区で検出した長軸を南北にとる平面楕円形の土坑である。長さ1.67m、幅1.30m、深さ52cm。覆土は図示した。土師器杯・皿（底部ヘラ切り）、黒色土器椀B類などが出土した。0866掘立柱建物を切る。

0804土坑（40図）

M－20区で検出した長軸を東西にとる平面長方形土坑である。西側壁は丸みをおびる。長さ4.34m、幅1.14m、深さ11cm。出土遺物はない。

0805土坑（40図）

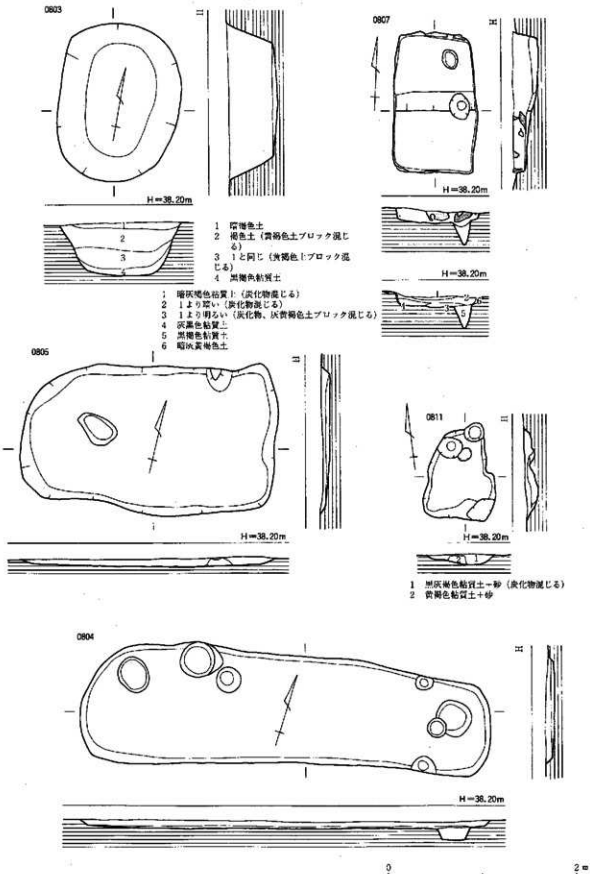
0804土坑の南側に位置する平面不整長方形の土坑である。長軸を東西にとり、長さ2.70m、幅1.57m、深さ11cm。

出土遺物（44図171～178）　171～177は土師器。171は口径9.2cm、高さ0.9cmの皿。底部はヘラ切り。172・173は杯。172は内面に細かい刷毛目調整を行う。173はヘラ切りの丸底で、板状圧痕がある。174～176は椀。174が比較的高い高台をもつのに対し、175・176は断面三角の低い高台となる。174・175には横のヘラ磨きを施し、また176の内面にはコテ当て痕が残る。177は口縁内側に段を作り、また体部が屈曲するもの。内面は細かい刷毛目調整を行う。178は中国陶器の無釉鉢。胎土には砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。他に黒色土器椀A類や白磁の細片とともに鉄滓が出土している。

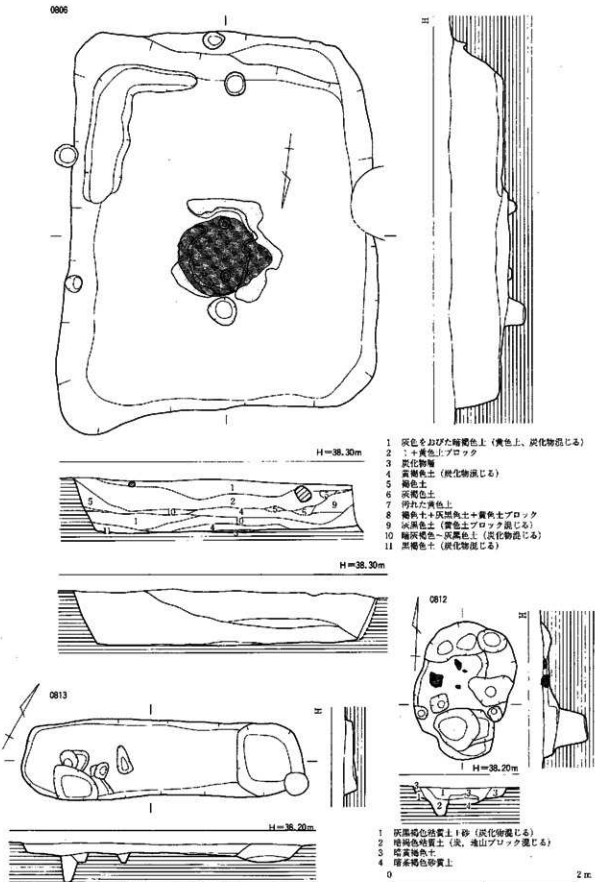
0806土坑（41図・図版17）

M・N－19・20区に位置する南北に長軸をとる平面長方形の土坑である。長さ4.00m、幅3.20m、深さ63cmをはかる。南側壁には段がつき、また南東隅側壁下には逆L字状に幅45cm前後、底面からの深さ10cm程度の溝がある。底面中央北寄りには径1.10m前後、幅0.15m前後の環状の焼土があり、その中央は15cmの深さでくぼみ、中には炭化物が充満する。粘土で囲った炉跡であろう。この炉跡のすぐ北と、南側壁下に径25～30cm、深さ8～24cmのピットがあり、これを主柱穴に覆屋を作った可能性がある。底面東側は硬くしまっている。0866掘立柱建物を切る。

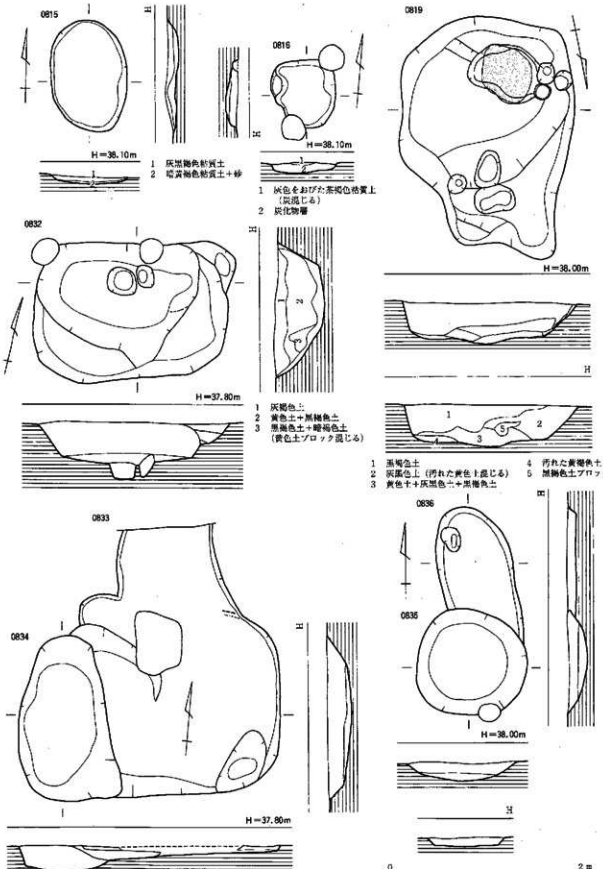
出土遺物（44図179～189、49図245・246）　179～187は土師器である。179・180は皿で、口径8.7cm～10.2cm、高さ1.1～1.2cm。底部はヘラ切り。181・182は杯。181は口径15.2cm、高さ3.6cm。底部はヘラ切りで、内面にはコテ当て痕が残る。183～187は椀。口径14.5～17.0cm、高さ5.4～5.8cm。いずれも体部は内外面ともヘラ磨きで仕上げる。184の底部には板状圧痕がある。188・189は白磁碗。188はⅣ類の底部片で、見込みに沈線を施ける。釉は淡黄白色。189は薄手の作りで、見込みに



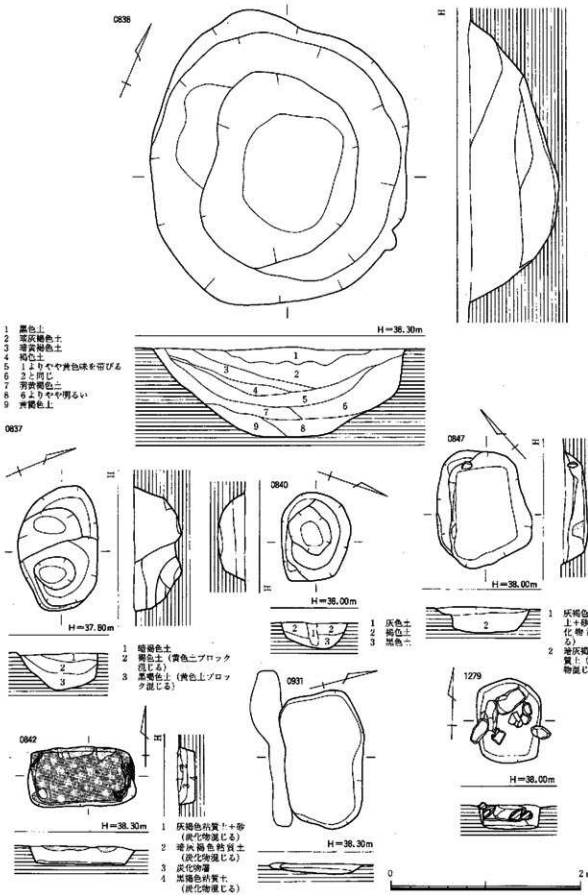
40図 45区0803・0804・0805・0807・0811土坑実測図（縮尺1：40）



41図 45区0806·0812·0813土坑実測図（縮尺1：40）



42図 45区0815・0816・0819・0832・0833・0834・0835・0836土坑実測図（縮尺1：40）



43図 45区0837・0838・0840・0842・0847・0931・1279土坑実測図（縮尺1：40）

は花文を描く。内底中央は丸く削り残し、花心に見立てている。釉は淡灰色。245・246は砂岩製の砥石。ともに欠損するが、長方形状で、246は端部が丸くなる。砥面として利用しているのは、245がすべての面、246が図左側面を除いた面である。

0807土坑（40図）

O－19区で検出した南北に長軸をとる平面長方形の焼土坑である。長さ1.47m、幅0.84m。底面は北側が一段低くなり、深さ27cm。側壁面は赤く焼け、覆土は粘質土で炭化物が混じる。土師器皿など細片3点が出土した。

0811土坑（40図）

O－20区で検出した長さ0.95m、幅0.70mの不整形土坑である。底面も凹凸が激しく、最も深い部分で15cm。鉄滓だけが出土した。次の0812土坑とともに廃滓坑の可能性もある。

0812土坑（41図）

0811土坑東南側に位置する不整楕円形土坑。長軸は南北にとり、長さ1.46m、幅1.00m。ピットが切り合い、底面は中央部にしか残らない。検出面からの深さは8cm。覆土から鉄滓だけが出土。

0813土坑（41図）

N－20区、0806土坑の東南に位置する平面長方形の土坑。東西に長軸をとり、長さ2.95m、幅0.80m、深さ13cm。床面東側は一段掘り下げる。覆土は暗褐色土。土師器皿（ヘラ切り）、黒色土器椀A類など細片9点が出土した。

0815土坑（42図）

O－20区で検出した南北に長軸をとる平面楕円形の土坑。長さ1.17m、幅0.80m、深さ13cm。覆土は図示した。出土遺物はない。

0816土坑（42図）

O－20区で検出した平面不整方形の土坑。長さ0.70m、幅0.67m、深さ13cm。覆土は図示したように炭化物が混じる。出土遺物はない。

0819土坑（42図・図版17）

J－19区で検出した南北に長軸をとる不整方形の土坑。長さ2.40m、幅1.80m。南側が丸みをおびる。北側壁に段がつき、底面は1.50×1.10mほどの楕円形となる。検出面から底面までの深さ49cm。この底面の西南隅に炭化物・焼土を覆土とする幅0.80×0.60m、深さ13cmの楕円形ピットがある。0851掘立柱建物を切る。

出土遺物（44図190）　須恵器甕口縁片である。外面に2本一組の沈線を2段にわたって配し、その間と上下に櫛描きの波状文を施す。他に土師器甕片などが出土。

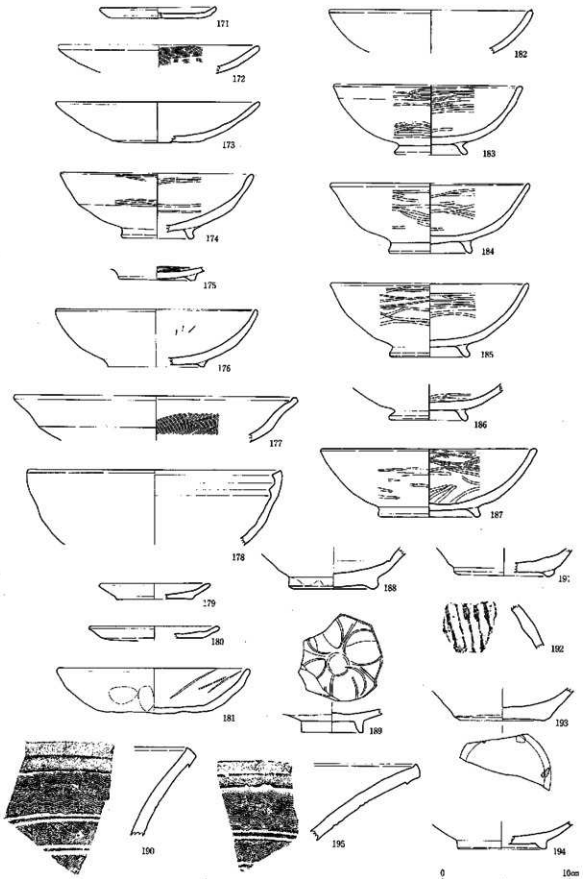
0832土坑（42図）

I－19区で検出した東西に長軸をとる平面隅丸長方形の土坑。長さ2.05m、幅1.42m。南側側壁には段がつき、底面は1.20×0.65mの楕円形状となる。深さは50cm。0858掘立柱建物を切る。古代の土師器、須恵器の細片が、鉄滓とともに出土。

0833土坑（42図）

0832土坑の北側に隣接する平面方形の土坑。南北幅2.00m、深さ10cm。底面は凹凸になる。覆土は灰黒色土に黄色土ブロックが混じる。0858掘立柱建物を切り、また西側で0834土坑を切る。

出土遺物（44図191～194）　191は土師器椀底部片。断面方形状の低い高台が付く。192は外面に縦の平行タタキを施す土師器甕片。内面は摩滅する。193は越州窯系青磁椀底部片。わずかに上げ底で、内外底に日跡がある。釉はオリーブ色で、底部は掻き取る。194は土師質の緑釉陶器椀底部片である。



44図 45区土坑出土遺物（縮尺1：3）

高台は外面が直立、内面が傾斜する。釉はうす緑色で、畳付き以外に施すが、剥落が著しい。
胎土は精良である。他に須恵器甕片、土師器高杯片、鉄滓などが出土している。

0834土坑（42図）

0833土坑に切られる平面楕円形の土坑である。長軸は南北で、長さ1.75m、幅0.27m、深さ27cm。覆土は黄色土混じりの黒褐色土。土師器甕、須恵器杯などの細片が若干出土。

0835土坑（42図）

J－21区で検出した径1.17mの円形土坑。深さは20cm。覆土は褐色土。0836土坑を切り、0879掘立柱建物に切られる。土師器皿（ヘラ切り？）細片、鉄滓などが出土。

0836土坑（42図）

0835土坑に南側を切られる平面楕円形の土坑。長軸は南北で、長さは1.80m前後、幅0.80m、深さ10cm。覆土は灰褐色土。土師器甕・皿（ヘラ切り）片、滑石石鍋片、鉄滓などが出土。

0837土坑（43図）

I－20区で検出した長軸を南北にとる平面楕円形の土坑。長さ1.30m、幅0.83m。底面は東西2段になり深さ51cm。0827竪穴住居を切る。土師器甕・皿、須恵器などの細片が若干出土。

0838土坑（43図・図版18）

調査区の南端近くO－26区で検出した南北に長軸をとる平面楕円形の土坑。長さ3.05m、幅2.68m。側壁には段がつき、底面は長さ1.20m、幅1.20mの楕円形となる。検出面から底面までの深さ94cm。覆土は灰～黄褐色土を主体とする。大きな土坑であったにもかかわらず出土遺物はない。

0840土坑（43図）

J－22区で検出した長軸を南北にとる平面楕円形の土坑。長さ0.93m、幅0.68m。側壁には段がつき、底面までの深さ27cm。覆土下層は黒色土。土師器皿（ヘラ切り？）などの細片が出土。

0842土坑（43図）

P－24区で検出した平面長方形の焼土坑である。長軸は東西で、長さ1.10m、幅0.62m、深さ19cmをはかる。側壁は焼け、覆土には焼土、炭化物を多量に含む。出土遺物はない。

0847土坑（43図）

O－22区で検出した平面不整長方形の焼土坑である。長軸は東北－西南で、長さ1.20m、幅1.00m。西側壁には段がつき、底面までの深さ19cmをはかる。西側壁を中心に焼け、また覆土には焼土、炭化物を多量に含む。出土遺物はない。

0931土坑（43図）

N－25区で検出した長軸を東西にとる平面長方形の土坑。長さ1.45m、幅0.80m、深さ11cm。覆土は灰褐色土。土師器杯（ヘラ切り）、黒色土器椀A類などの細片が若干出土。

1279土坑（43図）

L－20区で検出した長軸を南北にとる平面長方形の土坑。北側壁は膨らむ。長さ0.90m、幅0.66m、深さ25cm。坑内には大小礫が入る。土師器杯片などが出土。

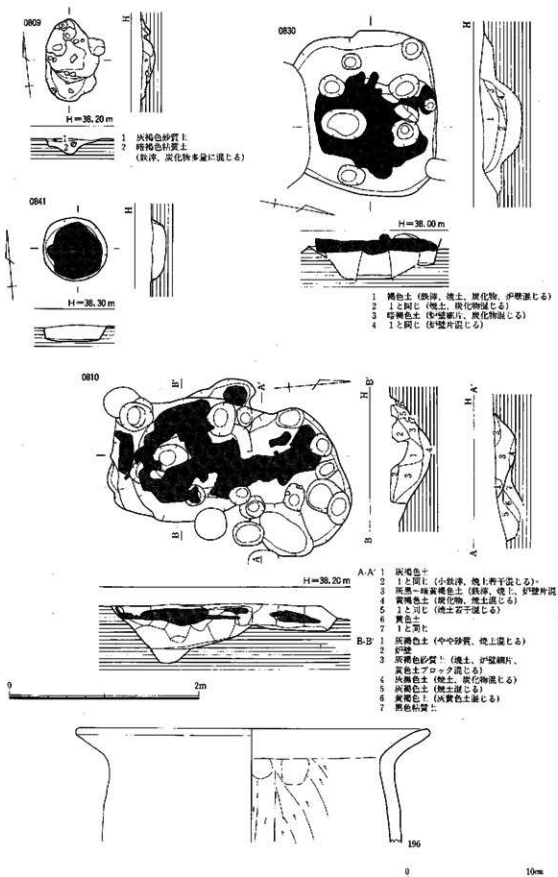
1537土坑

J－20区で検出した長軸を東西にとる平面楕円形の土坑。長さ0.90m、幅0.54m、深さ60cm。

出土遺物（44図195）　須恵器甕口縁片である。外面に2本一組の沈線を2段にわたって配し、その間と上下に櫛描きの波状文を施す。他に土師器片などが出土。

製鉄関連遺構

製鉄に関係する遺構はO・P－18～20区で主に検出した。ただ0841廃滓坑が調査区中央部に単独で



45図 45区0809·0810·0830·0841製鉄関連遺構及び出土遺物実測図 (縮尺1:40,1:3)

位置する。しかしその多くが廃滓坑で、炉としてとらえられるのはなかった。

0809廃滓坑（45図）

O－20区で検出した不整形土坑である。南北長0.88m、東西幅0.56m、深さ15cm。底面は凹凸が著しい。覆土からは鉄滓5袋と砂鉄、鍛造剝片が出土した。

0810廃滓坑（45図・図版18）

O－18区で検出した南北に長軸をとる不整楕円形土坑である。長さ2.50m、幅1.30m。底面は南側が一段深くなる。検出面からの深さは64cm。坑内上部には炉壁片、鉄滓などがまとまって廃棄されている。壁面に被熱の跡は認められない。0830廃滓坑を切る。大量の炉壁、鉄滓、鍛造剝片とともに、土師器杯・皿（ヘラ切り）、黒色土器椀A・B類、白磁、施釉陶器などの細片が出土した。この上坑周辺のピットからは鉄滓の出土が多い。

0830廃滓坑（45図）

南側を0810廃滓坑に切られる平面隅丸長方形の土坑である。長軸を東西にとり、長さ1.74m、幅1.50m、深さ42cm。坑内は多くのピットに切られるが、中央上部を中心に炉壁片や鉄滓が廃棄されている。この遺構の東側、0002古河川西肩部分には、鉄滓が面的に広がる（0846遺構）。鉄滓、炉壁片以外の出土遺物はない。

0841廃滓坑（45図・図版18）

M－22区で検出した。径0.67m、深さ18cmの浅い円形土坑の中に、鉄滓が堆積する。側壁面の一部には焼土がみられる。鉄滓の他に土師器皿（ヘラ切り）などの細片が少量出土した。

0843廃滓遺構

P－20区の0002古河川の東肩部分を掘り下げた際、鉄滓や炉壁がまとまって出土した。遺構の形状などは調査区の制約があり、確認できなかった。

出土遺物（45図196）　土師器甕である。口縁は大きく外反する。外面は刷毛目をナデ消す。他に黒色土器椀A類などの破片が出土している。

溝・古河川

溝8条と0002古河川を検出した。このうち46区から続く0301溝は調査区を縦断する。また調査区西端には西北方向に1670溝が走る。0002古河川はP－25区から姿を現し、北進する。この古河川西肩にとりつく溝として0818・0845がある。0301溝および0002古河川は10mごとにトレンチを入れただけで、全掘はしなかった。

0301溝（46図・図版18）

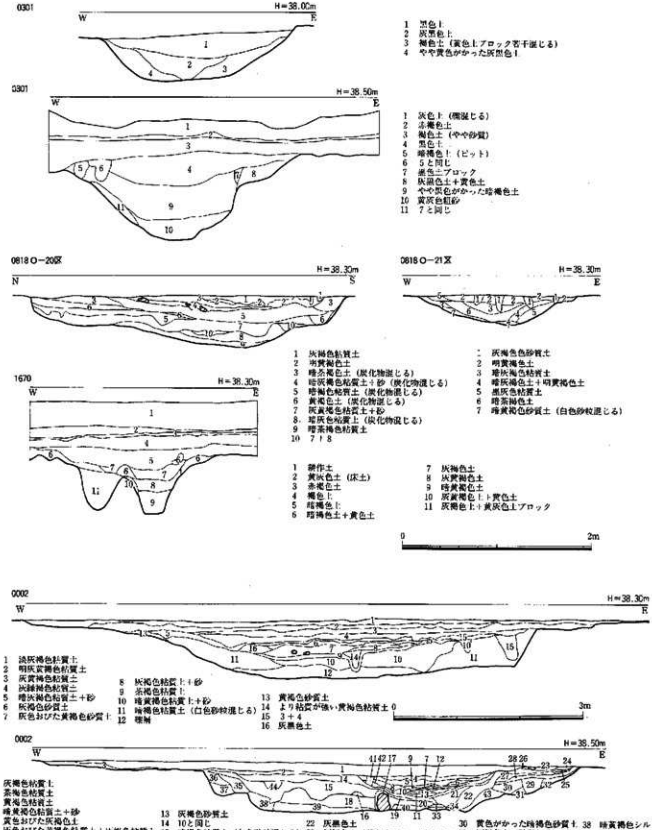
46区から北北西方向に直線的に走る溝である。幅は2m前後、深さは北端部で90cm。断面は逆台形を作る部分が多い。図は上からL－20区のトレンチ、北端部の土層断面を示した。

出土遺物（47図197）　縄文土器粗製深鉢の口縁片である。口縁端部にヘラで×状の刻み目を連続して施す。外面は横方向の条痕。他に土師器、須恵器の細片などが少量出土している。

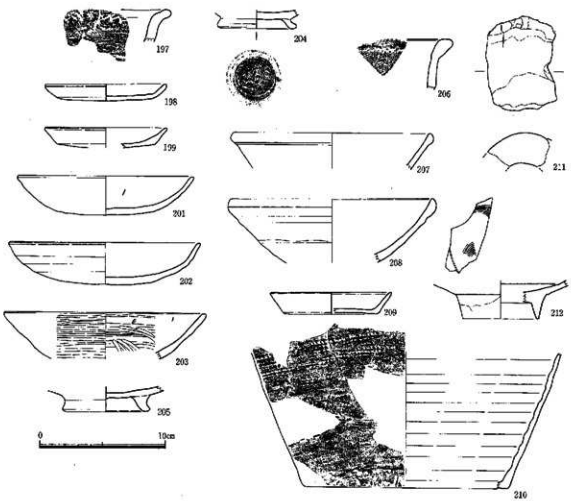
0801溝

L区で南北に続く西側への段落ち下にある溝。L－22区から始まり、ほぼ真北に走る。幅は1m前後、深さは25cm。覆土は灰褐色砂質土。底面は凹凸が激しい。現水路はこの溝の上につくる。

出土遺物（47図198・199、201～211、49図234・237・240、50図254）　198・199・201～204は土師器。198・199は皿で、口径9.6cm、高さ1.3～1.6cm。底部はともにヘラ切りで、199には板状圧痕がある。201・202は丸底杯。口径14.0～15.1cm、高さ3.1～3.4cm。底部はともにヘラ切りで、板状圧



46図 45区0301・0818・1670溝，0002古河川土層断面実測図（縮尺1：40，1：60）



47図 45区溝出土遺物実測図（縮尺1：3）

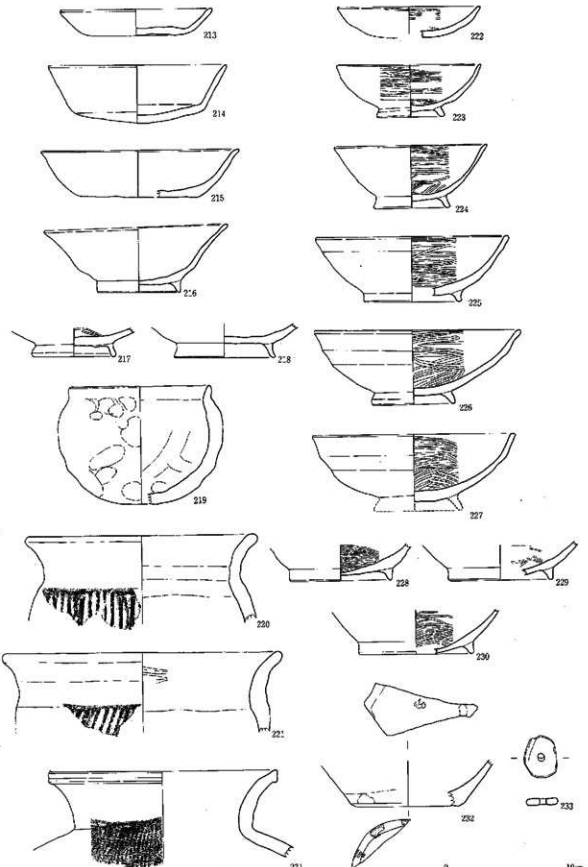
痕がある。203・204は椀。203は内外面ともヘラ磨きで仕上げる。204の高台内側にはヘラ記号を刻む。205は黒色土器椀B類。ヘラ磨きで仕上げているようだが、摩滅が著しい。206は須恵器甕片。口縁端部は肥厚する。外面口縁下には波状文を施す。207～209は白磁。小さな玉縁をもつ碗Ⅱ類。釉は灰白色。208は碗Ⅳ類。釉は青灰色。209は口禿の皿。釉は乳白色で、口縁端部と底部は掻き取る。210は朝鮮系無釉陶器底部片。外面は格子目タタキの後、横ナデ調整をする。内面は横ナデで、凹凸が著しい。精良な胎土で、焼成堅緻、灰黒色を呈する。211はフイゴ羽口片。図の上が炉体に挿入した部分で、被熱でガラス化する。234は縦耳をもつ滑石製石鍋片。内面は削りの後磨く。外面には煤が付着する。237は滑石製品片。幅4.5cm、厚さ3.0cmの多面体の一端を削り出す。240は安山岩製の石鏃。基部の一端が欠損する。254は鉄釘であろうか。断面は幅0.4cmの方形。この他縁釉陶器の細片、鉄滓なども出土している。

0818溝（46図・図版18）

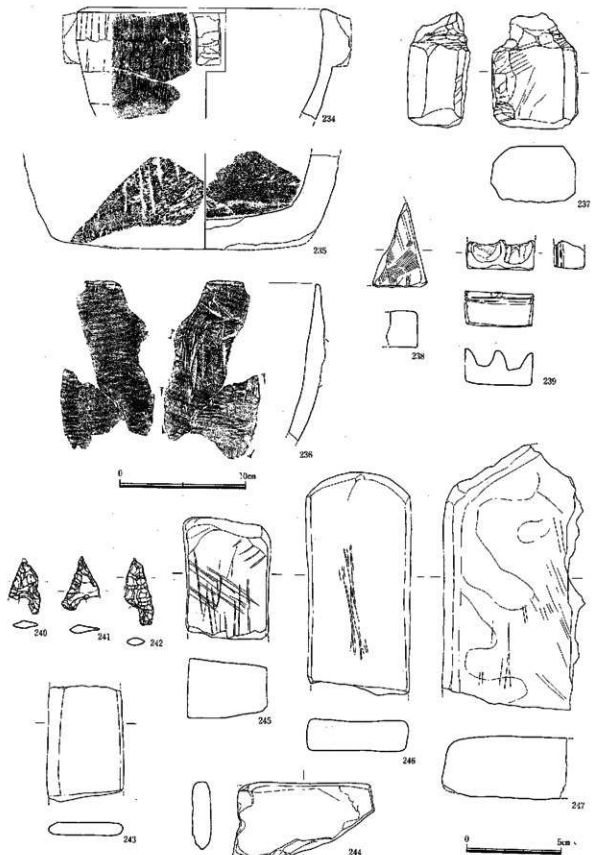
O－22区に端を発し、O－20区で0002古河川に接続する溝である。最大幅3m前後、深さ55cm。2ヶ所の土層断面を図示した。古代の土師器、須恵器細片が若干出土。

1629溝

J－22区で検出した西北－東南方向の溝である。長さ9m、幅0.7m前後、深さ10cm。西側の1670溝と平行する位置関係にある。



48図 45区0002古河川出土遺物実測図（縮尺1：3）



49図 45区出土石製遺物実測図（縮尺1：2，1：3）

50図　45区出土鉄製遺物実測図（縮尺1：2）

出土遺物（47図212、49図244、50図253）　212は白磁碗Ⅴ類。見込みに沈線をめぐらせ、中に櫛描文を施す。釉は淡灰色。244は安山岩ホルンフェルス製の石包丁。外湾刃直背で、紐穴がわずかに残る。253は鉄釘片。他に土師器杯・皿（ヘラ切り）片などが出土している。

1670溝（46図）

調査区西端を西北に走る幅1 m前後、深さ60 cmの溝である。断面は比較的端正な逆台形を呈する。図には北端部分の土層断面を示した。G－19で東北に走る溝が直角に接続する。出土遺物は土師器甕、白磁碗Ⅴ類の細片2点にとどまる。

0002古河川（46図・図版18）

P－25区調査区東端から姿を現し、44区へ北進する。川幅は8 m前後、深さは70～80 cm。図にはO・P－19区のトレンチを上に、O・P－20区のトレンチを下に示した。トレンチ以外は溝底まで掘り下げておらず、遺物の多くも覆土上層から出土したものが多い。

出土遺物（48図213～233、49図241・243）　213～221は土師器である。213は口径12.0 cm、高さ2.1 cmの皿。底部はヘラ切りで板状圧痕がある。214・215は杯。底部はともにヘラ切りで、214は丸みをもつ。216～218は椀。216は口径12.5 cm、高さ5.4 cm。底部に板状圧痕が残る。217の外面は赤色顔料を塗布した可能性がある。219は丸底壺。球形の胴部から口縁が短く立つ。内外面とも指押さえの痕が残る。胎土には砂粒が多い。220・221は甕。胴部外面には平行タタキを行う。内面はヘラ削り。222～230は黒色土器。222は浅い杯で内外面ともヘラ磨きを行い、燻す。223～230は黒色土器椀A類。223・224は口径11.3～12.0 cm、高さ4.1～4.9 cm、225～227は口径15.2～16.2 cm、高さ5.2～6.0 cm。223が内外面ともヘラ磨き、他は内面にだけヘラ磨きを行う。231は須恵器甕。胴部外面は平行タタキの後、カキ目を施す。内面には当て具痕が残る。232は越州窯系青磁碗底部片。底部を除きオリーブ色の釉がかかる。底部辺縁と見込みに目跡が残る。233は土師器杯か皿片を再加工した有孔土製品である。楕円形状で長さ3.4 cm、幅2.5 cm、厚さ0.6 cm。孔径は0.5 cm。241は黒曜石製の石鏃。脚の一端を欠損する。243は石剣片。刃幅4.0 cm、厚さ0.6 cm。

その他の出土遺物（49図239・242）

ともに検出面で取り上げた遺物である。239は滑石製品片。厚さ1.8 cmの長方形状の滑石上面に二つの穴をえぐる。また外面上端近くに2条の沈線を刻む。242は黒曜石製の石鏃。脚の一方は折損する。

5－3－3　小結

45区では、北西部を中心に7世紀代の掘立柱建物・竪穴住居からなる集落と、調査区のほぼ全域に広がる11世紀代の掘立柱建物からなる集落を主に検出した。7世紀代の掘立柱建物群は竪穴住居に切られるものがあり、時期的に先行する可能性がある。11世紀代の掘立柱建物は数棟で一群をなし、中

央に庭らしき空間をもつものもある。北東部ではその重複から、少なくとも三時期の建て替えがうかがわれる。この時期の集落は北に延び、また南の46区、西の47・48区にも続く。この他、調査区東側の0002古河川は7、8世紀のもので、11世紀代には埋没している。調査区を縦断する0301溝も同時期の掘削で、埋没時期も同様である。0002の周辺では廃滓坑などが多く、その埋没過程で大鍛冶、小鍛冶が行われた可能性が高い。また、東西の段差は、0801溝や掘立柱建物の状況から11世紀代にあったものと考えられる。南側の遺構の少なさは、46区に見られた近世以降の削平化の影響を受けたものかもしれない。

5－4　46区の調査

5－4－1　概要

46区は45区の南側にあたる。グリットでみせば、北端はM・N－29区、南端はO・P－33区に相当し、南北長60m、東西幅32m、形態的には南端が尖る三角形に近い。新設道路・水路と皿面削平部分が調査対象地である。46区の調査は45区に先行して、8月21日から開始し、後半は45区と並行しながら10月18日に終了した。発掘調査面積は1315m²。検出面標高は北端で38m、南端で38.80m。

調査区の中央を0301溝が南北に縦断する。北端部は大きく削平され、ほとんど遺構が残らない。遺構が集中するのは、この削平段落ちのすぐ南側にあたるN・P－28・29区で、とくに0301溝西側は掘立柱建物、土坑、廃滓坑などが足の踏み場もないほど重複する。中央から南側は、掘立柱建物や土坑が重複はするものの一定の距離を保って位置する。ピットの数は少なくなる。南端部では0301溝から0672溝が西北に分岐し、48区に続く（付図4）。46区全体で検出した遺構は、掘立柱建物16棟、土坑39基、製鉄関連遺構9基、溝6条、および多数のピットである。

5－4－2　遺構と遺物

掘立柱建物

0401掘立柱建物（51図・図版21）

O－31・32区で検出した1×2間の南北棟である。建物方位はN－3.0°－Wo。梁行の全長は210cm、桁行全長330cm、柱間は165cmの等間。柱穴は円形で、径38～56cm、深さは15～42cm。0301溝を切る。柱穴から土師器、須恵器片が出土した。

0402掘立柱建物（51図・図版21）

N・O－31区で検出した2×4間の東西棟である。建物方位はN－73.0°－Eo。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長720cm、柱間は180cmの等間。柱穴は円形で径24～39cm、深さ6～46cm。0403掘立柱建物が重複する。柱穴から土師器杯・皿（ヘラ切りか）片などと鉄滓が出土。

0403掘立柱建物（51図・図版21）

0402掘立柱建物の中で重複する1×1間の建物である。建物方位はN－23.5°－Wo。東側柱間が斜行する。柱間は東が280cm、南が230cm、西が270cm、北が295cm。柱穴は楕円形状で、最大径64～72cm、深さは21～71cm。出土遺物はない。

0404掘立柱建物（51図・図版21）

N－30区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN－12.0°－Wo。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長630cm、柱間は210cmの等間。柱穴は円形で径33～50cm、深さ19～43cm。0405掘立柱建物と重複する。

出土遺物（54図255、64図314）　255はフイゴ羽口片。径10cm前後、孔径は4cm前後。二次焼成を受けもろい。314は楕円形状の滑石製品片。厚さ1.5cm。中央に一段隆起した部分があるが、欠損する。他に土師器皿（ヘラ切り）片、鉄滓などが少量出土した。

0405掘立柱建物（51図・図版21）

0404掘立柱建物と西側柱が重複する2×3間の南北棟である。建物方位はN−2.5°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長420cm、柱間は北から120cm、120cm、180cm。柱穴は円形で径16～25cm、深さ6～31cm。柱穴から土師器皿細片1点のみが出土。

0406掘立柱建物（51図）

0404掘立柱建物の北側に隣接する1×2間の東西棟である。建物方位はN−87.0°−W。梁行全長240cm、桁行全長330cm、柱間は165cmの等間。柱穴は円形で径21～27cm、深さ13～32cm。柱穴から土師器皿（ヘラ切り）細片数点と鉄滓が出土した。

0407掘立柱建物（51図・図版21）

O−30・31区出検出した梁行2間、桁行2間以上の建物である。東側は調査区外に延びる。建物方位はN−15.0°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行は確認できる北桁で西から150cm、180cm。柱穴は円形で径33～48cm、深さ12～40cm。0405掘立柱建物と重複する。柱穴からは鉄滓だけが出土した。

0408掘立柱建物（52図・図版22）

O−28・29区出検出した梁行2間、桁行4間の南北棟である。建物方位はN−4.0°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長930cm、柱間は北から240cm、240cm、240cm、210cm。柱穴は円あるいは楕円形で径25～86cm、深さ13～74cm。梁中間柱が13～18cmと浅い。0409・0411掘立柱建物に切られ、0416掘立柱建物を切る。また0410・0415掘立柱建物と重複する。

出土遺物（54図256・257）　土師器皿である。口径9.2～10.2cm、高さ0.9～1.4cm。底部はヘラ切りで、256には板状圧痕が残る。他に須恵器、白磁、フイゴ羽口片などと鉄滓が出土した。

0409掘立柱建物（52図・図版22）

0408掘立柱建物の南側を切る1×2間南庇付きの東西棟である。建物方位はN−87.0°−E。梁行全長240cm、桁行全長390cm、柱間は195cmの等間。柱穴は径41～62cmの円形で、深さは56～70cm。庇は身舎から90cm離れて設ける。庇柱穴は円形で径25～42cm、深さ40～49cmと身舎に比べ一回り小さく浅い。0411掘立柱建物と重複する。

出土遺物（54図258・259、64図323）　258・259は土師器皿である。口径10.0cm、高さ1.0～1.4cm。底部はヘラ切りで、258には板状圧痕が残る。323は鉄刀子片である。刃幅は1cm。他に白磁碗Ⅳ・Ⅴ類片、褐釉陶器片、鉄滓などが出土している。

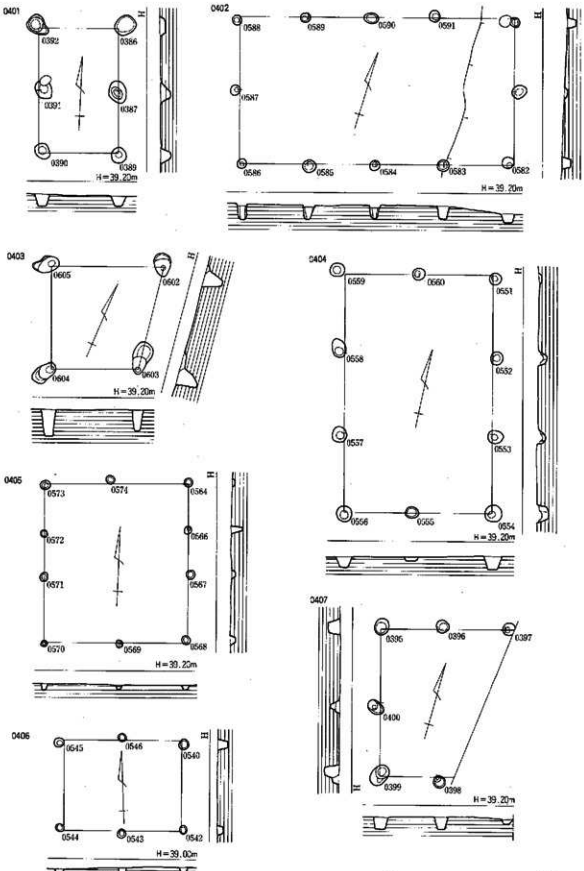
0410掘立柱建物（52図・図版22）

O−28・29区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN−4.0°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長660cm、柱間は北から240cm、210cm、210cm。柱穴は円形で径25～36cm、深さ24～57cm。0415掘立柱建物を切り、0408・0409・0410・0416掘立柱建物と重複する。

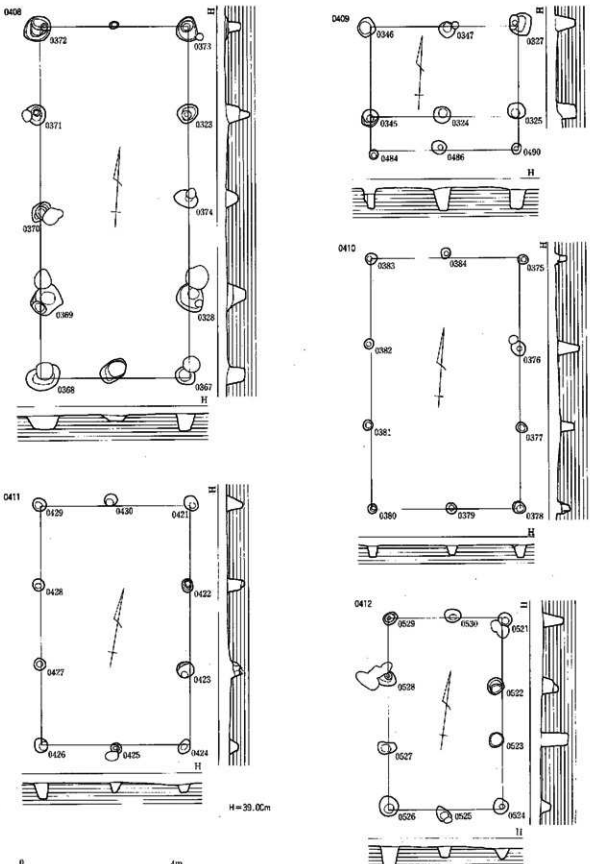
出土遺物（54図260・261）　260は土師器杯。口径14.4cm、高さ2.2cm。底部はヘラ切り。0261は白磁碗。見込みの釉を輪状に掻き取る。釉は青みを帯びた淡褐色。上師器皿には糸切り底もある。

0411掘立柱建物（52図・図版22）

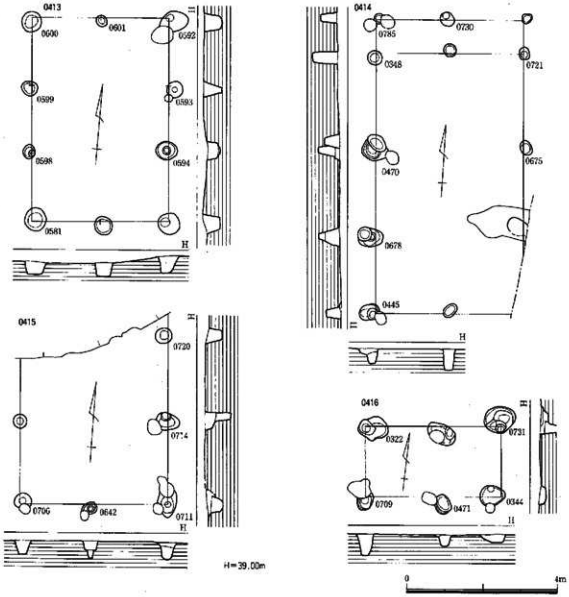
O−28・29区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN−9.5°−W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長630cm、柱間は210cmの等間。柱穴は円形で径27～44cm、深さ24～



51図 46区0401·0402·0403·0404·0405·0406·0407掘立柱建物実測図（縮尺1：100）



52図 46区0408·0409·0410·0411·0412掘立柱建物実測図（縮尺1：100）



53図　46区0413·0414·0415·0416掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

48 cm。0415掘立柱建物を切り、0408・0409・0410・0416掘立柱建物と重複する。

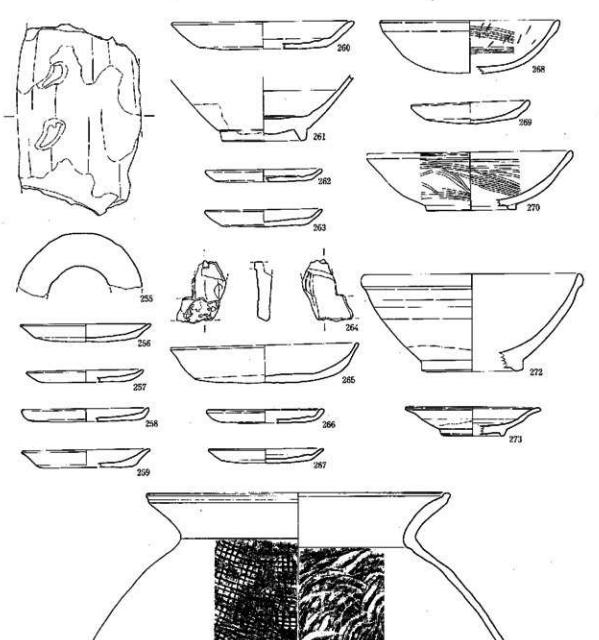
出土遺物（54図262～264）　262・263は土師器皿である。口径9.3 cm、高さ1.0～1.4 cm。底部はヘラ切りで、263には板状圧痕が残る。264は須恵質の緑釉陶器で、器種は不明。方形の透かしをもち、脚部とも考えられる。釉の一部はガラス質化している。他に白磁細片、鉄滓などが出土。

0412掘立柱建物（52図・図版22）

N－29区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN－7.5°－W。梁行全長300 cm、柱間は150 cmの等間。桁行全長510 cm、柱間は北から東桁が180 cm、150 cm、180 cm、西桁が150 cm、180 cm、180 cm。柱穴は円形で径36～55 cm、深さ28～76 cm。土師器細片、鉄滓などが出土。

0413掘立柱建物（53図・図版22）

O－30区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はN－5.0°－W。梁行全長360 cm、柱間は180 cmの等間。桁行全長540 cm、柱間は180 cmの等間。柱穴は円形で径34～76 cm、深さ21～50 cm。0402掘立柱建物、0334土坑、0301溝を切る。柱穴から土師器片、鉄滓などが出土。



54図 46区掘立柱建物，ピット出土遺物実測図（縮尺1：3）

0414掘立柱建物（53図・図版22）

P－28・29区で検出した2×3間北庇付きの南北棟である。建物方位はN－4.0°－W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。桁行全長690cm、柱間は北から240cm、240cm、210cm。庇は北梁から90cm離れて設ける。柱穴は円もしくは楕円形で径25～65cm、深さ7～72cm。0416掘立柱建物と重複する。

出土遺物（64図315）　凸面を作る楕円形の本体につまみを設けた滑石製品。つまみには穴があき、断面方形の鉄条が残る。当て具の類であろうか。他に土師器皿（ヘラ・糸切り底混じり）、白磁碗Ⅳ類などの破片とともに鉄滓が出土している。

0415掘立柱建物（53図）

O－28・29区で検出した梁行２間、桁行２間以上の南北棟である。北側は削平され残らない。建物方位はN－3.5°－W。梁行全長390cm、柱間は195cmの等間。東桁の柱間は南から240cm、210cm。柱穴は円もしくは楕円形で径36～75cm、深さ17～69cm。0410・0411掘立柱建物に切られ、0408掘立柱建物と重複する。柱穴から土師器片、滑石石鍋片、鉄滓などが出土した。

0416掘立柱建物（53図）

O・P－29区で検出した１×２間の東西棟である。建物方位はN－84.5°－E。梁行全長180cm。桁行全長360cm、柱間は東から150cm、210cm。柱穴は楕円形状で、径44～83cm、深さは20～72cm。

出土遺物（54図265、64図322・324）　265は土師器杯。口径14.8cm、高さ3.1cm。底部はヘラ切り。322は鉄鏃の茎部片か。図の上部は折れ曲がる。324は鉄刀子片。茎部近い部分で刃幅は１cm程度。土師器皿には糸切り底も混じる。他に白磁碗Ⅱ類片、滑石片、鉄滓などがある。

ピット出土遺物（54図266～273、64図319・320）　266・267は土師器皿。口径9.2cm、高さ1.1cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。268は土師器杯。口径14.2cm、高さ4.2cm。底部は糸切り。内面はヘラ磨きを行い、コテ当ての痕がある。269は瓦器皿。内面はヘラ磨き。底は糸切りで、板状圧痕が残る。270は瓦器椀。内外面ともヘラ磨きを行う。271は須恵器甕。丸く張った胴部外面には格子目のタタキ、内面には青海波文の当て具痕がある。272は白磁碗Ⅳ類。釉は淡灰色。273は白磁皿。見込みの釉を輪状に掻き取る。釉は淡灰色。319・320は鉄鏃であろうか。錆化が著しい。

土坑

0303土坑（55図）

P－30区で検出した平面円形の土坑である。径1.50m、深さ13cm。底面は凹凸が著しい。土師器などの細片が出土した。

0304土坑（55図）

N・O－31区で検出した長さ3.04m、幅1.19m、深さ10cmの浅い不整楕円形の土坑である。土師器甕、須恵器甕などの細片が出土した。

0305土坑（55図・図版22）

O－30区で検出した焼土坑。平面は長軸を南北にとる長方形で、長さ1.26m、幅0.93m、深さ51cmをはかる。側壁は被熱で赤く焼け、底面には炭化物が堆積する。0301溝を切る。

出土遺物（58図274）　土師器皿。口径9.4cm、高さ1.3cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。

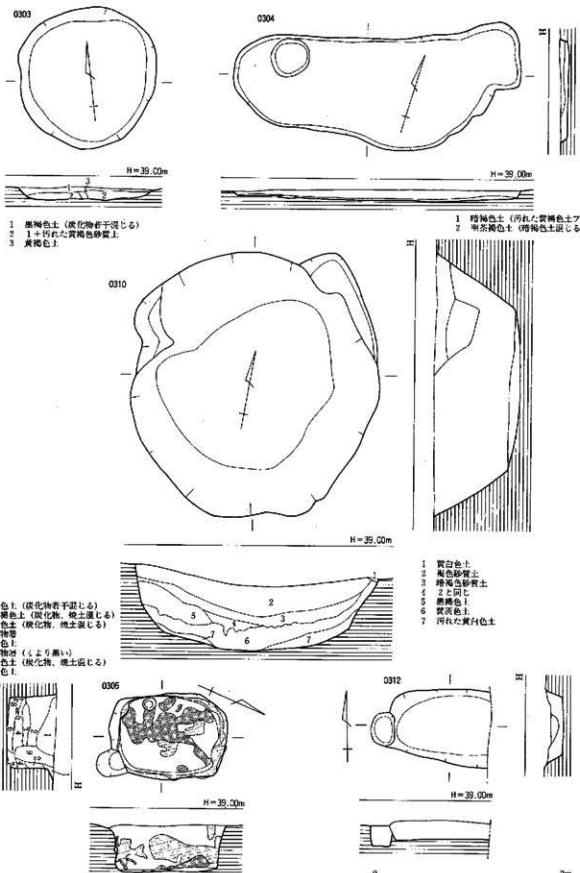
0310土坑（55図・図版22）

N－29・30区で検出した平面円形の土坑である。最大径2.80m、深さは90cm。北側偶壁の２ヶ所に段がつく。鉄滓が若干出土しただけである。

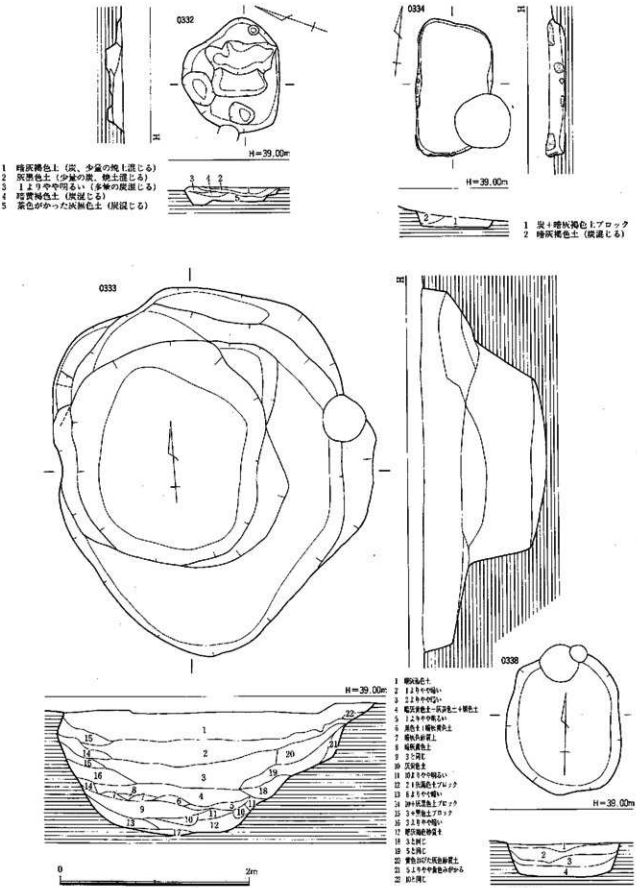
0312土坑（55図）

P－29区、調査区東境にかかる平面長方形状の土坑である。長軸は東西にとる。確認できた南北幅は0.78m、深さ20cm。南側で0315土坑を切る。

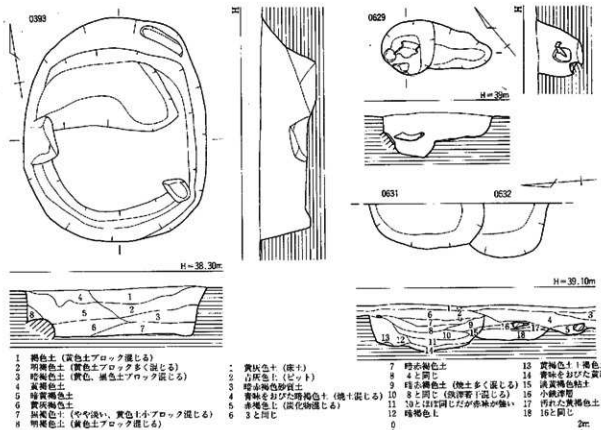
出土遺物（64図317）　砂岩製の砥石である。幅4.7cm、厚さ2.7cm。図の上面および左側面を砥面として利用している。他に土師器皿（ヘラ切り）、フイゴ羽口、滑石片、鉄滓などが出土している。



55図 46区0303・0304・0305・0310・0312土坑実測図（縮尺1：40）



56図 46区0332・0333・0334・0338土坑実測図（縮尺1：40）



57図　46区0393・0629・0631・0632土坑実測図（縮尺1：40）

0315土坑

0312土坑の南側に位置する土坑。0312に切られ、また調査区外にかかるため形態など不明。確認できる深さは59cm。

出土遺物（58図275）　瓦器皿。口径10.2cm、高さ1.8cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。他に土師器皿（ヘラ切り）、白磁、滑石石鍋などの破片と鉄滓が出土した。

0317土坑

O・P－29区で検出した浅い楕円形状の土坑。南北に長軸をとり、長さ2.00m、幅0.85m、深さ9cm。覆土には炭化物が混じる。0318土坑を切る。

出土遺物（58図276）　白磁碗。内面口縁下に沈線をめぐらす。釉は黄白色。焼きがあまい。

0318土坑

西側を0317土坑に切られる不整楕円形の土坑。長軸は南北で、長さ1.95m、幅1.10m。底面までは11cmと浅い。覆土には炭化物が混じる。

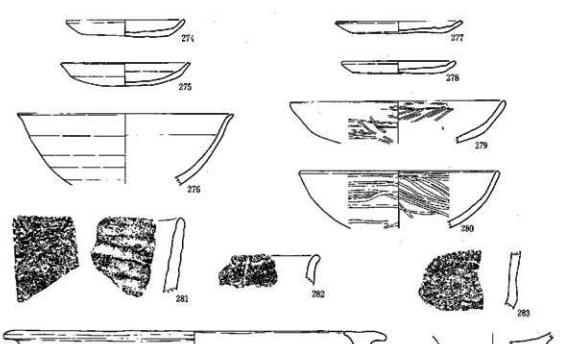
出土遺物（58図277）　土師器皿。口径10.0cm、高さ1.0cm。底部はヘラ切りで板状圧痕がある。

0320土坑

0318土坑の北側に位置する浅い不整楕円形の土坑。長さ1.95m、幅1.20m、深さ9cmo。覆土には炭化物、焼土が混じる。遺構の状況は先の0317・318土坑とよく似る。

出土遺物（58図278・279）　278は土師器皿。口径9.0cm、高さ1.0cm。底部はヘラ切り。279は瓦器椀。内外面ともヘラ磨きを行う。他に白磁碗Ⅳ類片、鉄滓などが出土。

0332土坑



58図　46区土坑出土遺物（縮尺1：3）

P－28区で検出した不整方形の土坑である。東西長1.20m、南北幅1.03m、深さ18cmをはかる。底面は二段にえぐれる。

出土遺物（58図280）　瓦器椀である。内外面ともヘラ磨き。他に糸・ヘラ切り底が混じった土師器皿片などが出土。

0333土坑（56図・図版23）

P－30区で検出した長軸を南北にとる南北長3.90m、東西幅3.26mの平面楕円形の土坑である。深さ30cmで東から南にかけ平坦面を作り、北西部分をさらに掘り込む。底面は長さ1.70m、幅1.30mの長方形で、検出面からの深さは132cmをはかる。側壁面には黒褐色土が薄くはりつく。

出土遺物（58図281～285）　出土したのは縄文・弥生土器10片と鉄滓である。281～283は縄文土器粗製深鉢片。284は弥生土器甕口縁、285は壺底部片。いずれも混入品である。

0334土坑（56図）

O－30・31区で検出した平面長方形の焼土坑である。長軸を南北にとり、長さ1.40m、幅0.80m、深さ21cm。壁面は赤く焼ける。0301溝を切り、0413掘立柱建物に切られる。出土遺物はない。

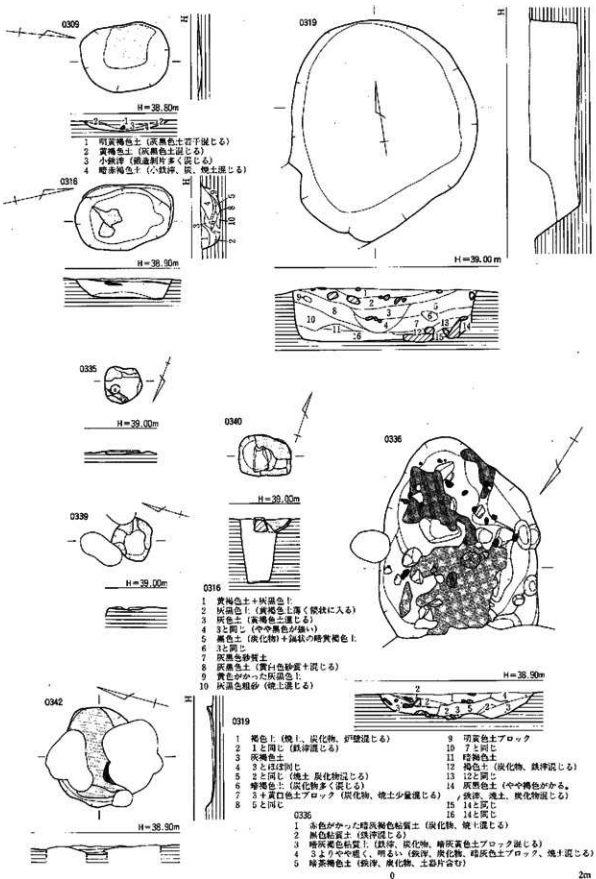
0338土坑（56図・図版23）

O－29区で検出した平面楕円形の土坑。長軸は南北で、長さ1.50m、幅1.20m、深さ36cm。土師器片、須恵器片、白磁椀Ⅳ類片、鉄滓などが出土。0321周溝遺構に切られる。

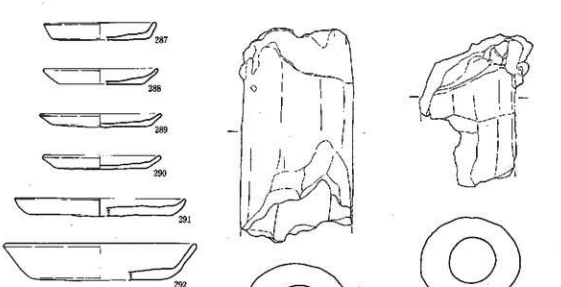
0393土坑（57図・図版23）

N－28区で検出した平面楕円形の土坑。長軸は南北で、長さ2.38m、幅1.93m、深さ61cm。南側壁下の底面には溝がめぐり、底面北側は一段えぐれる。出土遺物はない。

0629土坑（57図）



59図 46区0309・0316・0319・0335・0336・0339・0340・0342製鉄関連遺構実測図（縮尺1：40）



60図　46区製鉄関連遺構出土遺物実測図（縮尺1：3）

N－31区、0304土坑の北西側に隣接する不整楕円形の土坑。長軸は南北で、長さ1.16m、幅0.56m、深さ50cm。底面は南が一段深くなる。土師器甕などが出土した。

0631土坑（57図・図版23）

P－28区、調査区東境にかかる円形状の土坑である。確認できた南北幅1.20m、深さ16cm。覆土には焼土、炭化物が混じる。土師器皿片（ヘラ切り）、須恵器片、白磁細片、鉄滓などが出土。0632廃滓坑を南側で切る。

0770土坑

N－29区に位置する平面楕円形土坑。長軸は東西で、長さ0.76m、幅0.37m、深さ26cm。

出土遺物（58図286）　土師器皿。口径9.0cm、高さ1.2cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。

製鉄関連遺構

0309炉（59図・図版23）

P－28区で検出した長さ0.92m、幅0.70m、深さ11cmの浅い楕円形の炉。東側壁は被熱し、中央には小鉄滓、鍛造剥片が著しい。鍛冶炉の底が残存したものか。鉄滓の他、土師器杯が出土。

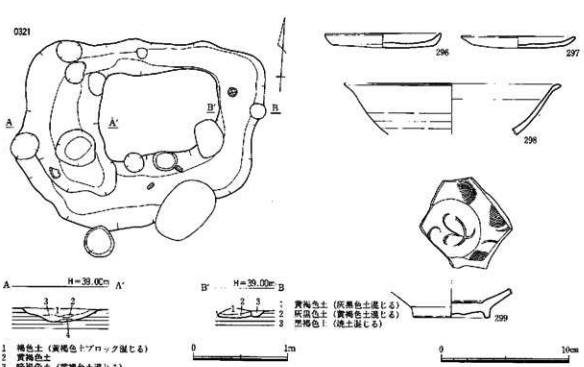
0316廃滓坑（59図）

P－29区で検出した平面隅丸長方形の土坑。長軸は南北で、長さ1.03m、幅0.69m、深さ20cm。底面には焼土塊がみられる。椀形などの鉄滓と、土師器皿片（ヘラ切り）、白磁碗V類片などが出土。

0319廃滓坑（59図・図版23）

0309廃滓坑の南西に位置する不整円形の土坑。南北長2.34m、東西幅1.95m、深さ53cm。覆土には炉壁片、小鉄滓、フイゴ羽口などの製鉄関連の多量の遺物が焼土、炭化物に混じる。

出土遺物（60図287～292）　いずれも土師器。287～291は皿。うち291は口径13.4cm、高さ1.4cm、他は口径8.8～9.6cm、高さ1.0～1.4cm。底部は288だけが糸切り、他はヘラ切りで板状圧痕がある。292は杯。口径15.2cm、高さ3.0cm。底部はヘラ切り。口縁端部には煤が付着する。他に瓦器椀片、白磁碗V類片、龍泉窯系青磁片、滑石石鍋片などが多量の鉄滓、鍛造剥片とともに出土。



61図 46区0321周溝遺構及び出土遺物実測図（縮尺1：40，1：3）

0335炉（59図）

O－29区で検出した。径39 cm前後の円形をなし、南側壁面を中心に被熱の痕がみられる。深さは4 cmと浅い。炉底の可能性がある。鉄滓だけが出土した。

0336廃滓坑（59図・図版24）

0319廃滓坑の北側に位置する。平面楕円形を呈するが、北側は段落ちにより削られる。東西幅1.66m、深さ30 cm。坑内には炉壁片、鉄滓、フイゴ羽口片など製鉄関係の遺物が、焼土、炭化物、粘土に混じり多量にみられる。また北西隅には鍛造剥片がまとまって出土した。

出土遺物（60図293～295、64図312）　293は白磁碗Ⅳ類底部片。釉は淡灰色。294・295はフイゴ羽口片。ともに炉壁に挿入された部分の破片で、端部には鉄滓が付着し、また被熱で赤変する。294の径8.8 cm、孔径4.2 cm、0295の径7.8 cm、孔径3.8 cm。294は側縁の一部を面取りし、平坦にする。312は底径36.0 cmの滑石製石鍋片。内面体部の削りは丁寧だが、内底は荒い削りがそのまま残る。他に土師器杯・皿（ヘラ切り）、瓦器、須恵器などの破片とともに、湯玉も検出した。

0339炉（59図・図版24）

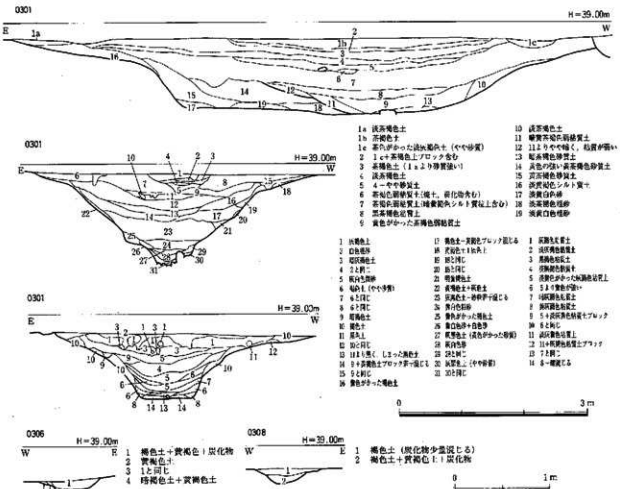
O－28区で検出した。径45 cm前後の円形をなし、東側壁面を中心に1ヶ所途切れて被熱の痕がみられる。中央には焼土、炭化物が充満する。深さは3 cmと浅い。鍛冶炉底であろうか。0410掘立柱建物に間接的に切られる。鉄滓、鍛造剥片と土師器細片1が出土した。

0340炉（59図）

P－29区で検出した。西側をピットに切られ、全形は不明。確認できる南北幅54 cm、深さ12 cm。東側壁は被熱で赤変し、0339同様1ヶ所赤変部分が途切れる。中央には炭化物が充満する。炉底の可能性がある。鉄滓、鍛造剥片、土師器細片、瓦器細片などが出土した。

0342炉（59図・図版24）

O－28区で検出した。中央を二つのピットに切られ、全形は不明。確認できる東西幅1.06 cm、深さ6 cm。側壁が被熱で赤変し、中央には焼土、炭化物が充満する。炉底の可能性がある。鉄滓、鍛



62図　46区溝土層断面実測図（縮尺1：40，1：60）

透剥片、フイゴ羽口片、土師器細片、白磁細片などが出土した。

周溝遺構

0321周溝遺構（61図・図版24）

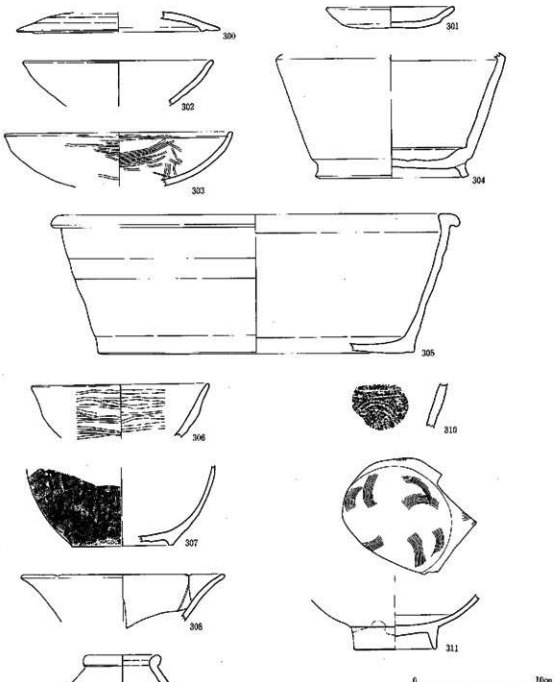
O－29区で検出した長方形の周溝遺構である。南北2 m、東西2.8 m、溝幅は0.25～0.80 m。深さは西側で15 cm、他は10 cm に満たない。溝に囲まれた中央部分は東西長1.30 m、南北幅0.85 m の長方形。確認できる掘り込みなどはない。0321土坑を切り、0408・0409掘立柱建物に切られる。

出土遺物（61図296～299、64図313）　296・297は土師器皿。口径9.0～9.2 cm、高さ0.9～1.0 cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。298・299は白磁碗。298は内面口縁下に沈線をめぐらす。釉は淡灰褐色。299は内面体部に櫛描文、見込みには沈線を入れ、内側に片切彫りの花文を施す。釉は淡褐色。313は滑石製石鍋片。底部と体部に穿孔がある。他に黒色土器椀B類片などが出土した。

溝

0301溝（62図・図版24）

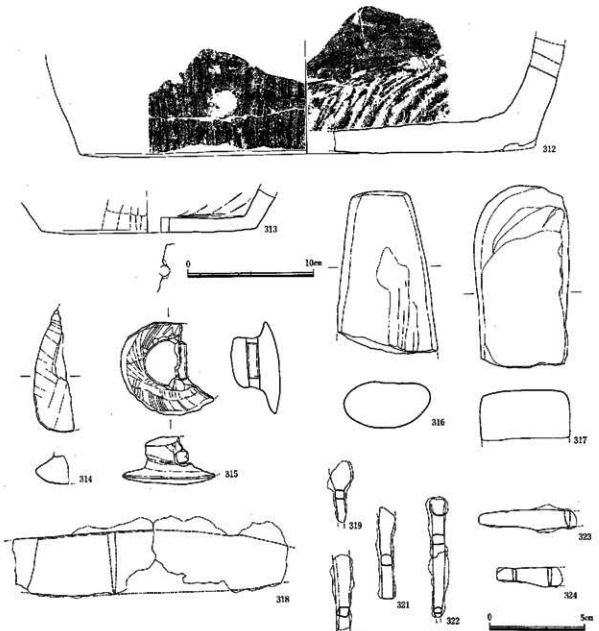
調査区南端から北北西に向かい一直線に走る溝である。図の最上段には、南端部分の0672溝と交わる部分を示したが、この溝の形は見えない。0672に切られたとも考えられるが、東肩が直線的に続いており、また道路を隔てた南側の第10次調査地点にもこれが続く。0672から分岐させ0301を掘削した



63図 46区溝出土遺物実測図（縮尺1：3）

のではないかと考えられる。溝幅は4.5～5.0m。O－30区のトレンチ上層断面が図の二段目で、断面はV字形で、深さは1.45m。さらに北側のN・O－28区のトレンチが図の三段目で、断面は逆台形、深さは1.05m。北の45区での溝断面は逆台形であった。

出土遺物（63図300～305）　300は土師器壷。扁平な作りで、断面三角形の返りをもつ。301は土師器皿。口径10.1cm、高さ1.7cm。底部はヘラ切り。302は土師器椀。内面はヘラ磨き、外面は磨滅して調整不明。303は瓦器碗。内面口縁直下に沈線をめぐらす。内外面ともヘラ磨きを行う。304は須恵器壷。高台をもち、肩部は稜を作って屈曲する。305は中国産陶器の盤。胎は砂粒を多く含んだ粗いもので、灰色を呈する。釉は灰味を帯びた緑色を呈し、内面と外面口縁下まで施す。口縁上面には重



64図　46区出土石・鉄製品実測図（縮尺1：2，1：3）

ね焼きの目跡がある。いずれも溝の上層、上面からの出土で、溝の掘削時期を直接示すものではない。

0306溝（62図）

M－29区を南北に走る溝。幅0.60～0.90m、深さ10cm前後。土師器、須恵器細片とともに鉄滓が出土。

0308溝（62図）

0306溝とほぼ並行して南北に走る溝。幅0.70m前後、深さ15cm。

出土遺物（63図306～309）　306は瓦器椀片。内外面ともヘラ磨き。307は越州窯系青磁の水注であろうか。外面には縦方向の片切り彫りがある。畳付を除き内外面ともオリーブ色の釉を施すが、色調にはムラがある。畳付には目跡がみられる。308は口縁を輪花にする白磁片。内面には縦に白堆線を施す。釉は緑味を帯びた淡灰白色。309は中国産陶器。釉は緑褐色。口縁上端には目跡がある。

その他の出土遺物（63図310・311、64図316・318）

いずれも検出面から出土した。310は縄文土器片。外面に弧線と沈線を施す。311は白磁碗V類。見込みに沈線をめぐらせ、その内側と体部に櫛描文を施す。釉は淡灰色。316は蛇文岩製の磨製石斧片。318は刃幅3.3cmの鉄鎌。錆が著しい。

5－4－3　小結

0301は奈良時代前後に掘削された溝で、11世紀の段階には埋没し、その後集落が築かれたものであろう。掘立柱建物を主体とするこの集落は、11世紀に始まり、12世紀には廃棄された可能性が強い。その間度重なる建て替えがあったことがうかがわれる。製鉄関連の遺構はこの集落の生業の一端を物語るものであるが、大鍛冶、小鍛冶にとどまるものであろう。遺構の年代、性格から見て第10次調査地点との関係がより強い地区である。

5－5　50区の調査

5－5－1　概要

50区は43区の東側に位置する。当初調査の予定に入っていなかった部分であるが、田面の切り下げが避けられなくなり、11月29日から12月17日まで発掘調査を行った。発掘調査面積は159m²。標高は南側で36.98m、北側で37m。検出した遺構は土坑9基、溝3条とピットである（65図）。

5－5－2　遺構と遺物

3003土坑（66図・図版26）

W－8区で検出した平面楕円形状の土坑。西は調査区外にかかり、確認できる南北幅は1.10m、深さは40cm。南側には段がつく。

出土遺物（67図325）　須恵器杯である。立ち上がりは小さく、底部の約1/3にヘラ削りを行う。またヘラ記号を刻む。他に土師器杯・皿片があり、325は混入品である。

3005土坑（66図）

W－7区で検出した平面円形の土坑。径1.38m、深さ40cm。底面には段がつき、東側が深くなる。

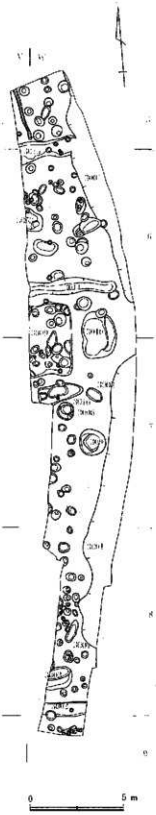
出土遺物（67図326・327）　327は土師器杯。口径12.2cm、高さ2.7cm。底部はヘラ切り。326は土錘。長さ3.1cm、径2.1cm、重量10g。他に須恵器片、鉄滓などが出土した。

3006土坑（66図）

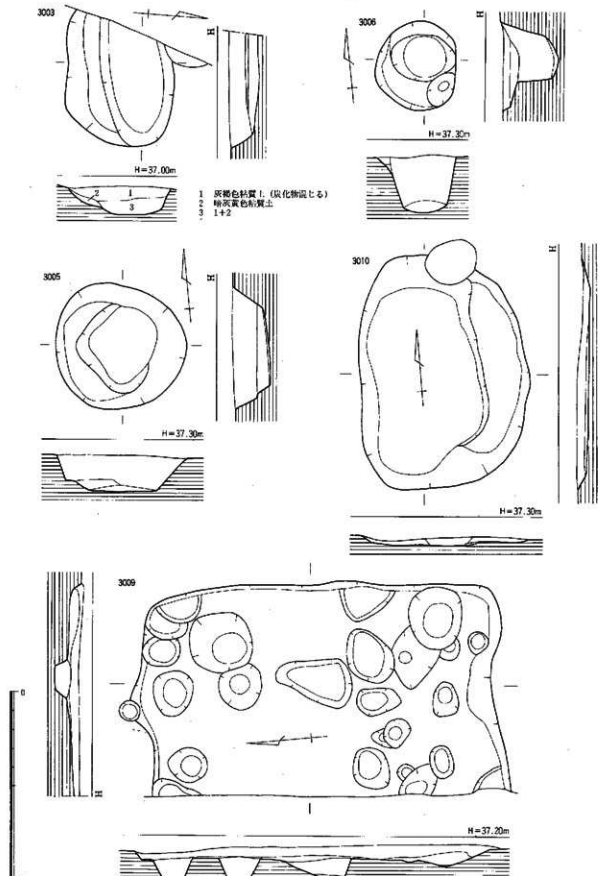
3005土坑の北西に位置する平面円形の土坑。径0.94m、深さ60cm。南側壁には平坦面をつくる。土師器杯・皿片（ヘラ・糸切り底混じり）、須恵器片、フイゴ羽口片、鉄滓などが出土した。

3008土坑

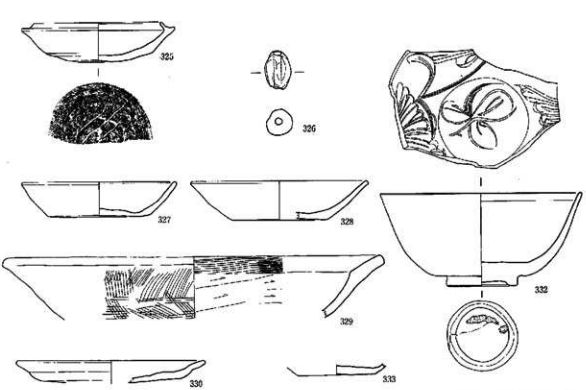
3006土坑の北東に位置する平面楕円形土坑。長さ0.93m、幅0.53m、



65図　50区全体図（縮尺1:200）



66図　50区土坑実測図（縮尺1：40）



67図　50区出土遺物（縮尺1：3）

深さ39cm。

出土遺物（67図329）　土師器鉢。外面は粗い刷毛目調整を行う。ヘラ切りの土師器杯なども出土。

3009土坑（66図・図版24）

W－6・7区で検出した方形状の土坑。西側は調査外となり、確認できる南北幅3.80m、深さ15cm。土師器、須恵器、移動式竈片と鉄滓などが出土した。竪穴住居の可能性もある。

3010土坑（66図）

3009土坑の東側に位置する平面楕円形の土坑である。長さ2.45m、幅1.80m、深さ10cm。

出土遺物（67図330・331）　体部が屈曲する同形態の土師器杯である。口径14.0～14.8cm。底部はヘラ切りで330には板状圧痕がある。他に土師器皿片（ヘラ・糸切り底混じり）などが出土。

その他の出土遺物（67図328・332～335）

328は土師器杯。口径14.0cm、高さ3.1cm。底部はヘラ切り。332は龍泉窯系青磁碗。内面には片切り彫りの花文を施す。釉はオリーブ色。333は白磁皿。釉は青みを帯びた灰白色で、底部は掻き取る。334は須恵器杯蓋。端部は断面三角形となる。335は須恵器杯。口径10.5cm、高さ2.5cm。328は3141ピット、332・333は3011溝、334は3001段落ち、335は表土から出土。

5－5－3　小結

50区は古鳥川に向かう遺跡東縁部にあたる。調査区東側の段落ちがその境となるものかもしれない。遺構は比較的密であったが、その性格は不明なところが多い。遺物には古墳時代後期を含み、一部古代の遺構もあるが、多くは11世紀中頃から12世紀までのものと考えられる。

図　版

東入部遺跡群第7次調査遠景（北上空から）

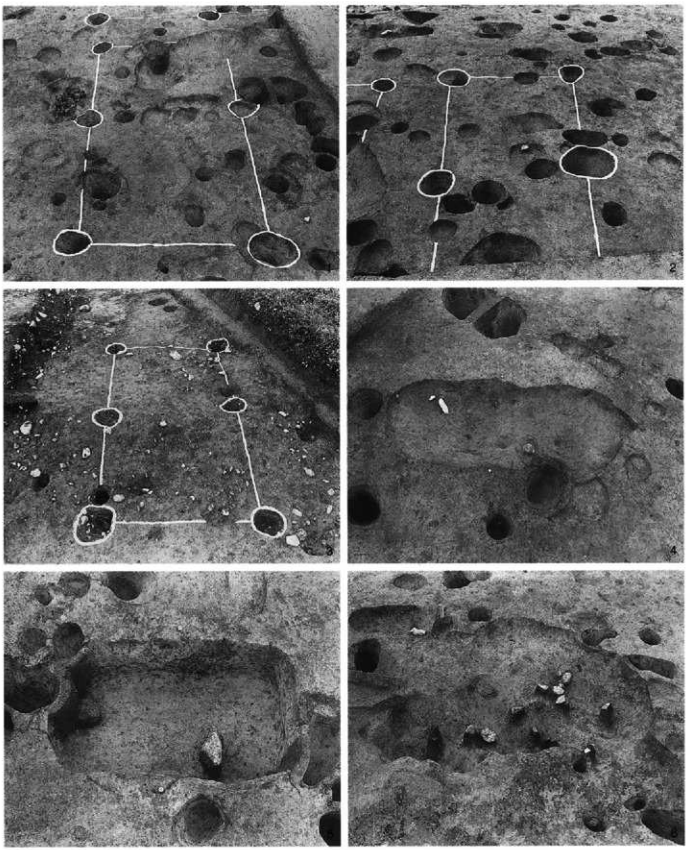
1　43区全景(南上空から)

2　43区全景(東上空から)

図版2

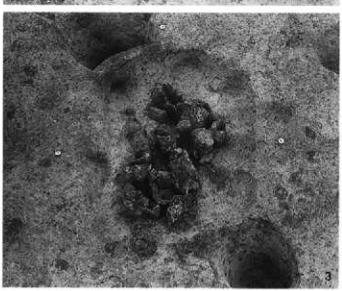
1　43区0101掘立柱建物周辺
（上空から）

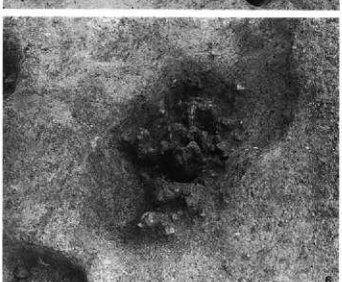
2　43区0007土坑周辺
（上空から）



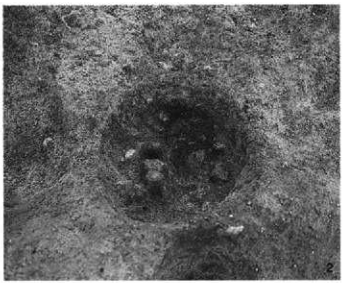
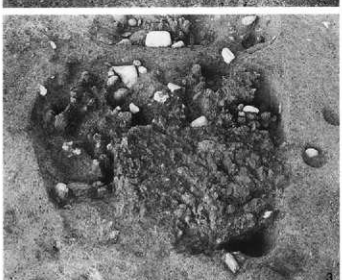
1　43区0101掘立柱建物(南から)
2　43区0102掘立柱建物(東から)
3　43区0103掘立柱建物(南西から)
4　43区0003土坑(北から)
5　43区0004土坑(東から)
6　43区0029土坑(西から)

図版4





1　43区0006廃滓坑(東から)
2　43区0007廃滓坑(北から)
3　43区0009廃滓坑(南から)
4　43区0010廃滓坑(東から)
5　43区0012・0013・0017廃滓坑(東から)
6　43区0012廃滓坑(北から)

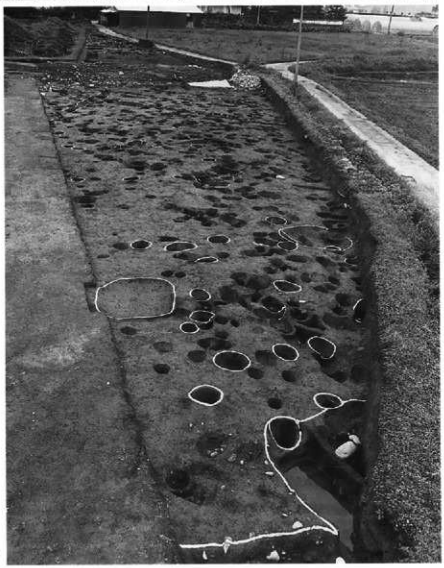
1　43区0013廃滓坑(北から)　　2　43区0017廃滓坑(北から)
3　43区0015廃滓坑(北から)　　4　43区0015・0026廃滓坑(東から)
5　43区0024廃滓坑(北から)　　6　43区0002古河川土層(北から)

図版6

1　44区全景(南上空から)

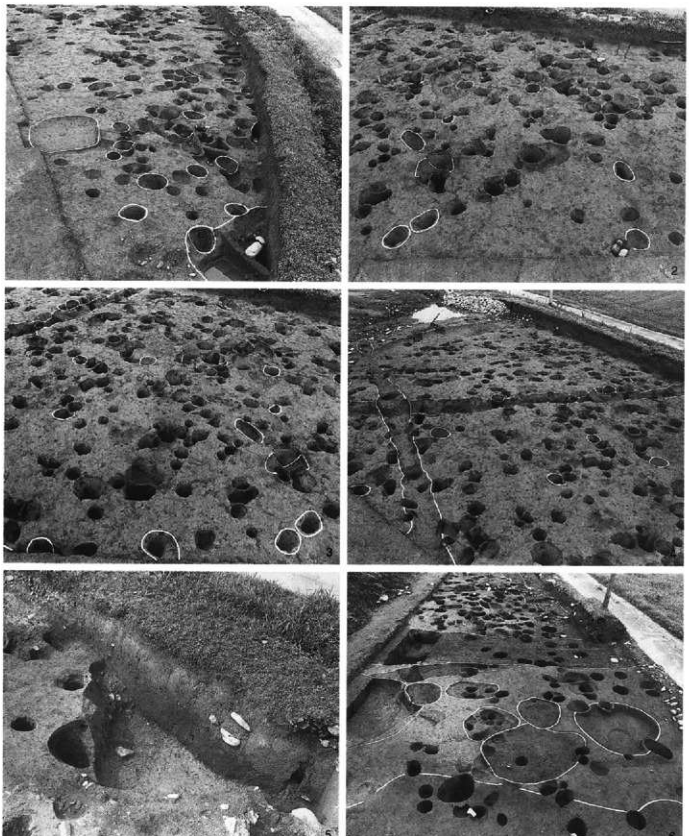
2　44区全景(東上空から)

1　44区北東部(南上空から)



2　44区北東部(東から)

図版8

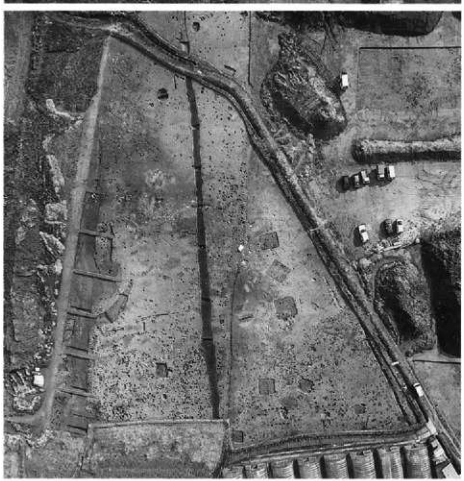


1　44区0261～0264掘立柱建物(東から)
2　44区0265掘立柱建物(南から)
3　44区0266掘立柱建物(南から)
4　44区0267掘立柱建物(南東から)
5　44区0153土坑(南から)
6　44区北西部土坑(東から)

1　44区0164土坑(北から)　　2　44区0170土坑(北から)
3　44区0173廃滓坑(南から)　　4　44区中央部0156溝(北から)
5　44区0252・0253溝(西から)　　6　44区0002古河川土層(北から)

図版 10

1　45区全景(西上空から)

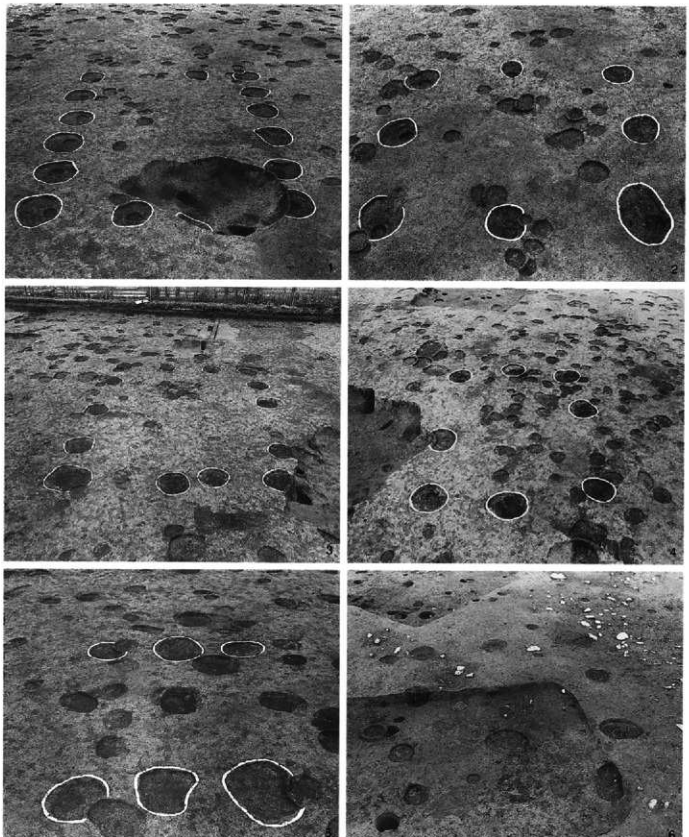


2　45区全景(北上空から)

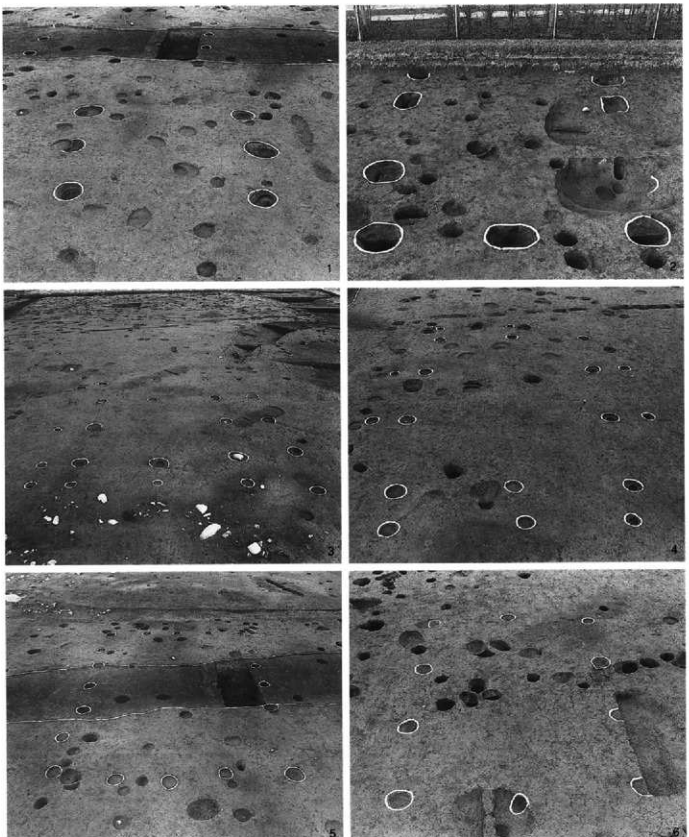
1　45区北東部(北上空から)

2　45区北西部(北上空から)

図版12

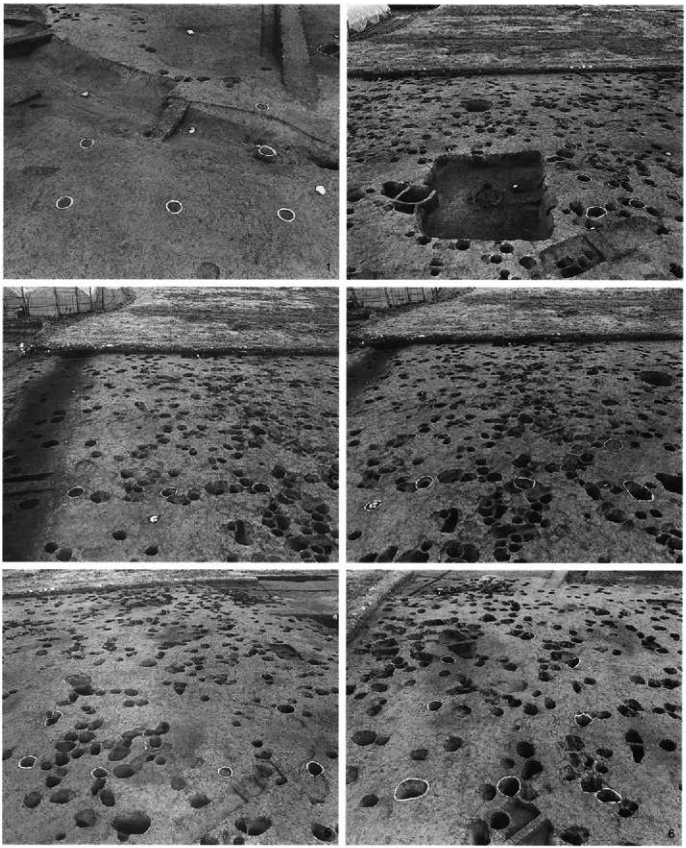


1　45区0851掘立柱建物（西から）
2　45区0852掘立柱建物（南西から）
3　45区0853掘立柱建物（南から）
4　45区0854掘立柱建物（南から）
5　45区0855掘立柱建物（南から）
6　45区0856掘立柱建物（南から）



1　45区0857掘立柱建物(東から)　　2　45区0858掘立柱建物(南から)
3　45区0861掘立柱建物(南から)　　4　45区0862掘立柱建物(南から)
5　45区0863掘立柱建物(東から)　　6　45区0864掘立柱建物(南から)

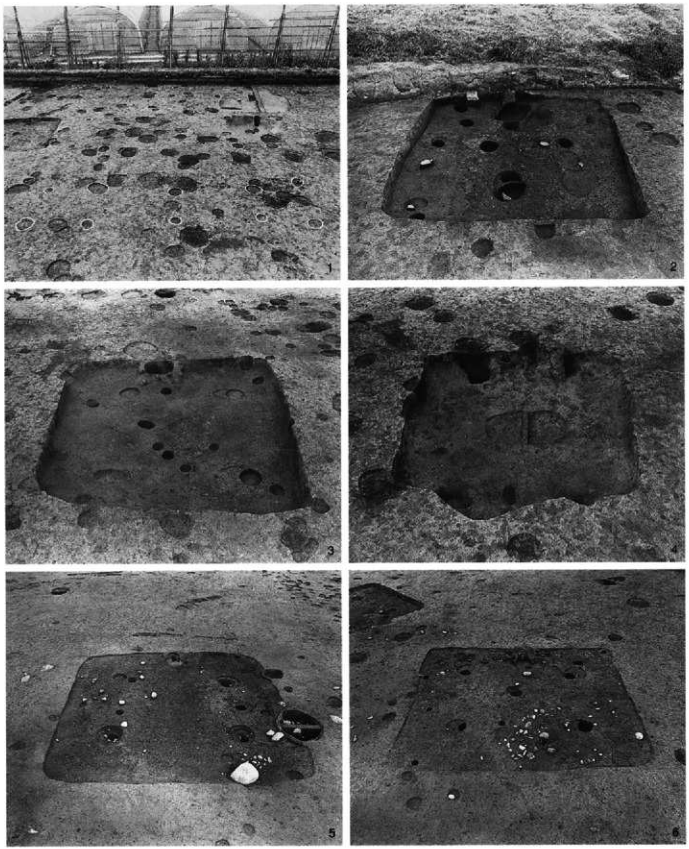
図版 14



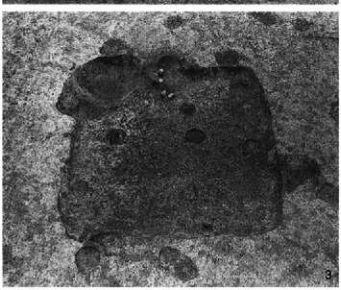
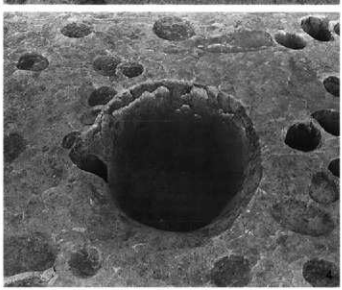
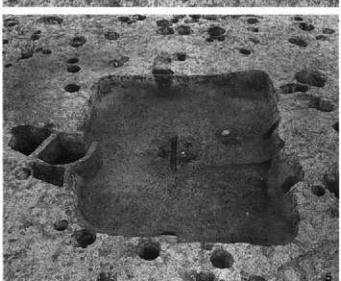
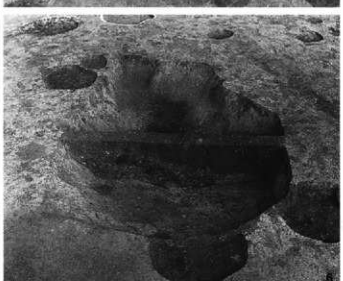
1　45区0865掘立柱建物（西から）
2　45区0866掘立柱建物（南から）
3　45区0867掘立柱建物（南から）
4　45区0868掘立柱建物（南から）
5　45区0869掘立柱建物（南から）
6　45区0870掘立柱建物（西から）

1　45区0871掘立柱建物(南から)　　2　45区0872掘立柱建物(南から)
3　45区0873掘立柱建物(南から)　　4　45区0874掘立柱建物(南から)
5　45区0875掘立柱建物(南から)　　6　45区0876掘立柱建物(南から)

図版16

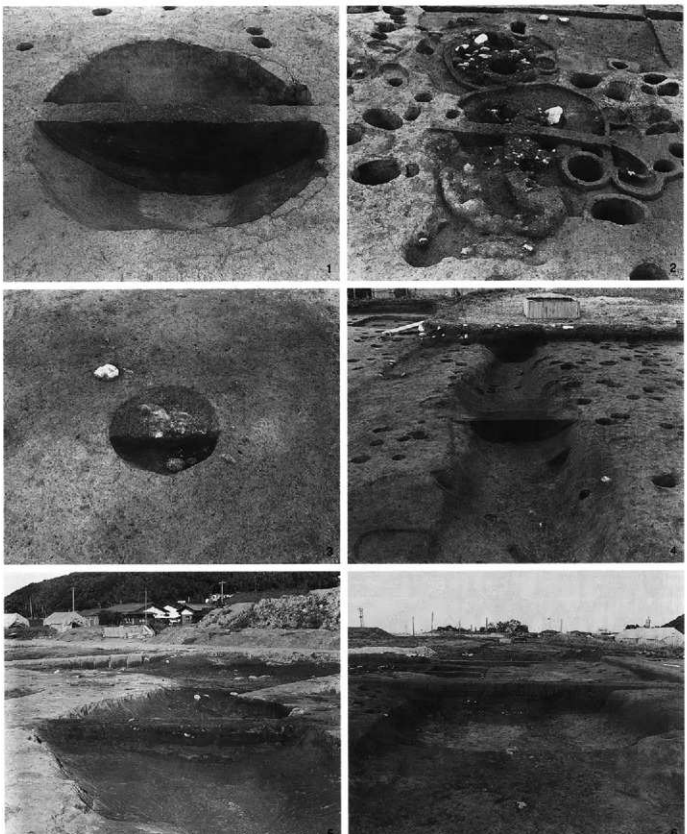


1　45区0878掘立柱建物(南から)
2　45区0821竪穴住居(西から)
3　45区0822竪穴住居(南から)
4　45区0823竪穴住居(東から)
5　45区0824竪穴住居(東から)
6　45区0825竪穴住居(北東から)

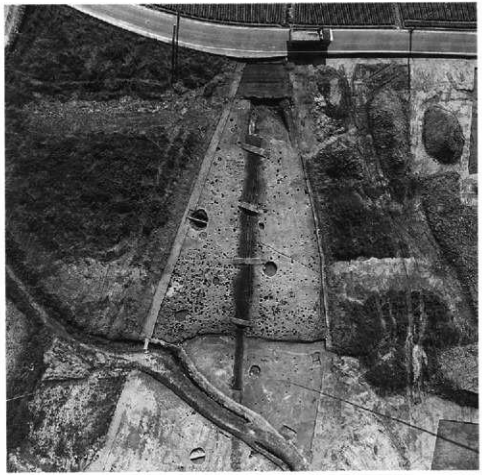





1　45区0825竪穴住居竈(北東から)　　2　45区0826竪穴住居(南から)
3　45区0827竪穴住居(西から)　　4　45区0803土坑(南から)
5　45区0806土坑(南から)　　6　45区0819土坑(南から)

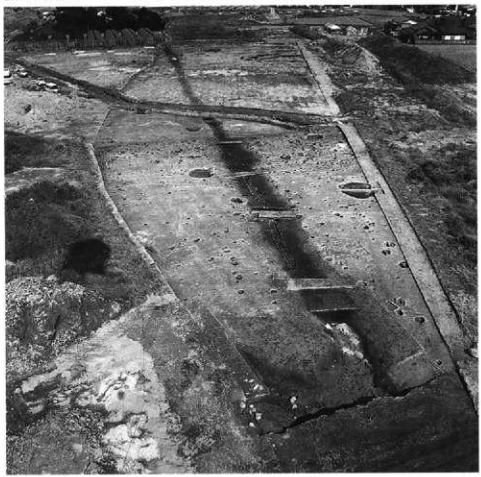
図版 18



1　45区0838土坑（南から）
2　45区0810廃滓坑（南から）
3　45区0841廃滓坑（東から）
4　45区0301溝（南から）
5　45区0818溝（南西から）
6　45区0002古河川（南から）

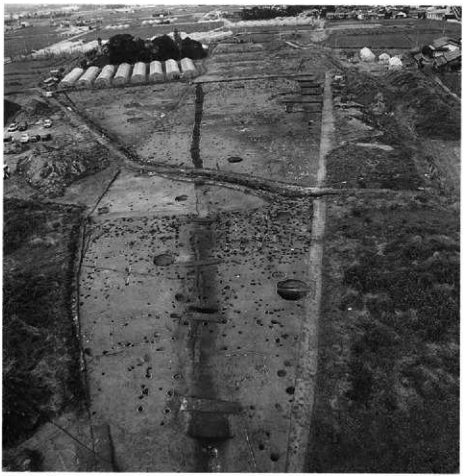


1　46区全景(北上空から)

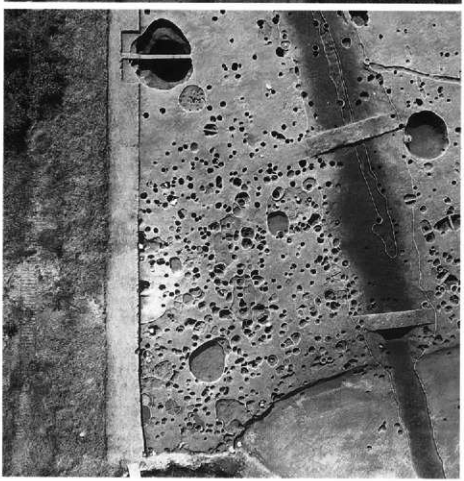


2　46区全景(南上空から)

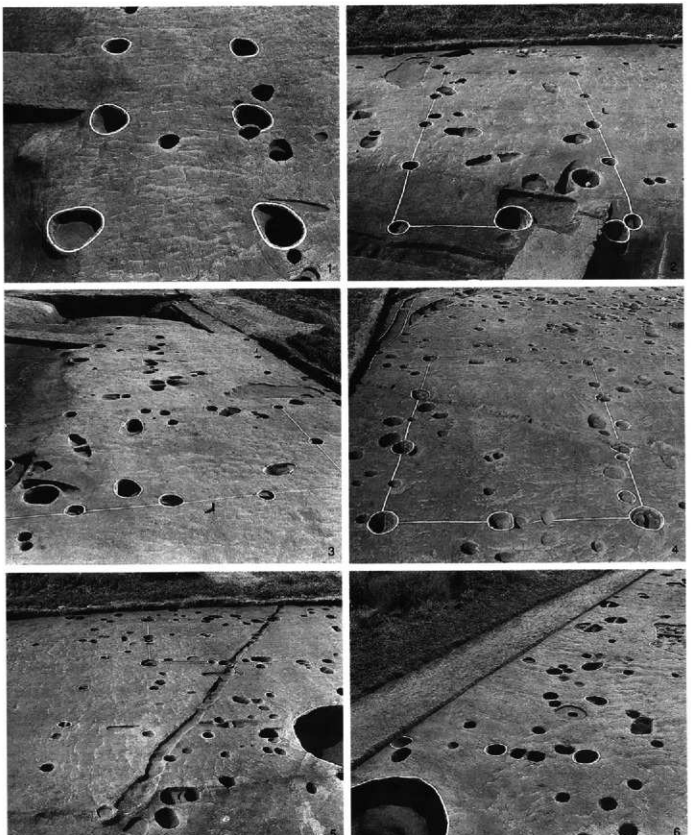
図版 20



1　46区北部(南上空から)

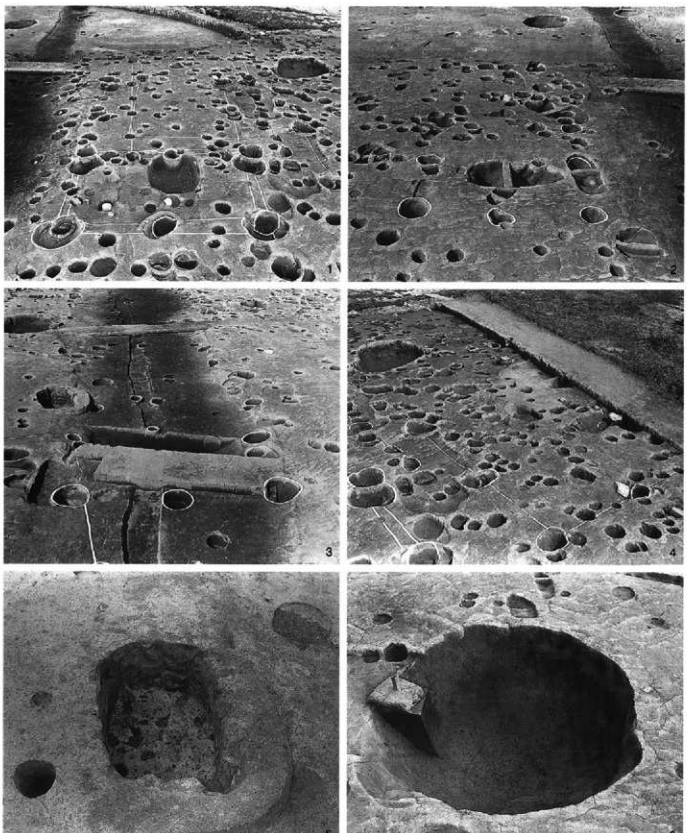


2　46区北西部(北上空から)

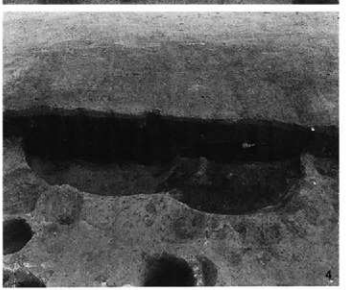
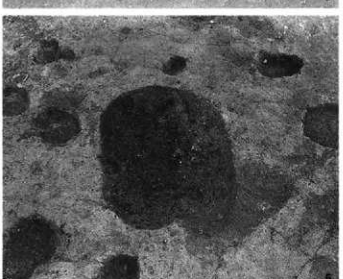


1　46区0401掘立柱建物(北から)　　2　46区0402掘立柱建物(東から)
3　46区0403掘立柱建物(北から)　　4　46区0404掘立柱建物(南から)
5　46区0405掘立柱建物(東から)　　6　46区0407掘立柱建物(北から)

図版 22

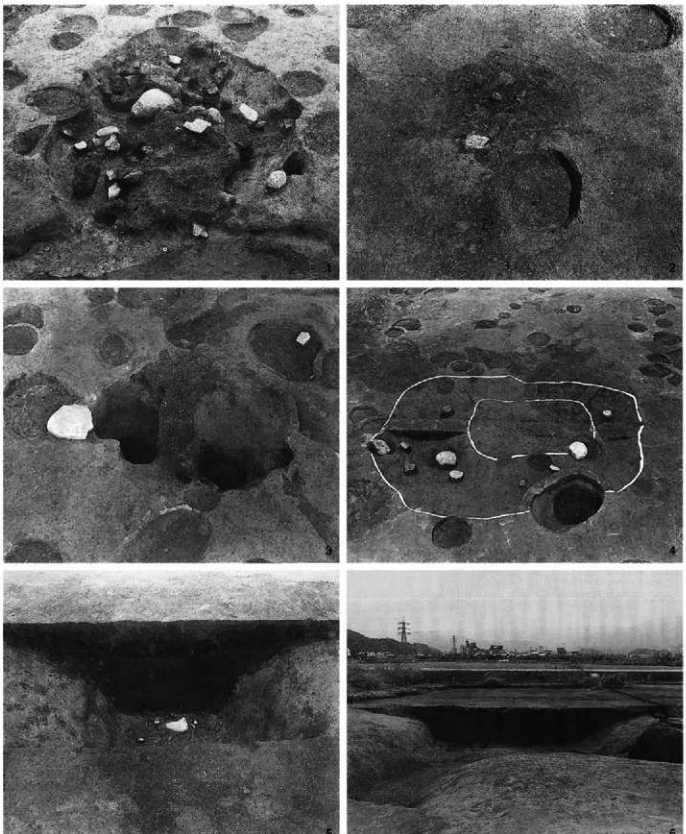


1　46区0408～0411掘立柱建物(南から)
2　46区0412掘立柱建物(南から)
3　46区0413掘立柱建物(南から)
4　46区0414掘立柱建物(南西から)
5　46区0305土坑(南から)
6　46区0310土坑(北から)

1　46区0333土坑(南から)　　2　46区0338土坑(南から)
3　46区0393土坑(南から)　　4　46区0631・0632土坑(西から)
5　46区0309廃滓坑(北から)　　6　46区0319廃滓坑(南から)

図版 24

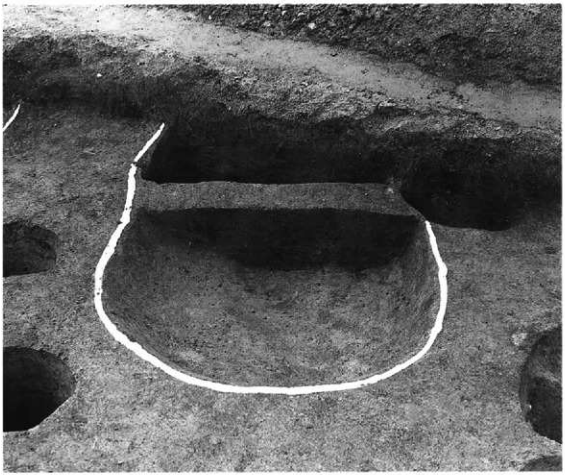


1　46区0336廃滓坑(北から)　　2　46区0339炉(北から)
3　46区0342炉(西から)　　4　46区0321周溝遺構(南から)
5　46区0301溝土層(北から)　　6　46区0301・0672溝土層(北から)

1　50区全景(北から)

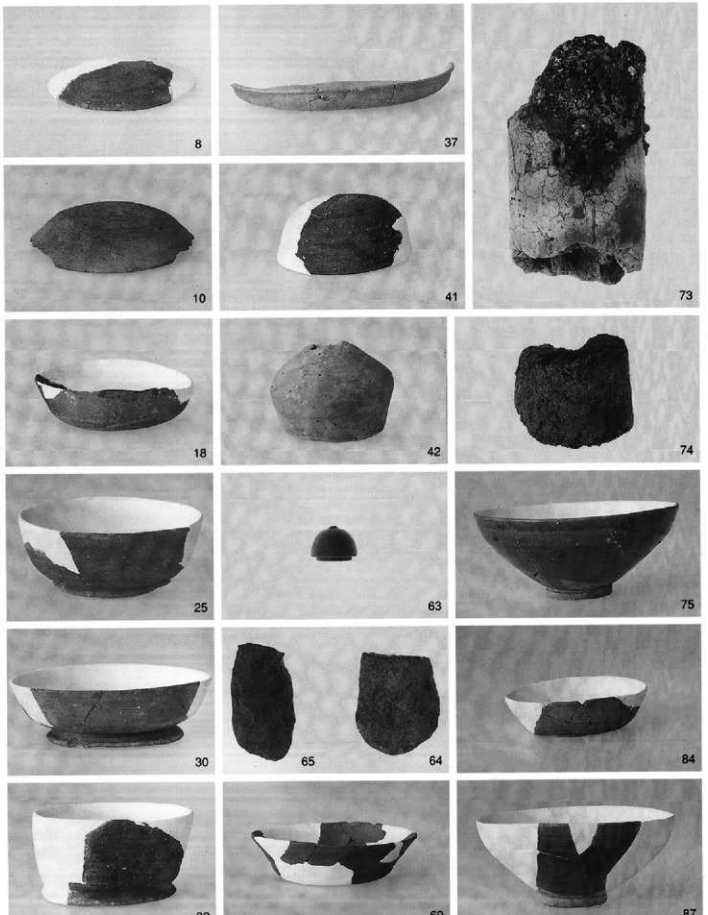
2　50区全景(南から)

図版 26



1　50区3003土坑
（東から）

2　50区3009土坑
（南から）

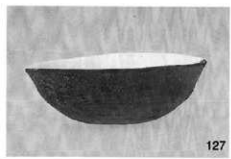


出土遺物 I

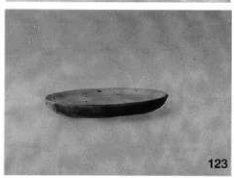
図版 28

91

111

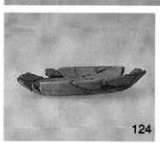

127

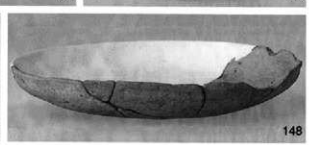
94


123

143

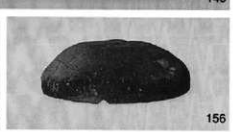
96


124


148

98

125


156

99

162

109

出土遺物 II

159

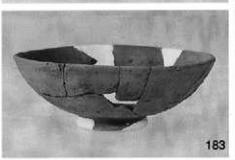
160

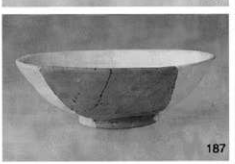
161

163

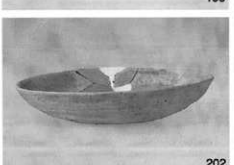
164

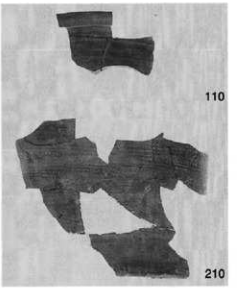
167


183

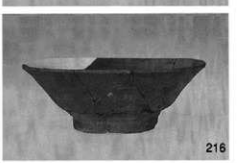

187

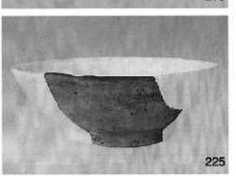
193


202


110
210

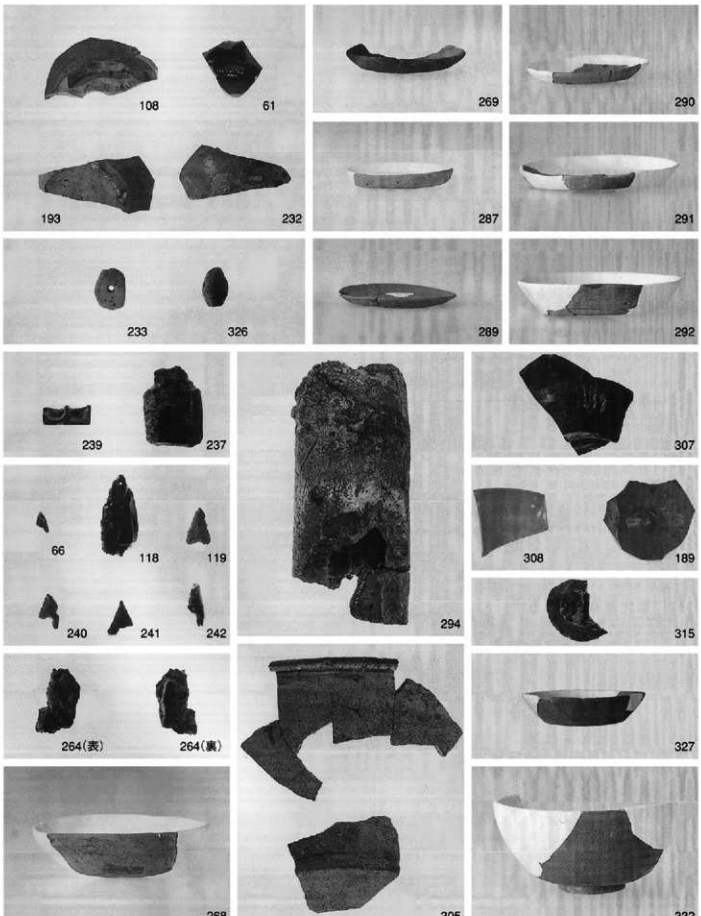
215


216


225

226

図版30


108
61
193
232
269
290
287
291
233
326
289
292
239
237
294
307
66
118
119
308
189
240
241
242
315
264(表)
264(裏)
327
268
305
332

出土遺物Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第516集

入部 Ⅶ

1997年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8−1

印刷　㈱ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南6丁目6−1